伊那・福島遺跡

—歴史時代・集落跡の調査—

伊那市福島遺跡緊急発掘調査報告

1968 12

伊那市教育委員会

伊那・福島遺跡

—歴史時代・集落跡の調査—

伊那市福島遺跡緊急発掘調査報告

1968 12

伊那市教育委員会

序

長野県は埋蔵文化財の豊富なことで知られ，伊那谷がまたその宝庫であることはかねて専門家によって，あまねく世に紹介されているところであるが，時代の進運により産業開発の波が社会機構を大きく変貌させ，地方の農地造成開田事業としての活動が頻繁になるにつれ，地下の埋蔵文化財が緊急発掘を余儀なくされている。そのため伊那市においてはすでに御殿場遺跡の発掘調査についで，三ッ木遺跡の発掘調査を終り今回さらに福島遺跡の発掘を手がけた。福島遺跡は伊那市の北部，天竜川東岸の大字福島地区に発達した河岸段丘上下段に広く分布している。この度の発掘事業は都合により，そのうちの上段南部に位した1987, 1991, 1993, 1994番地にあたる畑20数アールに限った地域で行われた。この地はもともと水の便に恵まれず，従来畑作より致し方なかったのであるが，巨大な揚水機の開発によって，天竜川から大量の水を段丘上に導くことが可能となり，昭和41年上伊那郡伊那土地改良区（理事長清水国彦）によって65ヘクタールに及ぶ開田事業が計画されたのである。そして昭和42年秋の畑作物収穫直後にはブルトーザーが縦横に走りはじめるとのことであった。このため伊那市教育委員会は当該地区に含まれる貴重な埋蔵文化財の消滅をおそれ，緊急発掘調査による記録保存事業を計画した。事業の計画にあたっては長野県教育委員会文化財担当林茂樹指導主事の熱心な指導と助言を受け諸般の準備を進めた。

福島遺跡はすでに長野県埋蔵文化財包蔵地台帳に登載されて居り，包蔵物の内容は主として古墳時代及び歴史時代の集落跡である。したがって縄文，弥生時代に比し比較的新しい時代であるだけに，当時の農耕文化を知る上には極めて有力な資料が豊富に含まれている地域である。今回の発掘調査にあたって伊那市教育委員会は前回までの方法を変え，これを全面的に大学の研究室に委託して行なう方針のもとに林主事の御意見を伺ったところ同意を得た。そこで大学をどこにするかの斡旋及び決定を一切同主事に一任して進めた。その結果国士館大学に依頼することとなり同大学の大川清助教授に委託することとなった。ところが補助金等助成事業に関係して国の意見もあり，最終的には伊那市教育委員会が事業の主体者であることには変りがないが，実質的には国士館大学による発掘調査である

ということになった。以後後文に見られるような経過をたどって発掘調査は進められたが，事前調査によって予想された以上に，その包蔵地は広範で，発掘を予定した地域からさらに段丘添いに北の方面へ，さらには東部手良地区にわたる一大集落地跡であることをつきとめ，遺物には須恵器のほかにりっぱな灰釉陶器をみると同時に，鉄製品また焼けた鉄屑等の豊富なことが特徴づけられる等非常な成果があった。その間文部省の埋蔵文化財担当亀井技官の視察があり，貴重な遺跡として今後の保存方につき熱心な御助言を賜わるほどであった。その間大川助教授の精力的な努力と厳格な指導により同教授に引率された大学生男女14名の，文字通り土にまみれて炎熱下の疲れを知らぬ作業活動と，発掘に参加された地域の人々，小中学生，郡下の高校生，市内外の文化財関係者等の献身的な御協力，ことに大学発掘班が福島区の公会堂に宿泊したことから，区長松崎親助氏及び関係者のなみなみならぬ諸般の御協力を得たこと，また同地区三沢八郎開田委員長，土地所有者等の深い御理解と御助力に対し，教育委員会として深甚なる感謝の意を表わすものである。時あたかも酷暑の候不便な野外での重労働でありながら一同何等の故障もなく，お互に楽しく作業に終始できて所期の目的を達し得たことを心から有難く思っている次第である。

さて，その後一年余，尨大な発掘品の整理に鋭意専念され，こゝに早くも正報告が上梓されることになったことはひとえに国士館大学助教授大川清氏を中心とした同大学考古学研究室学生諸君の賜であり，発掘主体関係者一同を代表し，厚く御礼申し上げる次第です。

本書が地元伊那市の歴史究明のみならず，広く日本の考古学会に大きな役割を果すことを念じて序としたい。

昭和43年10月10日

伊那市教育長

小林重男

上梓のことば

長野県考古学会研究報告の第6冊として，国士館大学助教授大川清先生の調査研究による伊那・福島遺跡を当てることのできたのは望外の喜びである。

伊那市龍東の第4段丘上の高燥台地に，灰釉陶器を中心とした，きわめて特異な上代遺跡が存在することは，はやくから林　茂樹氏らの注意にのぼっていた。昭和42年においてポンプアップされて，からくも開田された地籍であってみれば，むろん水稲農村集落とは考えにくい土地柄であった。室町期の諏訪古文書に牧福島という呼称でてくる村落といかなる関係があるか，また，古代の東山道との何等かの関連など，いろいろな想像のうちにおかれていた。

今回，開田工事によって一応壊滅のかたちとなる悲運のうちに，僅かな時間を得て，大川先生ほか国士館大学研究室各位の努力により，その部分とはいえ，正鵠の記録を残し得たことは，誠に遺憾のうちにも，望外のよろこびであった。

この労作を本会にゆだねられた大川清先生，さらに出版にさいして，強力な御援助を下さった伊那市教育委員会に対して厚く御礼を申し上げたい。

1968.10.10

長野県考古学会会長

藤　森　栄　一

例　言

1　本書は，本委員会が実施した福島遺跡の調査報告中特に図版，実測図を多用して資料集的にまとめたものである。

2　本文執筆は下記の通りである。

発掘調査日誌―本会事務局　住居址―戸田有二氏　遺物―高橋章氏・伊藤博幸氏

以上を調査担当者国士館大学助教授大川清氏が補訂し，全体をまとめた。

3　図版，挿図作成は遺跡実測図戸田有二氏，遺物実測図高橋章・伊藤博幸両氏が主として当り，田中義和・井博幸，阿部恭平各氏にも御援助いただいた。また遺跡写真は大川清氏，遺物写真は国士館大学技師高橋義男氏におねがいした記して感謝する次第である。

4　遺物中，ガラス（第18図版―11）については東京教育大学助教授増田精一氏の御教示を得た。このガラスはソーダガラスで，製作地は日本ではないらしく，本遺蹟（D―13）に属するものであればきわめて興味深い。詳細は後日別篇にゆずりたい。

5　住居址実測図中S_3，H_2，K_2，T_4と記してあるものは「S」は須恵器，「H」は土師器「K」は灰釉陶器，「T」は鉄器などで，番号は一覧表記載のものである。

土器一覧表の種別も上記と同様である色調のうち，内面の「黒」というのは黒色土器（坪井清足氏提唱）である。

出土位置の「床」は床面または床にきはめて近い場所，「埋」は「床」以外の竪穴内の埋積土中出土のものである。焼成の「A」は良好，「B」は普通，「C」は不良である。

6　本書の編集は国士館大学考古学研究室が専ら当り，印刷業務は長野県考古学会幹事樋口昇一氏が当った。厚く御礼申し上げる。

本　文　目　次

序　伊那市教育長　小林重男

上梓のことば　長野県考古学会長　藤森栄一

例言

はじめに …… 1

発掘調査日誌 …… 3

発掘調査 …… 8

A地区 …… 9

A１号住居跡 …… 10

A２号住居跡 …… 13

A３住居跡号 …… 16

A４号住居跡 …… 18

A５号住居跡 …… 20

A６号住居跡 …… 24

B地区 …… 26

B16号住居跡 …… 27

B17号住居跡 …… 32

B地区掘立柱建物遺構 …… 35

C地区 …… 41

C７号住居跡 …… 41

C８号住居跡 …… 48

C９号住居跡 …… 50

C10号住居跡 …… 50

D地区 …… 58

D11号住居跡 …… 58

D12号住居跡 …… 63

D13号住居跡 …… 64

D14号住居跡 …… 71

目　次

D15号住居跡……72
D地区掘立柱建物遺構……77
（住居跡・掘立遺構柱穴深度一覧表）……83
むすび……84

図 版 目 次

第1図版 (上)A6・1号跡 (下)A1号跡
第2図版 (上)A2号跡全景 (下)A3号跡
第3図版 (上)A5号跡全景 (下)A地区全景
第4図版 (上)B地区全景 (下)B4掘立遺構全景
第5図版 (上)B16号跡全景 (下)B17号跡カマド附近
第6図版 (上)C8・9・10号跡全景 (下)C8・9・10号跡全景
第7図版 (上)C9号跡南東隅焼材の遺存状態 (下)C10号跡カマド
第8図版 (上)C地区全景 (下)C7号跡全景
第9図版 (上)D地区全景 (下)D11号全景
第10図版 (上)D11号跡カマド附近 (下)D12・13号跡全景
第11図版 (上)D14・15号跡全景 (下)D18号跡全景
第12図版 (1)B16号跡カマド (2)B16号跡カマドの芯
(3)B16号跡カマド石 (4)A2号跡カマド (5)C7号跡カマド
(6)D11号跡カマド (7)C9号跡柱穴(P)
(8)C9号跡遺存の焼材
第13図版 (上)(中)C9号跡の toilet stone の出土状態
(下)C7号跡東壁寄り北西の toilet stone の出土状態
第14図版 (左上)C7号跡東壁中央部より発見された長方形砂岩(砥石)
(右上)A5号跡カマド附近出土の鍔付カメ型土師器片
(左中)ピンセット型鉄製品の出土状態(B16)
(右中)鉄鏃の出土状態(D13)
(下)B16号跡南東部の周溝に接した貼床中より出土の高台付須恵器
(南寄り)
第15図版 (左上)右上写真の鉄斧(C7)
(右上)C7号跡北側周溝からの鉄斧その他の出土状態

図 版 目 次

(中)右上写真の鉸具，銙，土錘の出土状態(C 7)
(下)鉄製紡錘車の出土状態(A 5号跡)
第16図版　遺物(1)
第17図版　遺物(2)
第18図版　遺物(3)
第19図版　遺物(4)
第20図版　遺物(5)
第21図版　遺物(6)
第22図版　遺物(7)
第23図版　遺物(8)
第24図版　遺物(9)
第25図版　遺物(10)
第26図版　遺物(11)
第27図版　遺物(12)
第28図版　遺物(13)
第29図版　遺物(14)
第30図版　遺物(15)
第31図版　遺物(16)
第32図版　遺物(17)
第33図版　甕型須恵器体部内外面の叩き目文
第34図版　甕型須恵器体部内外面の叩き目文

挿 図 目 次

Fig. 1 遺跡附近地形図1/75,000 …… 2
Fig. 2 遺跡の遠望 …… 3
Fig. 3 伊那市長等の見学（C 9 号跡にて） …… 5
Fig. 4 活躍する伊那市役所のブルドーザー …… 6
Fig. 5 発掘調査全域図1/1200 …… 9
Fig. 6 A 1 号跡実測図1/80 …… 10
Fig. 7 A 1 号跡カマド実測図1/40 …… 10
Fig. 8 A 1 号跡土器実測図1/3 …… 11
Fig. 9 A 1 号跡鉄製品実測図2/3 …… 12
Fig. 10 A 2 号跡実測図1/80 …… 13
Fig. 11 A 2 号跡カマド実測図1/40 …… 14
Fig. 12 A 2 号跡土器実測図1/3 …… 15
Fig. 13 A 3 ・ 4 号跡実測図1/80 …… 16
Fig. 14 A 3 号跡カマド実測図1/40 …… 16
Fig. 15 A 4 号跡カマド実測図1/40 …… 16
Fig. 16 A 3 号跡土器実測図1/3 …… 17
Fig. 17 A 3 号跡鉄製品実測図2/3 …… 17
Fig. 18 A 4 号跡土器実測図1/3 …… 19
Fig. 19 A 4 号跡鉄製品2/3 …… 19
Fig. 20 A 5 号跡カマド実測図1/40 …… 19
Fig. 21 A 5 号跡実測図1/80 …… 20
Fig. 22 A 5 号跡土器実測図1/3 …… 21
Fig. 23 A 5 号跡土器実測図1/3 …… 22
Fig. 24 A 5 号跡土錘実測図2/3 …… 23
Fig. 25 A 5 号跡鉄製品2/3 …… 23
Fig. 26 A 6 号跡実測図1/80 …… 24
Fig. 27 A 6 号跡カマド実測図1/40 …… 24

挿 図 目 次

Fig. 28　A 6 号跡土錘実測図2/3 ……25
Fig. 29　A 6 号跡Toilet stone 実測図1/3 ……25
Fig. 30　B地区遺物実測図1/3 ……26
Fig. 31　B16号跡実測図1/80……27
Fig. 32　B16号跡カマド実測図1/40……28
Fig. 33　B16号跡鉄製品実測図2/3 ……28
Fig. 34　B16号跡Toilet stone 実測図1/3 ……28
Fig. 35　B16号跡土器実測図1/3 ……30
Fig. 36　B16号跡土器実測図1/3 ……31
Fig. 37　B17号跡実測図1/80……32
Fig. 38　B17号跡カマド実測図1/40……32
Fig. 39　B17号跡土器実測図1/3 ……33
Fig. 40　B17号跡鉄製品実測図2/3 ……34
Fig. 41　B地区掘立遺構配置図1/180 ……36
Fig. 42　B 1 号掘立遺構実測図1/80……37
Fig. 43　B 2 号掘立遺構実測図1/80……38
Fig. 44　B 3 号掘立遺構実測図1/80……39
Fig. 45　B 4 号掘立遺構実測図1/80……39
Fig. 46　B 5 号掘立遺構実測図1/80……40
Fig. 47　B 6 号掘立遺構実測図1/80……40
Fig. 48　B 7 号掘立遺構実測図1/80……41
Fig. 49　B 9 号掘立遺構実測図1/80……41
Fig. 50　C 7 号跡実測図1/80……42
Fig. 51　C 7 号跡カマド実測図1/40……42
Fig. 52　C 7 号跡土器実測図1/3 ……43
Fig. 53　C 7 号跡土器実測図1/3 ……45
Fig. 54　C 7 号跡長方扁平石拓影1/4 ……46
Fig. 55　C 7 号跡土錘実測図2/3 ……46
Fig. 56　C 7 号跡Toilet stone 実測図1/3 ……46

Fig. 57　C 7 号跡青銅・鉄製品実測図2/3 ……47
Fig. 58　C 8 ・ 9 ・10号跡実測図1/80……49
Fig. 59　C 8 号跡土器実測図1/3 ……51
Fig. 60　C 8 号跡鉄製品実測図2/3 ……50
Fig. 61　C 9 号跡土器実測図1/3 ……53
Fig. 62　C 9 号跡鉄製品実測図2/3 ……55
Fig. 63　C 9 号跡Toilet stone 実測図1/3 ……56
Fig. 64　C10号跡土器実測図1/3 ……57
Fig. 65　D11号跡実測図1/80……58
Fig. 66　D11号跡カマド実測図1/40……59
Fig. 67　D11号跡土器実測図1/3 ……59
Fig. 68　D11号跡土器実測図1/3 ……60
Fig. 69　D11号跡青銅・鉄・石製品実測図2/3 ……62
Fig. 70　D11号跡土錘実測図2/3 ……62
Fig. 71　D11号跡Toilet stone 実測図1/3 ……63
Fig. 72　D13号跡カマド実測図1/40……64
Fig. 73　D12・13号跡実測図1/80……65
Fig. 74　D12号跡土器実測図1/3 ……66
Fig. 75　D12号跡土器実測図1/3 ……67
Fig. 76　D12号跡鉄製品実測図2/3 ……67
Fig. 77　D12号跡Toilet stone 実測図1/3 ……67
Fig. 78　D13号跡土器実測図1/3 ……69
Fig. 79　D13号跡土錘実測図2/3 ……70
Fig. 80　D13号跡鉄製品実測図2/3 ……70
Fig. 81　D14・15号跡実測図1/80……71
Fig. 82　D14号跡カマド実測図1/40……72
Fig. 83　D14号跡土器実測図1/3 ……73
Fig. 84　D14号跡土錘実測図2/3 ……74
Fig. 85　D14号跡鉄製品実測図2/3 ……75

挿 図 目 次

Fig. 86　D14号跡Toilet stone 実測図1/3 ……75
Fig. 87　D15号跡土器実測図1/3 ……76
Fig. 88　D15号跡土錘実測図2/3 ……77
Fig. 89　D15号跡鉄製品実測図2/3 ……77
Fig. 90　D地区土器実測図1/3 ……77
Fig. 91　D地区掘立遺構配置図1/180 ……78
Fig. 92　D10号掘立遺構実測図1/80 ……79
Fig. 93　D11号掘立遺構実測図1/80 ……80
Fig. 94　D12号掘立遺構実測図1/80 ……81
Fig. 95　D13号掘立遺構実測図1/80 ……81
Fig. 96　D14号掘立遺構実測図1/80 ……82

はじめに

昭和41年福島地区の農地造成開田事業計画が進むにつれ，同地区の埋蔵文化財発掘調査計画も具体的になり，第1に国及び県の補助金を仰ぎ国の助成事業として許可をとることができた。一方この発掘調査を進めていく本部の人的組織として次のような委員会及び調査団をもった。

福島遺跡発掘調査委員会

委員長	伊那市教育委員会	小林	重男
委員	長野県文化財保護委員	向山	雅重
	伊那市文化財審議委員長	有賀	京一
	上伊那教育会長	松沢	一美
	伊那土地改良区理事長	清水	国彦
	伊那市文化財審議委員	松沢	新右ヱ門
	〃	三沢	三竿

同調査団

団長	国士館大学文学部 考古学研究室	大川	清
団長補佐	長野県教育委員会指導主事	林	茂樹
団員	上伊那郡宮田村	友野	良一
〃	伊那市中央区	御子柴	泰正
〃	伊那市西町	根津	清志
〃	上伊那郡宮田村	太田	保
事務局	春日社会教育課長，保坂係長，田中主事		

7月17日，伊那市教育委員会において福島遺跡緊急発掘調査委員会を開き，林団長補佐の出席のもとに今後の調査に関する基本事項をきめ，その後現地に向かい表面調査をした。

7月19日，東京より大川団長の出席を得て再び現地の表面調査を行ない，調査の日時，方法，地域設定など具体的な取りきめを行なった。この2回の調査によって問題になったことは，包蔵範囲が非常に広くかつ豊富であること，したがってもっともよい場所を選定し，限られた日程で能率的に如何に実績をあげるかということであった。

7月27日，市教育委員会において調査委員会を開く。遺跡発掘計画について次の事項を確認する。遺跡発掘調査委員会規定，工程仕様，発掘工程，工事費用概算，作業員の確保等，その

はじめに

うち発掘工程を8月1日諸準備，同2日，3日トレンチ作業，同4日より本発掘作業とし，11日までの10間ときめた。しかし実際には発掘調査の経過にみられるように，はじめ予定しなかったブルドーザーの力を借りるなど作業量のぼう大なため，この発掘工程は変更を余儀なくされ，お盆の14日，15日を休み延15日を要して8月17日に終了した。

調査補助員

石田雅樹，花岡尚美，今泉　功，原　伸滋，田中幸雄，石山勇一，戸田有二，
高橋　章，阿部峻六，福田恭子，上出栄子，西本三平（以上国士館大学学生）
鈴木一和雄，中司照世（以上早稲田大学学生）

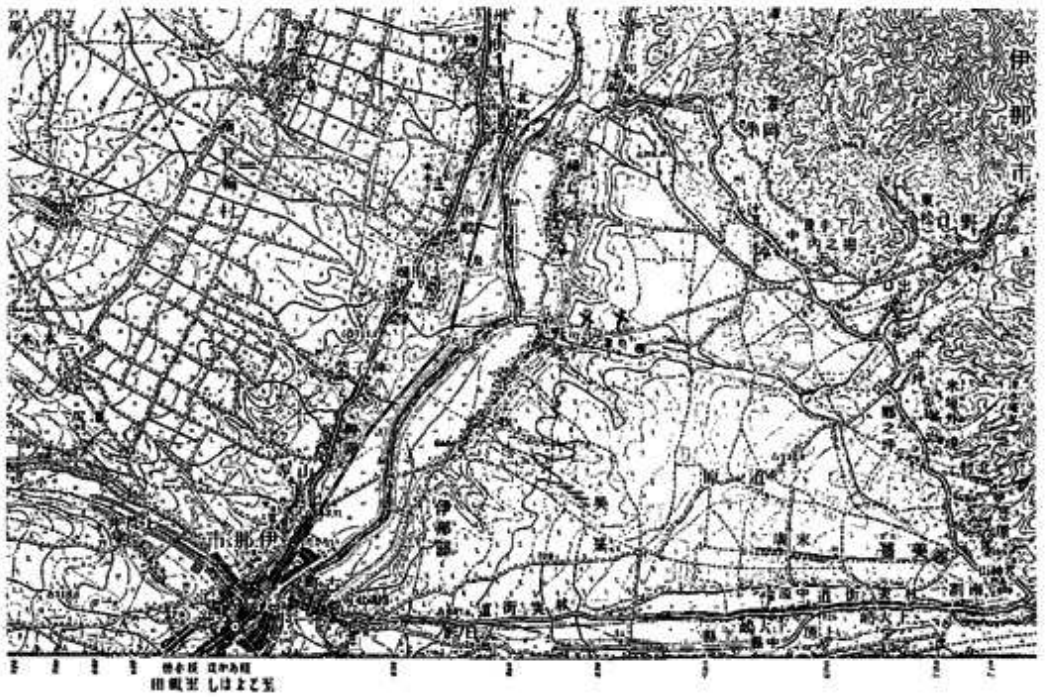


Fig. 1　遺跡附近地形図 1/75,000

発掘調査日誌

8月1日（火）晴

午後1時20分大川団長，並びに国士館大学学生9名福島公民館に到着，遺跡発掘予定地「ニガナ洋」の現地下見，ダンプカー1台，ライトバン1台にて発掘諸材料の運搬作業，発掘地を第1候補地の「ニガナ洋」に決定する。

発掘地南側山林内に本部並びに休憩用の幕舎を4張り造る。林道に飯台を設置する。林道，農道のヤブ切り作業，迂回路，標識板，発掘現場案内板4を設置する。

午後5時40分，松崎区長宅において明2日より発掘作業に伴う打合せをおこなう。

8月2日（水）晴

A地区　地番362　地主　藤田　覚，　耕作者　三沢　淳

この地区に巾約1m，間隔約3m，長さ約36mのトレンチを4本入れる。トレンチによって住居跡6軒分を確認し各跡の発掘にかかる。5号跡より刀子，鉄製紡錘車の出土があった。

午後4時臨時電話架設完了。

8月3日（木）晴

電話本日より通話可能，事務，作業連絡上好都合。

A地区各号跡の埋積土を除去し，壁，床面の整理作業を進める。

C地区　地番361　地主　三沢初男　耕作者　三沢　多

A地区の見透しがついたので北側のC地区を発掘地とし，巾約1m，間隔約3m，長さ約20mのトレンチを3本入れる。

市議会六波羅文教厚生委員長，三沢孔文先生の視察があった。

Fig. 2　遺跡の遠望

発掘調査日誌

8月4日（金）晴

A地区1，2，3，4号跡は床面の清掃と実測にかかる。5号跡は若干おくれ床面，壁の清掃をおこなう。

C地区は，トレンチを拡張する。黒色土の堆積がA地区に比べて厚く作業は困難であった。ために作業能率があがらない。午後2時30分，伊那市のブルドーザー到着，早速ローム層上面まで除土する。

D地区　地番360　地主　三沢初男　　耕作者　三沢　多

ブルドーザーによってローム層上面までの除土をおこなう。面積は41×6m。

8月5日（土）晴

本日より早稲田大学学生　鈴木，中司両君補助調査員として参加する。

A地区は，1，4，5号の実測をおこなう。

B地区　地番369　地主　三沢文雄　　耕作者　三沢　淳

午前中はブルドーザーにてローム層上面までの全面を除土した。面積は51×22m。

D地区

ブルドーザーで除土した後，巾約1m，間隔3mのトレンチを4本設定，発掘を進めた。午後になって住居跡を確認するとともに，掘立柱の建築遺構と思われる掘形を多数発見した。

C地区は今日までの盛土をブルドーザーにて移動した。また一部拡張部の除土をおこなう。

手良台地から水準点の移動により，調査地域一帯は標高721m前後であることを確認した。

写真撮影用ヤグラの柱4本，パネル2枚宮下建設より借用，市のトラックにて現場へ運搬。

8月6日（日）晴

C地区は住居跡の埋積土の除去にかかり，一輪車にて土の運搬をおこなう。

D地区は住居跡とその間に掘立遺構の柱穴が多数発見されたので，全面発掘をおこなうこととし，一輪車を総動員して土の運搬をおこなった。

飯島文化財審議委員の視察があった。

8月7日（月）晴

C地区は昨日に引き続き第7号跡を掘り下げ床面を出す，鉄斧，腰帯金具などを出土した。西側の盛土をブルドーザーにて移動した。

D地区の東側カンラン畑をブルドーザーにて除土し，D地区の拡張をおこなった。

小林委員長，大川団長等関係者が現地にて打合せをおこない，発掘終了が12日であるから，これ以上手を拡げず，B，D地区に重点をおき発掘を急ぐこととした。連日の猛暑で作業員も疲労甚だしく能率は低下し，昼休みも1時間を1時間30分に延ばす。飲料水はは1日1石近くを消費し，水の運搬に汗だくであった。

Fig. 3　伊那市長等の見学（C 9号跡にて）

8月8日（火）晴

C地区は7号跡の清掃に移る。

D地区西側の盛土をブルドーザーにて移動する。住居跡埋積土の発掘と一輪車での土運搬。池上文化財審議委員の視察があった。

8月9日（水）晴

B地区に巾約1m，間隔3mのトレンチを5本設定，掘立遺構3，住居跡3を発見。

C地区は各住居跡の清掃，実測，写真撮影をおこなう。

D地区掘立遺構の清掃，ヤグラよりの写真撮影をおこなう。

林毎日支局長，根津産経支局長，田中南日支局長，大谷中日記者，春日伊那毎記者の取材があった。なお，青木伊那教育事務所長，武井主事，伊藤伊那市収入役の視察があった。

8月10日（木）晴

B地区16号跡では掘立遺構が重なっていた。床面よりピンセット状鉄製品の出土があった。

C地区8号跡の壁を出し，床面をもとめる。敷物としてつかったものか不明であるが炭化した藁が発見された，灰釉片，鉄滓などが出土した。10号跡柱穴に焼材（柱）の一部遺存してい

Fig. 4　活躍する伊那市役所のブルドーザー

るものがあった。

D地区南西の重複住居跡（14，15）の埋積土の発掘をおこなう。小型鉄斧などの出土があった。

文化財保護委員会亀井調査官，上智大学八幡一郎教授，県ヶ丘高校樋口昇一教諭，岡谷市社教課長，同社教係長等の視察があった。

8月11日（金）晴

B地区各住居跡，掘立遺構の清掃作業をおこなう。

C地区各住居跡は実測写真撮影。

D地区は14，15号の床出し作業，掘立遺構の整理をおこなう。

亀井調査官が昨日に引続き来場，市長も来場され，大川団長外関係者と保存について打合せをおこなう。大規模な遺跡であるため是非市として土地を買収して，保存してほしいとの要請が亀井調査官，大川団長，県林主事等より強く出された。市長も考慮を約す。

目標の10日をすぎたが作業員の不足に加え，暑さのため思ったより仕事がおくれ，未完の部分があるので13日まで続行することに決めた。

長野県考古学会の河西清光，桐原健，宮坂光昭，武藤雄六，中村竜雄氏等の視察があった。

8月12日（土）晴

B地区住居跡並びに掘立遺構の清掃。

C地区は8，9，10号の実測。

D地区は11，14，15号の床面整理と各掘立遺構の実測。

地元福島区内に大川団長の現場説明を有線放送で予報したところ，午後1時10分から2時まで，暑さの中を42名が来聴した。

明日から盆に入るため地元の作業員は本日限りとなった。

白鳥副議長，井上総務副委員長の視察があった。

8月13日（日）曇のち雨

待ちわびていた待望の雨がきた。これ以上雨がないと散水して写真撮影をしなければならないと思っていたので，慈雨といった感じだ。しかしもう少し早く一雨くると良かったのだが。

今日から盆のため地元作業員はみえないので，大学生と市の職員だけとなった。

B地区，C地区とも雨間をみて実測を実施，D地区は清掃をおこなった。

8月14日（月）曇のち雨

朝7時30分頃までひどい雨だった。9時頃雨も小降りになったので現場へゆく。

B地区16，17号は実測，C地区8，9，10号は実測，D地区は各号跡の実測。

予定日をすぎても間に合わないので学生は暗くなるまで作業し，宿舎の公民館に帰ってくると7時40分頃，風呂に入って夕食は8時すぎ，それから図画，日誌等の整理をすれば10時すぎである。

8月15日（火）曇

A，B，C，D各地区の写真撮影。

B地区16，17号跡は実測。C地区8，9，10号跡は実測。D地区11号，14，15号は実測。

8月16日（水）晴

B地区清掃の後写真撮影。

写真撮影用のヤグラの取りこわし，その他諸材料をトラックにて搬出，それぞれ返済する。

8月17日（木）晴

早朝より遺物の梱包をおこなう。リンゴ箱9，ダンボール箱3，計12梱包。

午後2時30分団長以下学生帰京。

発掘調査

伊那谷には先土器時代から人類の生活が活発に営まれ，きわめて多数の遺跡が知られている。ことに歴史時代になってからは土師器と須恵器に加えて灰釉陶器の併用がこの地方の特色の一つとなっている。上伊那誌（昭和40年刊）によれば，上伊那郡内（市部を含む）の灰釉陶器を出土する地点が80カ所を数えられるとしている。このような灰釉陶器を併用した時期の住居跡はすでに伊那市周辺においては駒ヶ根市東伊那の天竜川に臨む段丘上にある殿村地籍より竪穴式住居跡が発掘調査されている。また，宮田村北割広垣外の岡部地籍から竪穴式住居跡が発掘調査された。[1] さらに，伊那市山寺区鳥居原2997番地の畑から竪穴式住居跡が発掘調査された。[2] これらはいずれも集落としての複数住居跡の調査でなく単独の住居跡であった。[3] これらの住居跡は天竜川の段丘突端や洪積台地の沼沢地に臨む台地上に位置している。

ここに報告する福島遺跡も天竜川東岸の段丘端にあり，土師器，須恵器，灰釉陶器の併用された時期の竪穴住居跡とその後の時期に属すると考えられる掘立柱の建物遺構の構落遺跡である。

発掘地点は3カ所を当初予定していたが，第1地点のみで調査を打ち切らざるをえなかった。

第1地点は福島段丘の南西端に近い一角とし，続いて第2地点はそれよりも北東300m附近，さらに北東200m附近を第3地点とした。各予定地点は何れも天竜川に臨む段丘端に比較的近く，段丘中央部からさらに奥まった手良（てら）部落地区については候補地から除外した。

第1地点については農作物の関係から休閑地または植付前，収穫後の農地を主体に発掘したもので互いに隣接する4地区に分けた。すなわち，A・B・C・D地区とした。この4地区においてはそれぞれ，竪穴式住居跡を発掘，ことにB地区とD地区では掘立柱の建物遺構数棟分を発掘した。

福島区「しも」部落から段丘上へ通ずる農道は段丘上に登りつめると，段丘端に沿ってあるカラマツ林と畑との境附近を手良部落方面に通ずる。この農道が分岐して2本あり，北側の道をA路，南寄りの道をB路と仮称する。B路の南側をA地区，B路の北側でA路の南側，つまりA・B路にはさまれたA地区の北側をC地区。A・B路の分岐点よりA路の北側をB地区。C地区の東側に隣接したA路とB路にはさまれた地域がD地区である。C地区とD地区の中間には発掘土を積み上げたため，その地域の状態は不明であった。

註1　大場磐雄，上川名昭「殿村地区第1号住居址について」信濃4巻11号
註2　太田保「宮田村岡部土師住居址の調査概報」伊那路3巻12号
註3　林茂樹，堀口貞幸「伊那市鳥居原遺跡の発掘調査」信濃17巻1号

A 地 区

A地区は40×20mの範囲を発掘し，重複住居を含めて6軒の竪穴式住居跡を確認した。本地区はB路より南西方へ逐次ゆるい勾配でさがり，やがて段丘崖へ達する。したがって，この地区の黒色腐蝕土は南西方への流れがあってB・C・D地区にくらべて薄く，平均して30cm程度の堆積であったから，発掘はきわめて楽であった。

つぎに各住居跡について調査の概要を図示して表記し，出土遺物についても図示して概要を表記する。

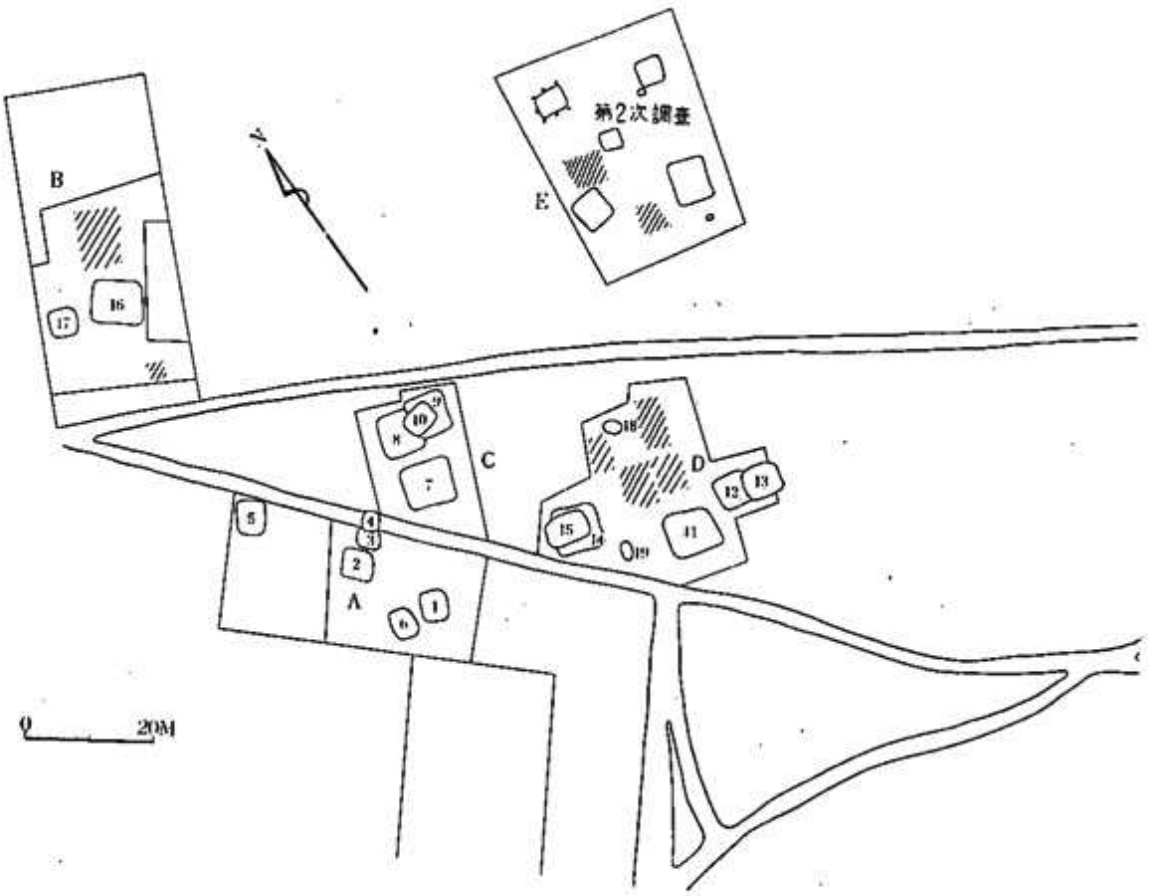


Fig. 5 発掘調査全域図 1/1200

A1号住居跡 (Fig6・7, 第1～3図版)

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
一辺 3.7m の方形平面で，カマドを南東壁の中央に設ける竪穴式住居跡である。	側壁上部はローム面まで除土したため，壁の立ちあがりはきわめて低い，ことに南西方はローム層上面が南に傾斜しているため，わずかな立ちあがりであった。四囲の壁は南東（カマドあり）約22cm，北西約20cm，南西約18cm，北東約21cm で直立せず外傾している。	床はローム層そのもので，遺存状態は良好，ほぼ平らである。	周溝はあまり明瞭ではないが，北東並びに北西側壁下に巾約5～10cm，深さ約5～10cm 程度のものを認めることができた。	柱穴らしき穴は10個程を認めえたが，P_1～P_4 を主柱とし，$P_{7,10}$ と $P_{5,8}$ を補助の柱穴とすることができるであろう。	カマドは南東壁のほぼ中央にあり側壁の外に半円形状に掘りこみ，石を芯とし，粘土で構築している。火床は方形で，あまり良く焼けていないが，わずかに赤色を呈していた。煙道は認められない。	

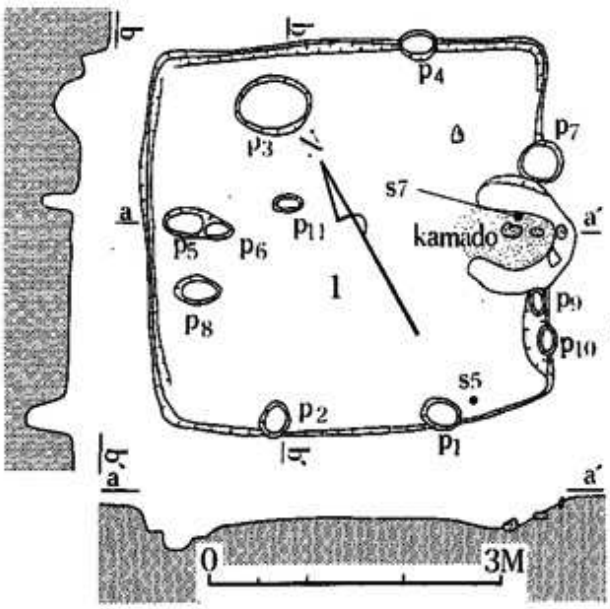


Fig.6 A1号跡実測図 1/80

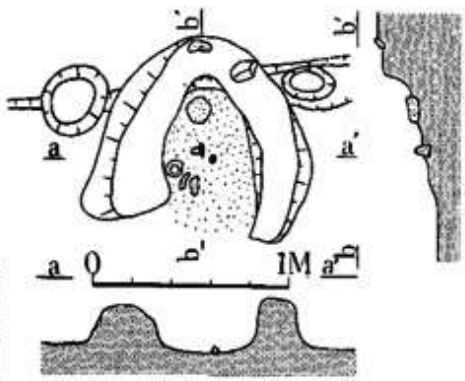


Fig.7 A1号跡カマド実測図 1/40

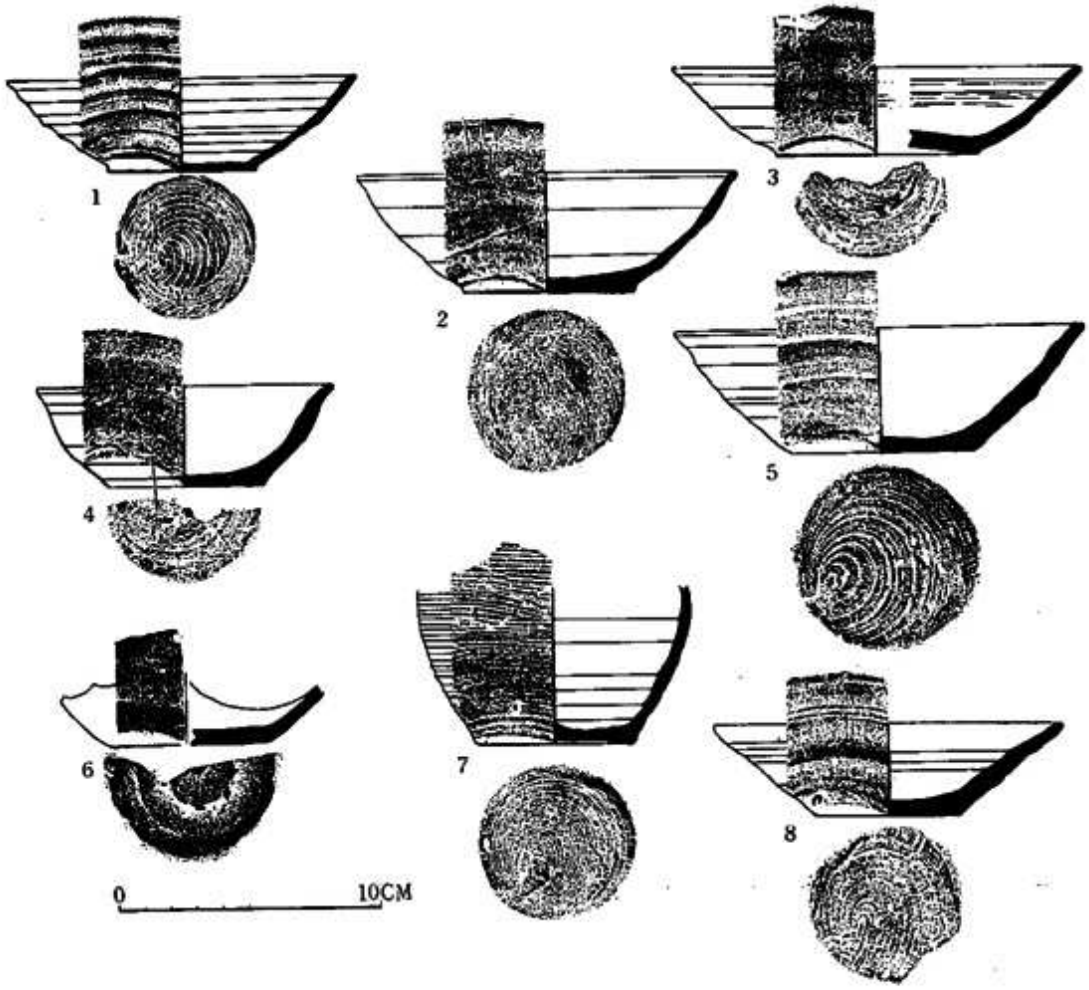


Fig. 8　A１号跡土器実測図 1/3

A 1 号跡土器一覧表 (Fig 8，第20図版)

器形	種別	番号	図版番号	出土位置	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	手法 体部	手法 底部	手法 口辺	備考
坏	S	1		床	淡黄	淡黄	粗砂粒若干含有	C	ロクロ	糸切		粗製。
坏	H	2		床	淡褐	淡褐	雲母，粗砂粒若干含有	A	ロクロ	糸切		口辺一部欠損，底部煤附着。
坏	H	3		埋	黒	黒	粗砂粒含有。	C	ロクロ	糸切		粗製。
坏	H	4		床	黒	褐	雲母，粗砂粒若干含有。	A	ロクロ	糸切		暗文。
坏	H	5	20—1	床	黒	黄褐	粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		外面一部に煤附着。
坏	S	6		埋	灰褐	灰褐		A	ロクロ	糸切		内外面共に焼成時の煤附着，口辺欠損。
壺	H	7	20—2	床	褐	黒褐	雲母，粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切	欠	外面に櫛目状痕。
坏	H	8		床	黒	赤褐	良質	A	ロクロ	糸切		

鉄製品 (Fig 9)

名称	番号	図版番号	出土状況図版番号	備考
刃子	t_1			両端欠失。
釘	t_2	19—3		先端欠失，床面直上出土

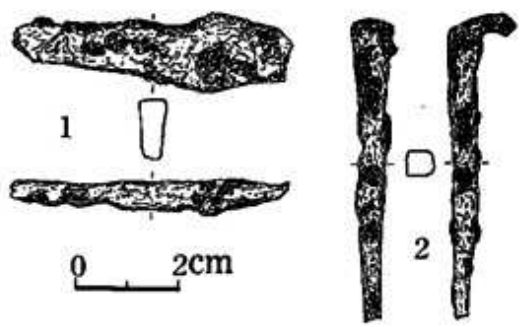


Fig. 9　A 1 号跡鉄製品実測図 2/3

A２号住居跡（Fig10，第２・３図版）

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
一辺4.8×4mの方形平面で，カマドを北西壁の中央よりほぼ西に偏した位置に設けた竪穴式住居跡である。	側壁上部はローム層上面まで除土したため，壁の立ちあがりは，きわめて低い。ことに南西方は，ローム層上面が南に傾斜しているため，わずかな立ちあがりであった。四囲の壁は北西（カマドあり）約28cm，北東約22cm，南東約22cm，南西約26cmで直立せず外傾している。	床はローム層そのものでほぼ平らである。 発掘によって床の色調変化と床の硬さからこの住居跡のカマドの右側と手前の巾約１mの逆Ｌ字状の部分がカマドを中心とした方形範囲と判然と区別し得た。これは逆Ｌ字状部分が後日拡張されたものであることを証するものであった。	周溝らしきものはまったく認めることができなかった。	柱穴らしき穴は，南西隅より約１mの所に２個あった。その他の柱穴らしきものは，まったく認めることができなかった。	北西側壁中央より約１m西によった所に構築されている。又カマドは石を芯とし，その上を粘土で構築していた。火床は方形であまりよく焼けていないがわずかに赤色を呈していた。煙道は認められなかった。	

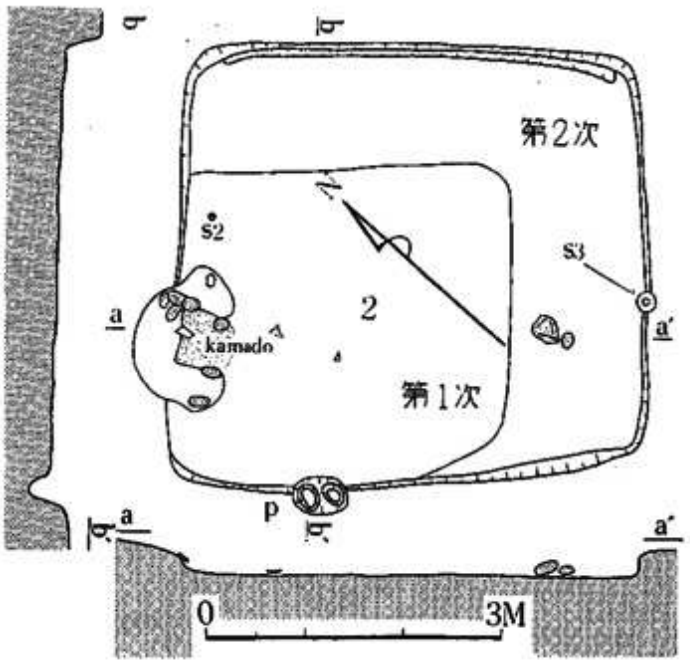


Fig.10　A２号跡実測図 1/80

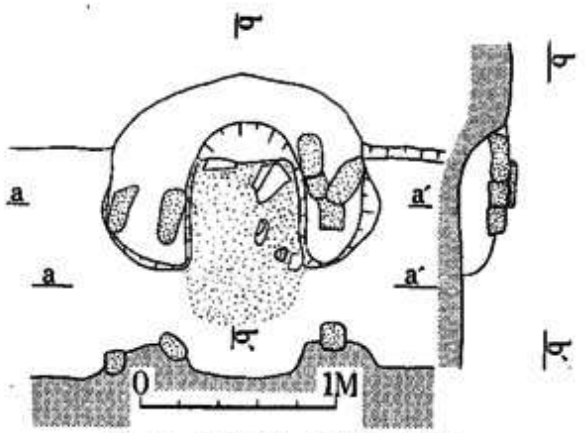


Fig.11　A 2号カマド実測図 1/40

A 2号跡土器一覧表 (Fig12・第16・20・23図版)

器形	種別	番号	図版番号	出土位置	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	手法 体部	手法 底部	手法 口辺	備考
坏	H	1		床	黒	褐	粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		火襷あり，口辺の一部が黒色。
		2	20—3									
坏	H	3	23—1	床	黒	褐	粗砂粒含有	A	ロクロ	ヘラ切	欠	外面底部煤附着，底部に「卍」の墨書。
坏	K	4		床	灰	灰		A	ロクロ	糸切		外面に若干釉薬が附着。
甕	H	5		埋	茶褐	茶褐	雲母含有	A	輪積	欠	横ナデ	外面は櫛目状痕で整形。
壺	H	6	23—2	埋	褐	褐	粗砂粒，雲母含有	A	輪積	欠	横ナデ	外面細櫛目状痕。
甕	H	7		埋	暗褐	暗褐	粗砂粒含有	B	輪積	欠	横ナデ	内外面共に，横ナデ，縦ナデ有。
甕	H	8	23—9	埋	赤褐	赤褐	雲母含有	A	不明	欠		外面細櫛目状痕，煤附着。
甕	H	9		床	褐	褐	雲母含有	A	輪積	木葉		外面櫛目状痕，煤附着。
不明	H	10		埋	褐	褐	雲母含有	A		木葉		
不明	H	11	23—3		赤褐	褐	雲母含有	B	不明	木葉		
鉢	H	12	16—6	床	黒	褐	粗砂粒，雲母含有	A	輪積	欠	横ナデ	鉢型片口，底部欠損，外面は縦ナデ，
甕	H	13	23—4	埋	茶褐	褐	粗砂粒含有	B	輪積	欠	横ナデ	外面櫛目状痕。
坏	S	14	23—5	埋	灰褐	褐	粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		火襷あり
坏	S	15	23—6	床	灰褐	灰褐	粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		内面火襷あり。
壺	K	16	23—7	埋	灰	灰		A	ロクロ	欠		内外面に釉薬附着。

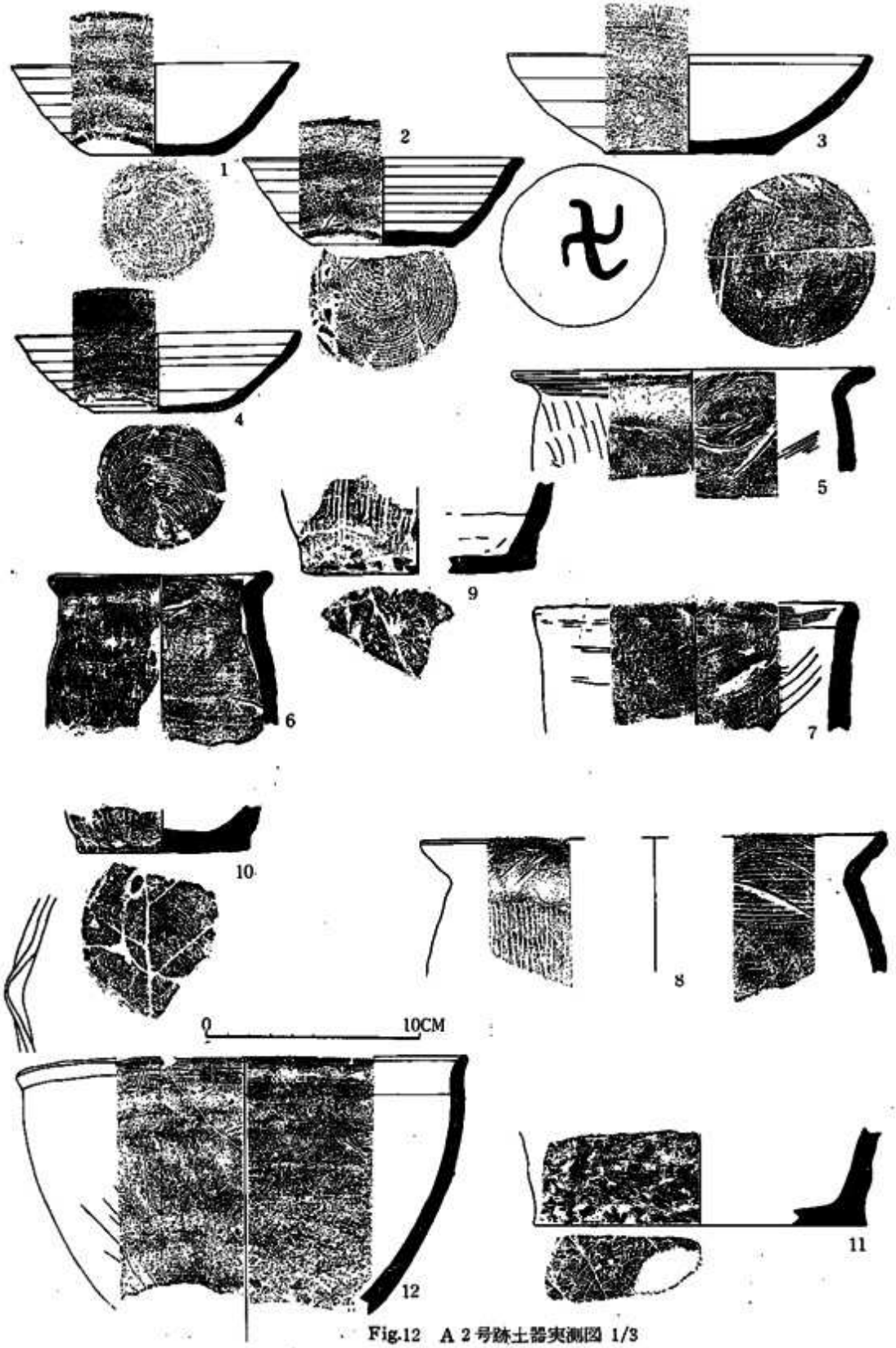


Fig.12　A 2 号跡土器実測図 1/3

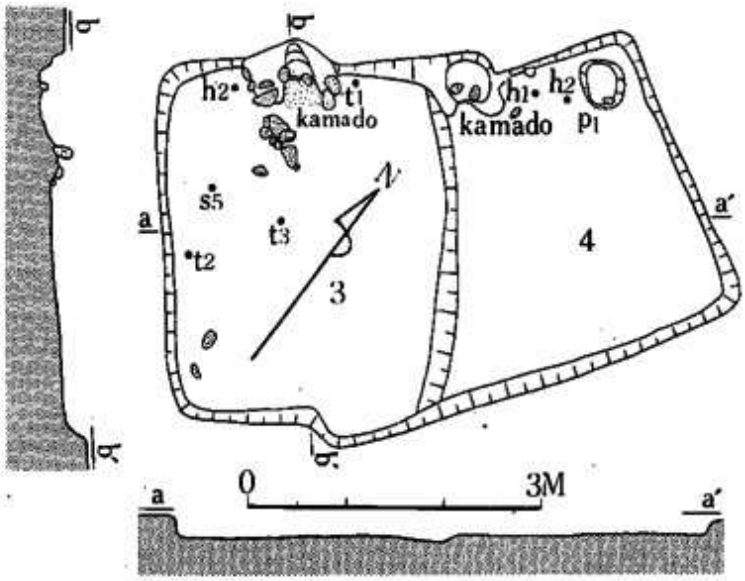


Fig.13　A 3・4 号跡実測図 1/80

A 3 号住居跡 (Fig13・14, 第 2・3 図版)

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡は 4 号跡と重複している。一辺が 2.8×3.5m の長方形平面で北西壁中央にカマドを設けた竪穴式住居跡である。	4 号との重複部分である北東部は貼床状に施設したため，4 号の当初の床を若干掘りくぼめたため，わずかに側壁の痕跡を語る掘りこみの痕が認められた。また南東壁中央には 4 号の壁の隅を確認しえた。四囲の壁は北東約10cm，北西約25cm，南東約20cm，南西約30cm の立ちあがりであった。	カマドの右（4 号跡）側は貼床で，他はローム層そのものであった。	周溝は認められなかった。	本跡では柱穴は認められなかった。	北西側壁のほぼ中央にある。石を芯として，その上を粘土で構築していた。火床は方形で，あまりよく焼けていないが，わずかに赤色を呈していた。煙道は認められなかった。	

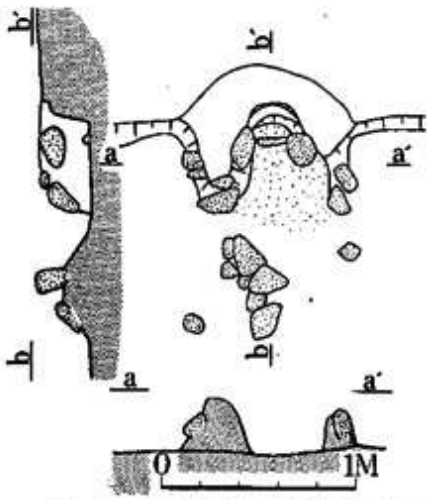


Fig.14　A 3 号跡カマド実測図 1/40

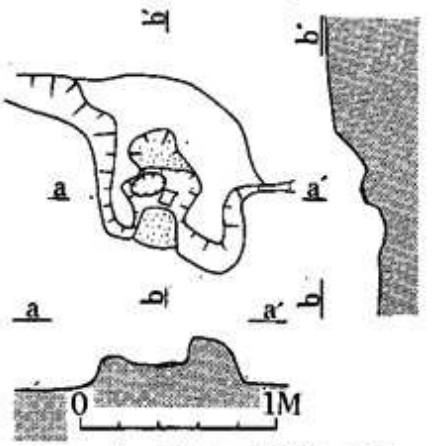


Fig.15　A 4 号跡カマド実測図 1/40

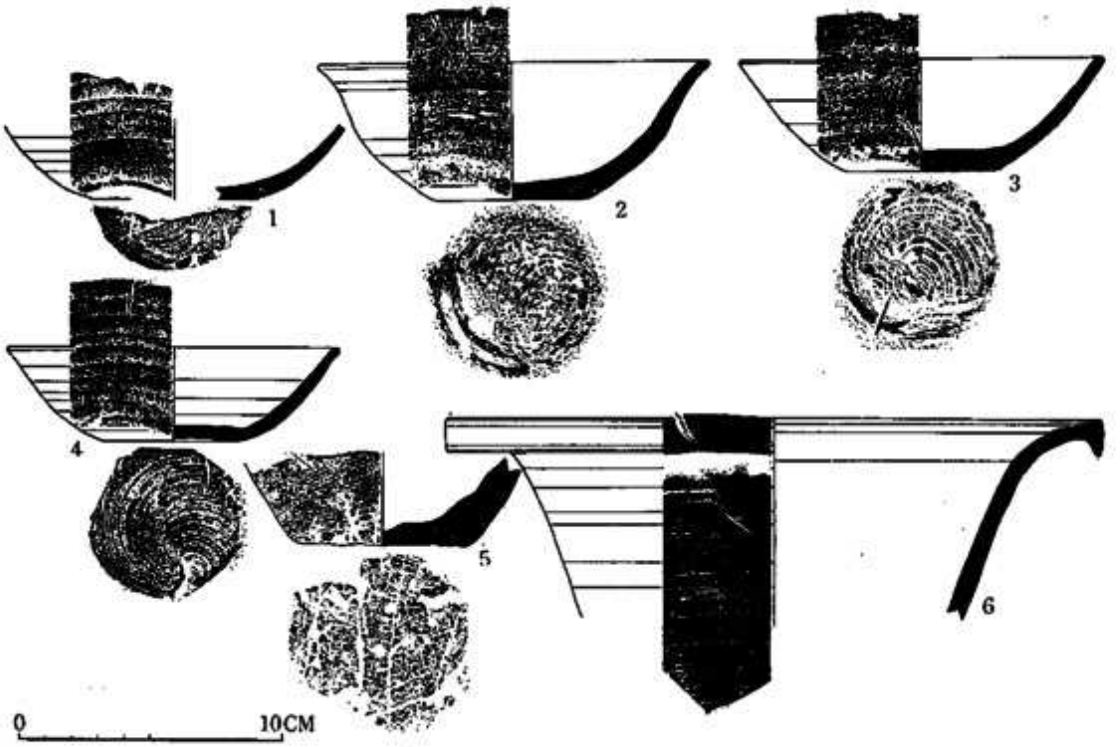


Fig.16　A 3 号跡土器実測図 1/3

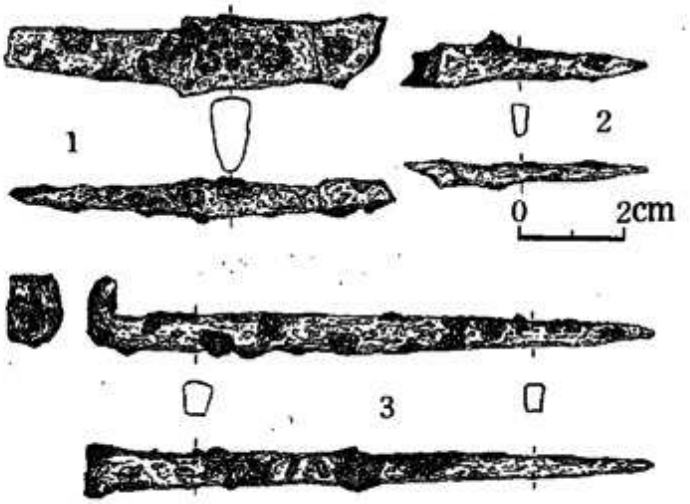


Fig.17　A 3 号跡鉄製品実測図 2/3

製品鉄 (Fig17)

名称	番号	図版番号	出土状況図版番号	備考
刀子	t_1			両端欠失，カマド附近出土。
刀子	t_2			茎部欠失。
釘	t_3	19—4		中央部に木質錆着，床面直上出土。

A 3号跡土器一覧表 (Fig16, 第20・23図版)

器形	種別	番号	図版番号	出土位置	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	手法 体部	手法 底部	手法 口辺	備考
坏	H	1		埋	黒	褐	粗砂粒若干含有	A	ロクロ	糸切		底面一部欠損。
坏	H	2	20—6	床	黒	茶褐	雲母含有	A	ロクロ	糸切		外面一部煤附着，内面篦整形，口辺欠損。
坏	H	3	20—5 23—8	床	黒	褐	雲母，粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		暗文，外面一部灰褐色。
坏	S	4		床	灰褐	灰褐		A	ロクロ	糸切		口辺欠損
甕	H	5		埋	茶褐	茶褐	雲母，粗砂粒含有	A	輪積	木葉	欠	外面櫛目状痕，小片で器形不明。
甕	S	6		埋	灰褐	青灰	良質	A	不明	欠	横ナデ	堅質，口辺は外反している。

A 4号住居跡 (Fig13)

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡の約半分は3号跡の構築によって破壊されたが，3号跡の一部が遺存していたため，本跡の平面形は4.5×2.9mの長方形であることを推定しえた。カマドは北西壁中央に設けられた竪立式住居跡である。	3号跡によって破壊された部分は別として，壁の立ちあがりは，北東約15cm，南東約20cm，北西約20cmであった。	カマドに向って左側の3号跡によって切られた部分以外はローム層そのもので遺存状態は良好，ほぼ平らである。	周溝はまったく認められなかった。	柱穴らしき穴は，現存床上には北西隅に1個の柱穴らしきものを認めたが，他にはそれらしき穴を発見しえなかった。	北西側壁にあり，粘土で構築されたもので，火床は方形，あまりよく焼けていないが，わずかに赤色を呈していた。煙道は認められなかった。	

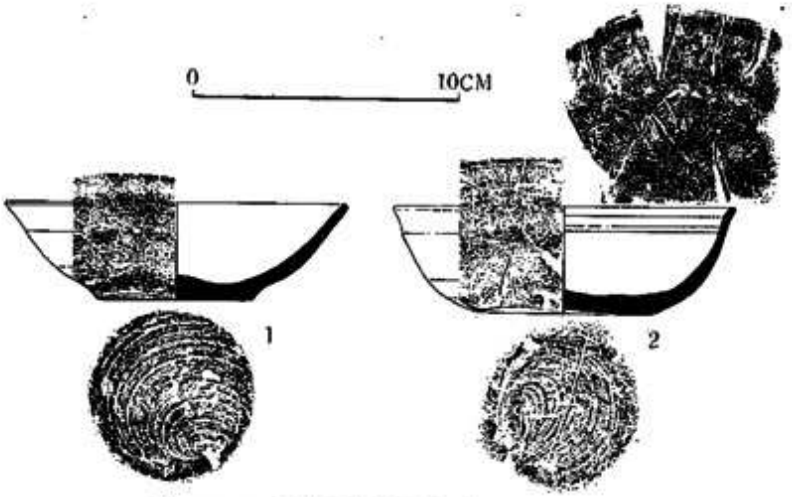


Fig.18　A 4 号跡土器実測図 1/3

A 4 号跡土器一覧表（Fig18, 第20・24図版）

器形	種別	番号	図版番号	出土位置	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	手法 体部	手法 底部	手法 口辺	備考
坏	H	1	20—7 24—1	床	黒	褐	雲母，粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		外面焼成時の煤附着
坏	H	2	20—8 24—2	床	黒	茶褐	粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		暗文，底面に「十字」の箆書き。

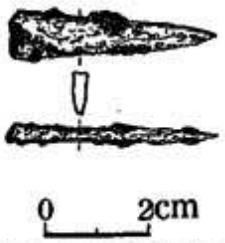


Fig.19　A 4 号跡鉄製品 2/3

青銅，鉄製品（Fig19）

名称	番号	図番	版号	出土状況図版番号	備考
刀子	t_1				茎部欠失，床面上＋10cm 出土。

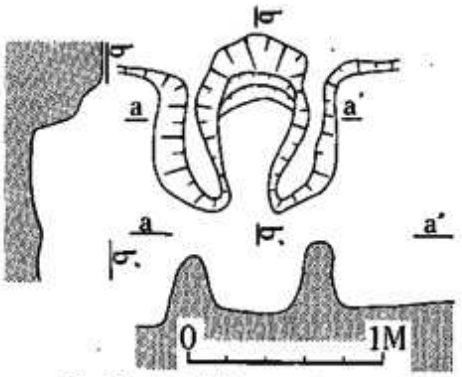


Fig.20　A 5 号跡カマド実測図 1/40

A 5 号住居跡 (Fig20・21, 第3図版)

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
1辺4.4×6mの台形平面で，カマドを北東壁ほぼ中央に設けた竪穴式住居跡である。	側壁上部はローム層上面まで除土したため，壁の立ちあがりはきわめて低い。ことに北西方は，ローム層上面が傾斜しているためわずかな立ちあがりであった。四囲の壁は北西約30cm，北東約34cm，南東約39cm，南西約40cmであり，いずれの側壁も直立せず外傾している。	床はローム層そのもので，遺存状態は良好，ほぼ平らであった。カマドに接した左側の壁下には柱穴と不整形なくぼみが細長く連らなり，周溝とは別種のものであろうし，さらに所謂貯蔵用の穴とも考えられないが，この部分のみに遺存するものであった。	周溝らしきものを認めることができなかった。ただ	柱穴らしきものは11個認めえたが，P_1～P_4を主柱とし，P_7を補助の柱穴とすることができるであろう。尚P_8P_9は，P_3に対する補助用であったかどうか明瞭ではないが，その位置からしてきわめて補助的な柱穴を思わせる。	北東側壁ほぼ中央にある。粘土製のカマドである。火床はほぼ長方形で，あまりよく焼けていないが，わずかに赤色を呈していた。煙道は認められなかった。	

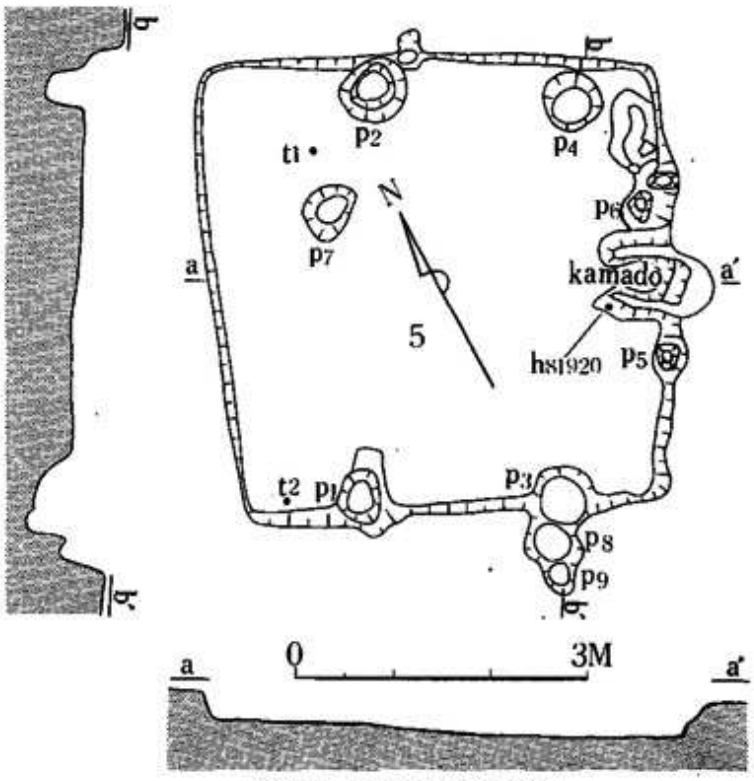


Fig.21 A 5 号跡実測図 1/80

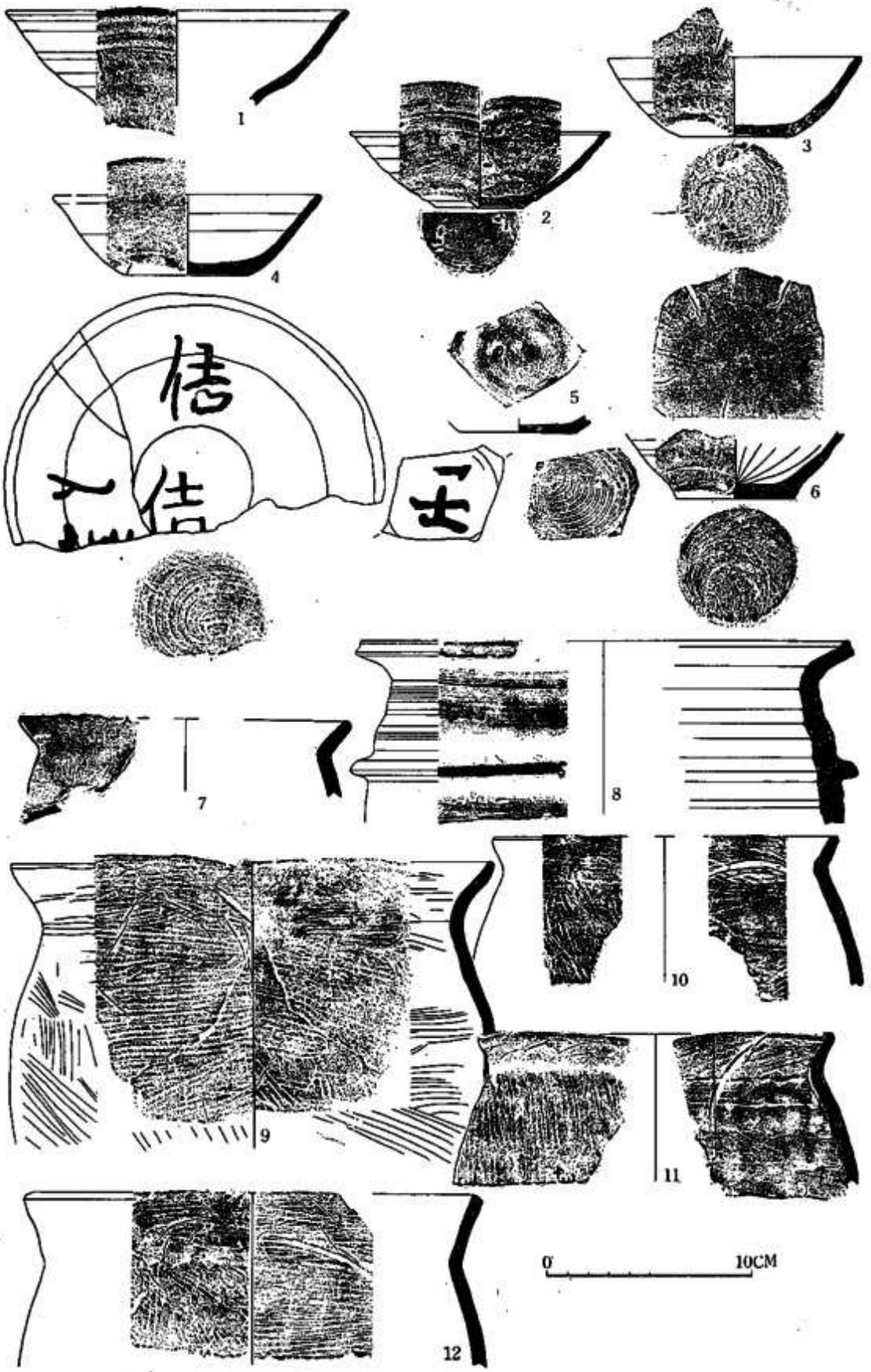


Fig.22　A 5 号跡土器実測図1/3

Fig.23　A 5 号跡土器実測図 1/3

A 5 号跡土器一覧表 (Fig22・23, 第20・24図版)

器形	種別	番号	図版番号	出土位置	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	手法 体部	手法 底部	手法 口辺	備考
坏	H	1		床	黒	褐	雲母若干含有	A	ロクロ	欠		外面煤附着。
坏	S	2		床	黝黒	黝黒		A	ロクロ	糸切		
坏	H	3		床	黒	灰褐	砂粒多含有	A	ロクロ	糸切		
坏	H	4	20—9	埋	黒	赤褐	粗砂粒含有	B	ロクロ	糸切		底外面に墨書。
坏	S	5		床	灰	灰		A	欠	糸切	欠	墨書。
坏	H	6	24—4	床	黒	赤褐	粗砂粒，雲母有	B	ロクロ	糸切	欠	暗文。
甕	H	7		埋	褐	褐	雲母含有	B	欠	欠		内外面煤附着。
甕	H	8			淡褐	淡褐	粗砂粒，雲母有	A	ロクロ	欠		鍔付長甕
甕	H	9	24—5		褐	褐	雲母含有	B		欠		外面煤附着，外面細櫛目状痕
甕	H	10	24—3		茶褐	茶褐	雲母含有	A		欠		外面篦，櫛目状具による整形
甕	H	11	24—6		褐	褐		A		欠		外面櫛目状痕
甕	H	12			茶褐	黒褐	雲母含有	B		欠		外面煤附着，内外面細櫛目状痕
甕	H	13			灰褐	灰褐	雲母含有	B		木葉	欠	外面煤附着，内外面細櫛目状痕
不明	S	14			黄灰	黄灰	良質		ロクロ		欠	高台付
不明	K	15			茶褐	黒褐	粗砂粒，雲母含有	B	欠	木葉	欠	
不明	K	16			灰	灰					欠	二本の沈線が体部に入る
甕	H	17	24—7	埋	茶褐	褐	雲母，粗砂粒含有	A	輪積	欠	横ナデ	内外面櫛目状痕，

鉄製品 (Fig 25)

名　称	番号	図版番号	出土状況図版番号	備　考
紡錘車	t_1	18—6	15—4	
刀　子	t_2			両端欠失。
鏃　先	t_3			

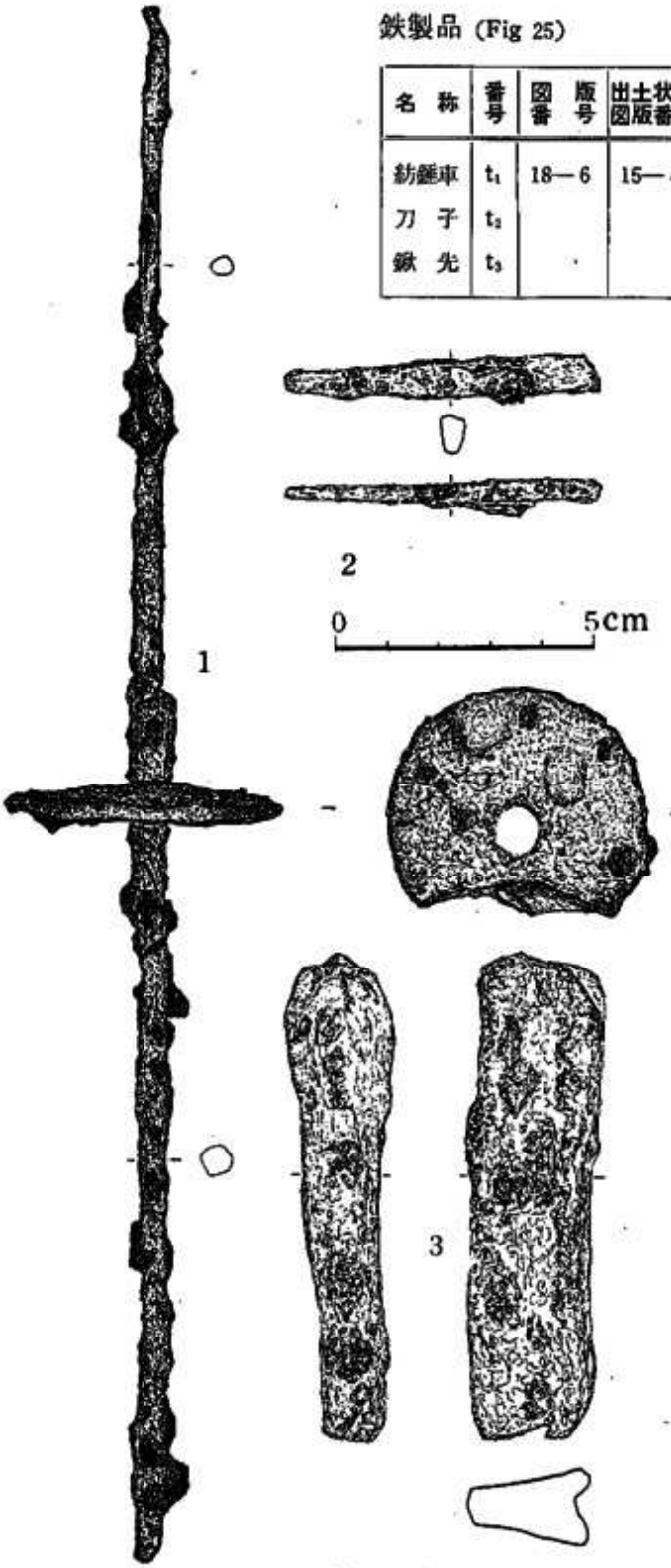


Fig.25　A５号鉄製品 2/3

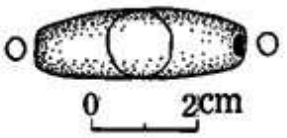


Fig.24　A５号跡土錘実測図 2/3

A 6 号住居跡 (Fig26・27, 第3図版)

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
一辺が 3.8×3m の台形平面で，東壁の中央にカマドを設けている。	本跡の南壁部は耕作により削平されていて壁の立ちあがりは皆無であったが，平面プランを認めることができた。	床はローム層そのもので，遺存状態は良好，ほぼ平らであった。西壁中央部に焼土の遺存があった。	北，東，西側壁下に巾約5～10cm，深さ，約5～10cm の周溝を認めえた。南側壁は削平のため確認しえなかった。ただし東壁カマドの南側には不整形のくぼみが南隅に連らなっていた。	柱穴と認定し得るに足る穴は認められなかったが，北壁外に2ヶ所計3個の穴が認められた。	東壁中央にある。わずかに側壁外に掘りこみ，石を芯として，その上に粘土をかぶせて構築している。火床は方形で，あまりよく焼けていないがわずかに赤色を呈していた。煙道は認められなかった。	

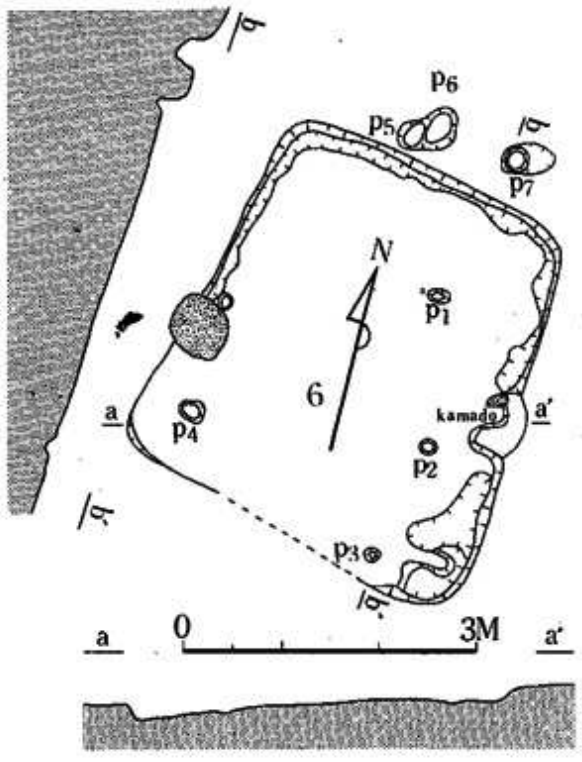


Fig.26 A 6 号跡実測図 1/80

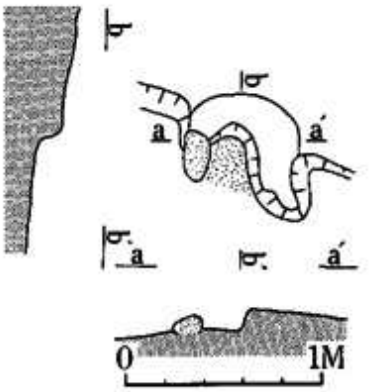


Fig.27 A 6 号跡カマド実測図 1/40

A６号跡土器一覧表（第25図版）

器形	種別	番号	図版番号	出土位置	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	手法 体部	手法 底部	手法 口辺	備考
坏	K	1	25—1	埋	茶褐	茶褐	粗砂粒含有	B	ロクロ	ヘラ起	欠	高台付，高台付外内面釉薬附着。
坏	K	2	25—2	埋	灰褐	灰褐	砂粒含有	A	ロクロ	ヘラ起	欠	高台付，内面釉薬附着。

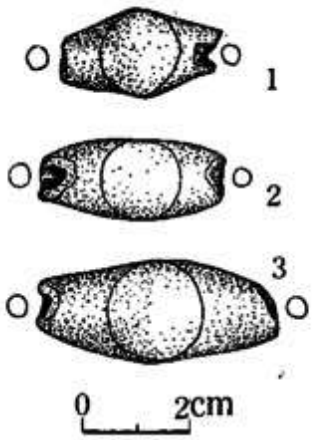


Fig.28　A６号跡土錘実測図 2/3

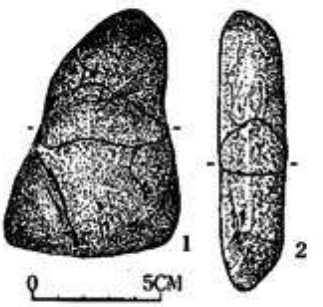


Fig.29　A６号跡 Toilet stone 実測図 1/3

B　地　区

B地区は20×30mの範囲を発掘し，竪穴式住居跡2軒と掘立柱の建物遺構9棟分を確認した。本地区から西側へはだんだんゆるい傾斜で降り台端に達するためか，黒色土の堆積はA地区よりも若干厚く，平均して約60～70cmであった。以下，各住居跡並びに掘立遺構についてその概要を図示，表記する。

本地区は後述のごとく掘立遺構が多数遺存し，建造物としてまとまるものについて図示した。これらの柱穴のうちには，土師，須恵，灰釉陶器片（Fig30），石片などを柱の根固めとして用いたものもあった。また，B16号跡南西方よりロームに近く繩口片が出土した。

B地区 1・2・3号（Fig30，第16・17・26図版）

器形	種別	番号	図番号	版号	出土位置	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	手法 体部	手法 底部	手法 口辺	備考
鞴		1	16—1										長径2.0cm，短径1.6cmの孔を中央に有し，全体に溶解した鉄滓が附着している。
壺	S	2	26—6			灰	灰		A	欠	欠		頸部残存，灰を若干被っているロクロ条痕
壺	K	3	26—8			灰	緑		A	欠	欠		頸部残存，ロクロ条痕
坏	K	4	26—9			灰	灰		A	ロクロ	欠		焼成堅緻
坏	K	5				灰	灰		A	欠		欠	高台付，内面少々釉薬残存
坏	K	6				白灰	白灰		A	欠		欠	高台付
壺	S	7	26—3			灰	灰		A	欠	欠		頸部残存
不明	H	8				茶褐	茶褐		B	欠	木葉	欠	
坏	H	9			柱穴	黒	赤褐	良質	A	欠	糸切	欠	蟲害
		10	16—4										
壺	H	11	26—7			褐	茶褐	雲母，粗砂粒含有	A	輪積	木葉		底面は木葉の上を篦で整形
鞴		12	17—7										黒褐色
壺	K	13	26—4			淡褐	青灰	良質．	A				内外共に施釉．
甕	H	14	26—5			褐	褐		A	輪積	欠	横なで	櫛目状痕
蓋	K	15	26—13			灰白	灰	砂粒含有．	A				宝珠のみ，

Fig30　B地区遺物実測図 1/3

B16号住居跡（Fig 31・32，第5図版）

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡床上には掘立遺構1号跡と2号跡が構築されている。7×6.2mの長方形平面で，カマドを北西側壁中央に設ける竪穴式住居跡である。	側壁上部はローム層上面まで除土したため壁の立ちあがりはきわめて低い。四囲の壁は北西(カマドあり)約27cm，北東約24cm，南東約25cm，南西約28cmでいずれの側壁も直立せず外傾している。	貼床でほぼ平であるが，掘立遺構の柱穴が多数遺存していた。	周溝は四囲側壁下に認められ巾10～20cm，深さ約10～20cmのものである。	柱穴らしき穴は5個認められたがP_1～P_4までを主柱とし，P_5は補助柱の穴であろう。	北西側壁中央にあり，石を芯として粘土で構築していた。カマドの中にはカメ型土師器数個がこわれて遺っていた。火床は方形で非常によく焼け，赤色を呈していた。煙道は認められない。	

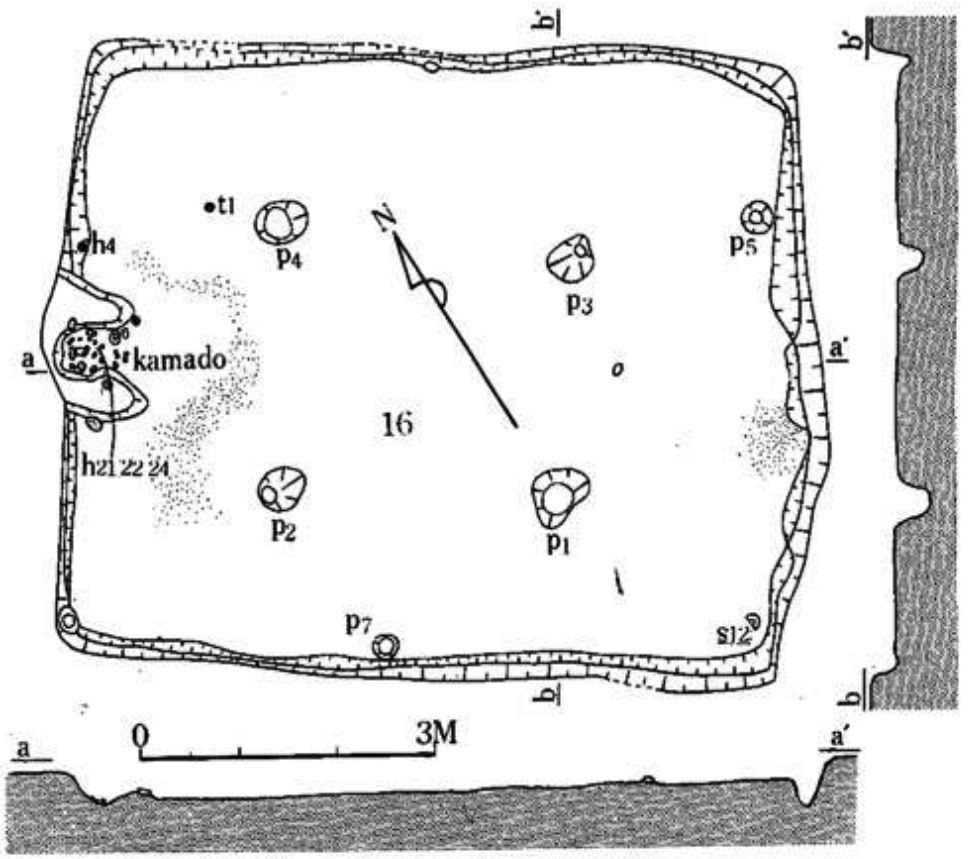


Fig.31　B16号跡実測図 1/80

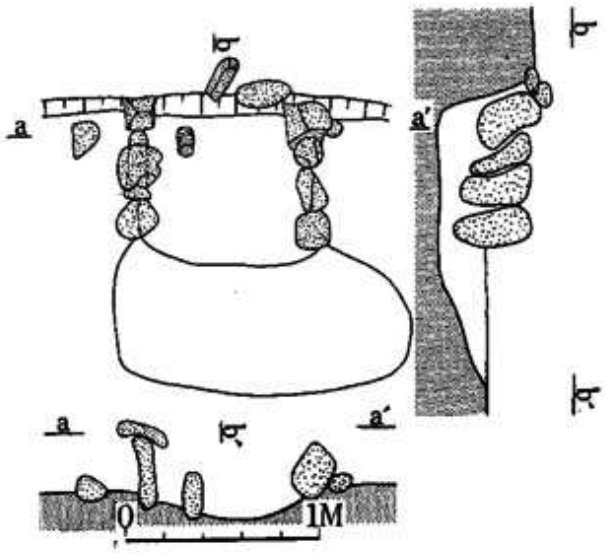


Fig.32　B16号跡カマド実測図 1/40

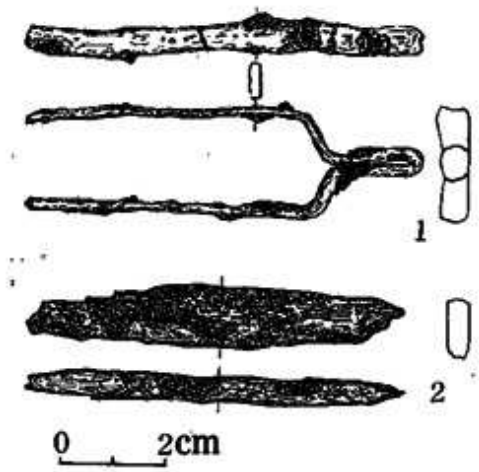


Fig.33　B16号跡鉄製品実測図 2/3

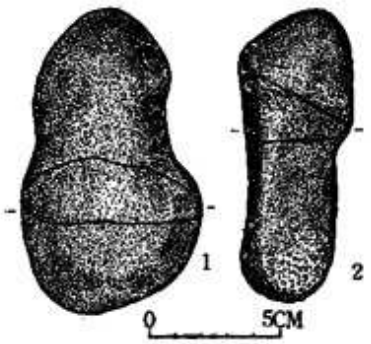


Fig.34　B16号跡 Toilet stone 実測図 1/3

鉄製品 (Fig33)

名　称	番号	図版番号	出土状況図版番号	備　考
ピンセット状鉄器	t_1	19—5	14—3	
刀　子	t_2			刃部先端欠失．木質錆着。

B16号跡土器一覧表 (Fig35・36, 第17・18・20・21・25図版)

器形	種別	番号	図版番号	出土位置	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	手法 体部	手法 底部	手法 口辺	備考
坏	H	1			黒	淡褐		A	ロクロ	糸切		暗文
坏	H	2			褐	暗褐	砂粒を多含有	B	欠	ヘラ起		高台付，底外面墨書
坏	H	3	21—4	カマド	黒	褐	雲母含有	C	ロクロ	糸切		底面に燻れ跡
坏	H	4	21—2 25—3		一部黒	褐		B	ハケ	ヘラ起	横なで	暗文
坏	H	5			黒	黄褐	雲母含有	A	ロクロ	糸切	欠	外面墨書
坏	H	6		カマド	黒	黄褐		A	ロクロ	糸切		
坏	H	7	21—1		灰褐	灰褐		B	ロクロ	ヘラ起		
坏	K	8			灰	灰		A	ロクロ	欠	欠	
坏	K	9			淡灰	淡灰	良質	A	ロクロ	欠		篦整形痕
甕	H	10			褐	褐	粗砂粒，雲母含有	B	ハケ	欠		粗製
甕	H	11	25—11	カマド	褐	褐		B	欠	欠		
坏	S	12	20—12		褐	褐	粗砂粒含有	A	ロクロ	ヘラ起		外面研磨，竪緻
甕	H	13	25—5		褐	褐	雲母若干含有	B	ハケ	欠	粗製	
甕	H	14	25—4	カマド	淡褐	淡褐		B	欠	欠	クシ	内面口辺に櫛条痕体面に細櫛目状痕
甕	H	15		カマド	淡褐	淡褐	粗砂粒，雲母含有	B	欠	欠	クシ	口辺内外面櫛目状痕
甕	H	16	25—7		褐	褐		A	欠	欠	横なで	内面に有機質の煤状のもの附着
甕	H	17			茶褐	茶褐		B	欠	欠	クシ	口辺内外面に櫛目状痕
甕	S	18	25—8		灰	灰		A	欠	欠	ロクロ	
甕	S	19			灰	黒褐	粗砂粒多含有	A	ロクロ	ヘラ	欠	底内面は灰を被る
甕	H	20	17—8	カマド	暗褐	暗褐	粗砂粒，雲母含有	B	輪積	ヘラ	横なで	外面細櫛目状痕，煤附着
甕	H	21	17—9	床	暗褐	暗褐	粗砂粒，雲母含有	B	輪積	欠	横なで	外面細櫛目状痕
甑	H	22			茶褐	茶褐	粗砂粒，雲母含有	A	ハケ ヘラ	単孔木葉	欠	内面細櫛目状痕，一部篦状痕
不明	H	23	25—9		褐	褐	粗砂粒，雲母含有	A	欠	木葉	欠	全体煤附着，器形は甕形土器と思われる
甕	H	24			暗褐	暗褐	雲母含有，	A	ヘラ	木葉		煤附着，外面研磨，竪緻
不明	H	25	25—10	埋	赤褐	赤褐	雲母，砂粒含有，	B	ヘラ ハケ	ヘラ起	欠	底面十字篦書き，外面櫛目状痕
甕	H	26	18—1	埋	褐	茶褐	雲母，砂粒含有，	A	ヘラ	欠	欠	煤附着，外内面櫛目状痕，

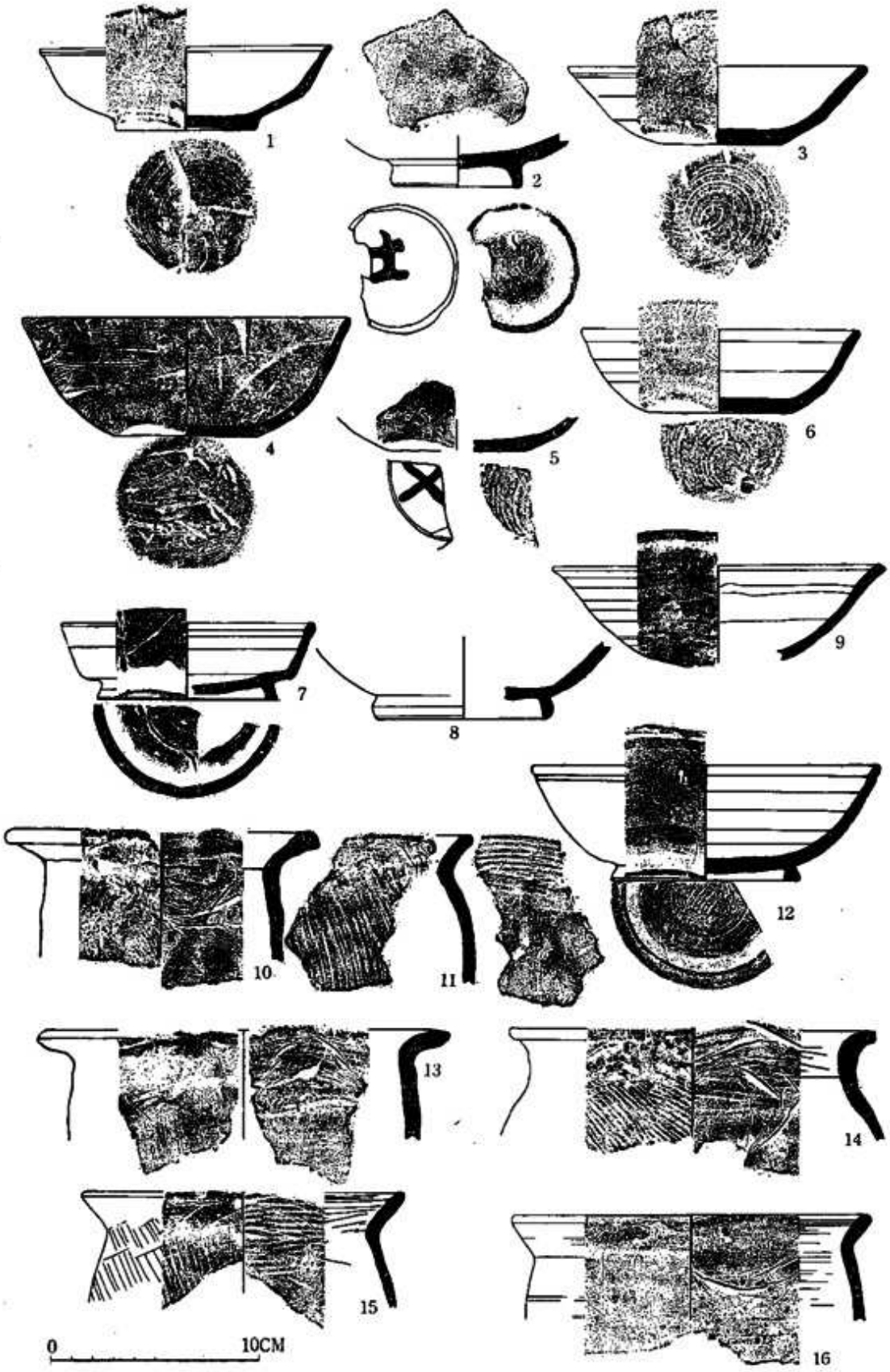


Fig.35　B16号跡土器実測図 1/3

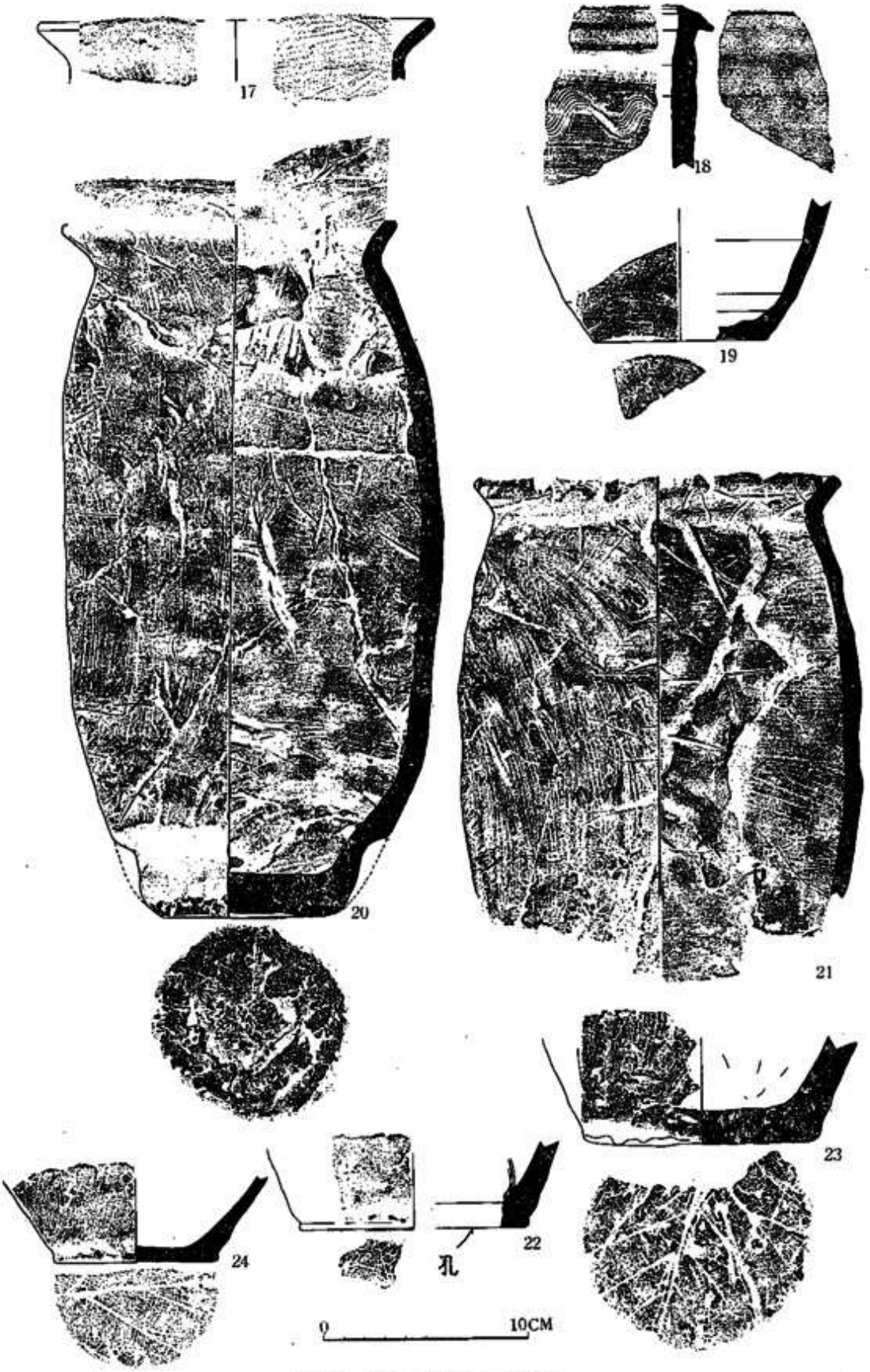


Fig.36　B16号跡土器実測図 1/3

B17号住居跡 (Fig37・38, 第5図版)

平 面 形	側 壁	床	周 溝	柱 穴	カ マ ド	備 考
一辺 3.7mの方形平面で，カマドは東壁の北隅に近く設けられた竪穴式住居跡である。	側壁上部はローム層上面まで除土したため，壁の立ちあがりはきわめて低い。四囲の壁は東(カマドあり)約30cm，西約10cm，南約26cm，北約30cm でいずれの側壁も直立せず外傾している。	床はローム層そのもので，遺存状態は良好，ほぼ平らである。	周溝は四囲側壁下に巾約5～15cm，深さ約5～10cmのものが認められた。	柱穴らしき穴は，まったく認めることができなかった。	東壁の北隅に設けられ，石を芯として粘土で構築していた。火床は長方形で非常に良く焼けており赤色を呈していた。煙道は認められない。	

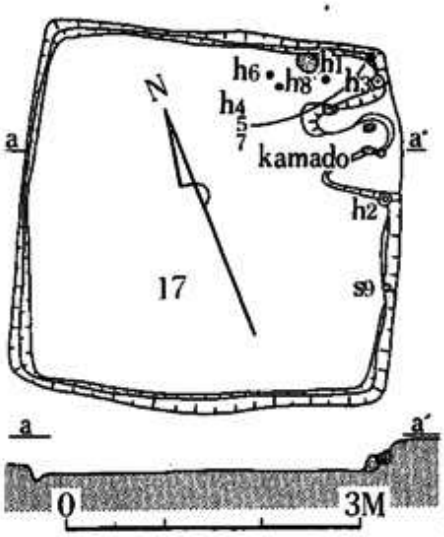


Fig.37 B17号跡実測図 1/80

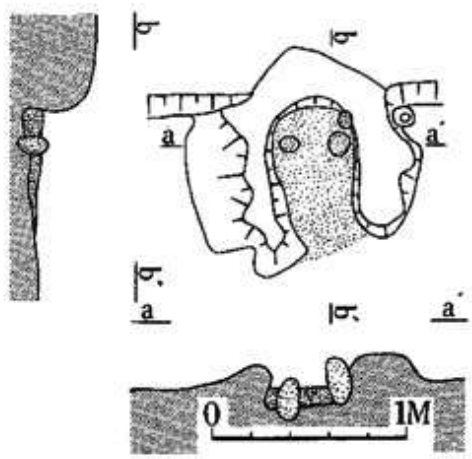


Fig.38 B17号跡カマド実測図 1/40

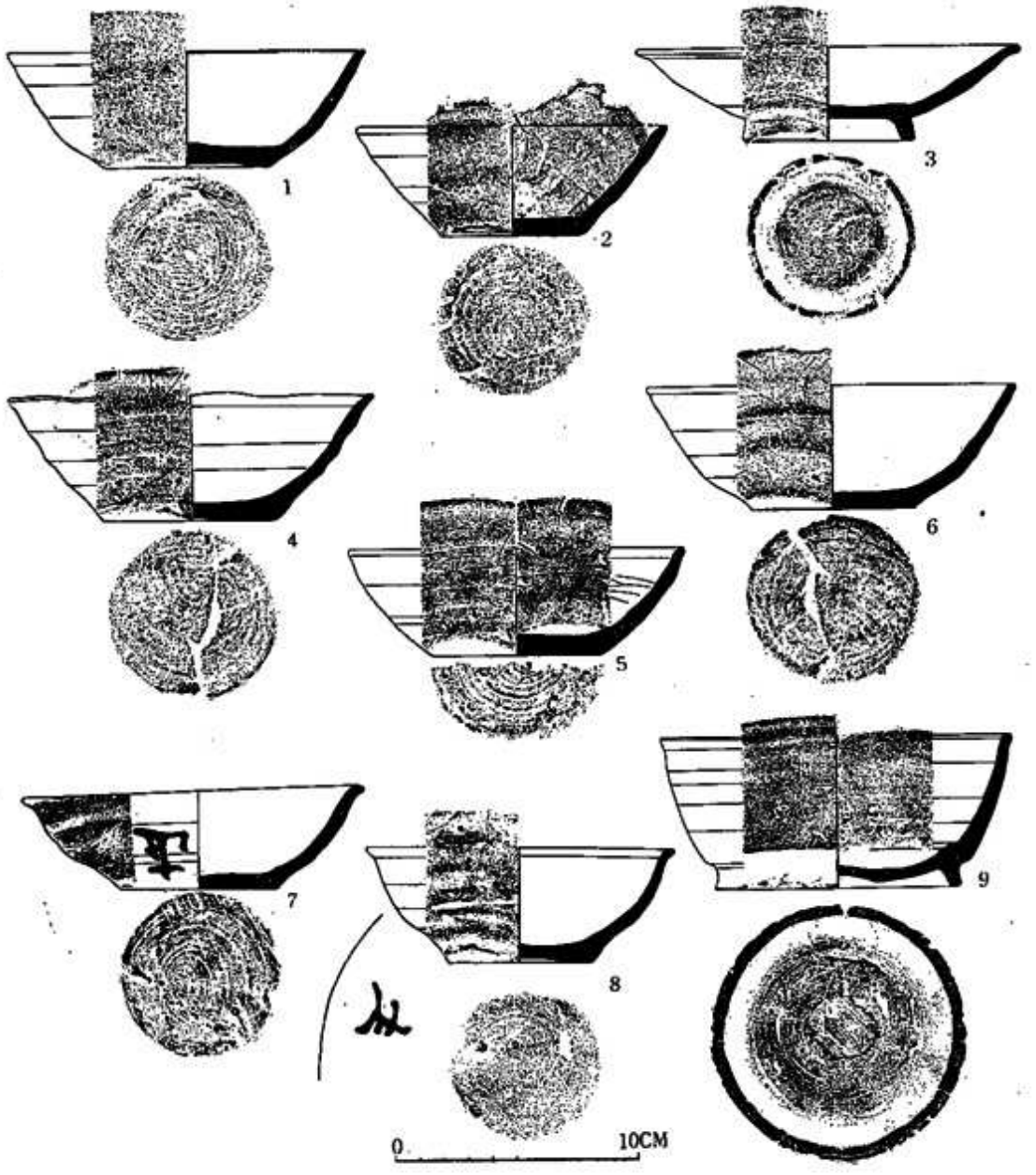


Fig.39　B17号跡土器実測図 1/3

B17号跡土器一覧表 (Fig39. 第20・21・26図版)

器形	種別	番号	図版番号	出土位置	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	手法 体部	手法 底部	手法 口辺	備考
坏	H	1	21—3		黒	淡 褐	粗砂粒，雲母含有	A	ロクロ	糸 切		
坏	H	2			黒	灰 褐	雲母含有	A	ロクロ	糸 切		暗文
坏	H	3	26—1		黒	灰 褐		A				外面一部煤附着，高台付
坏	H	4			黒	淡 褐	粗砂粒，雲母含有	A	ロクロ	糸 切		底面一部煤附着
坏	H	5			黒	褐	粗砂粒含有	A	ロクロ	糸 切		暗文（横なで）
坏	H	6			黒	赤 褐		A	ロクロ	糸 切		底面窯爛れ跡
坏	H	7	21—5		黒	赤 褐	良質	A	ロクロ	糸 切		外面に「直」墨書，暗文
坏	H	8	20—10		黒	淡 褐		A	ロクロ	糸 切		外面墨書
坏	S	9	20—11		灰 褐	淡 褐		A	ロクロ	糸 切		高台付
壺	H	10	26—2	埋	褐	褐	雲母，粗砂粒含有	B	輪 積	欠	横なで	

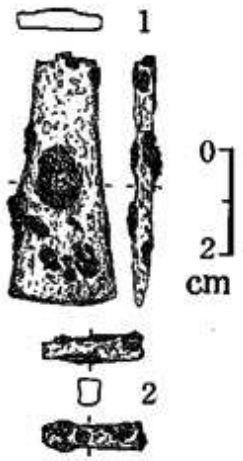


Fig.40 B17号跡鉄製品実測図 2/3

鉄製品 (Fig40)

名称	番号	図版番号	出土状況図版番号	備考
鉄鏃	t_1	19—6		
釘	t_2			先端部破片。

B地区掘立柱建物遺構 (Fig41～49. 第4図版)

本地区には，掘立の柱穴が多数認められ，それらのうちで建物遺構と認定し得るものについては以下に図示したが，その他のものでも，発掘地域をさらに拡張すれば，明瞭にし得るものもあった。これらの掘立遺構に伴う遺物はきわめて少なく，B16号跡北側のB２，B６の柱穴の根固めに土器片（Fig30）や石片を築き込んだものがあった。

これらの遺構はB16号住居跡の床面をこわして柱穴が遺存していたことなどから，その竪穴住居廃屋後に構築されたものであることがわかる。掘立遺構の大きさについては以下計測値を表示する。

No.	桁	行	梁 間
1	3 間	約 21 尺	2 間	約 14 尺
2	3 間	約 25 尺	2 間	約 15 尺
3	2 間	約 25 尺	1 間	約 7.5 尺
4	2 間	約 11 尺	1 間	約 9.0 尺
5	2 間 以 上	1 間 約 8 尺	2 間	約 14 尺
6	2 間 以 上	1 間 約 7 尺	2 間	約 14 尺
7	2 間 以 上	不 明	2 間	約 15 尺
8	2 間 以 上	1 間 約 5.5 尺	2 間	約 14 尺
9	2 間 以 上	1 間 約 7 尺	1 間	約 9.2 尺

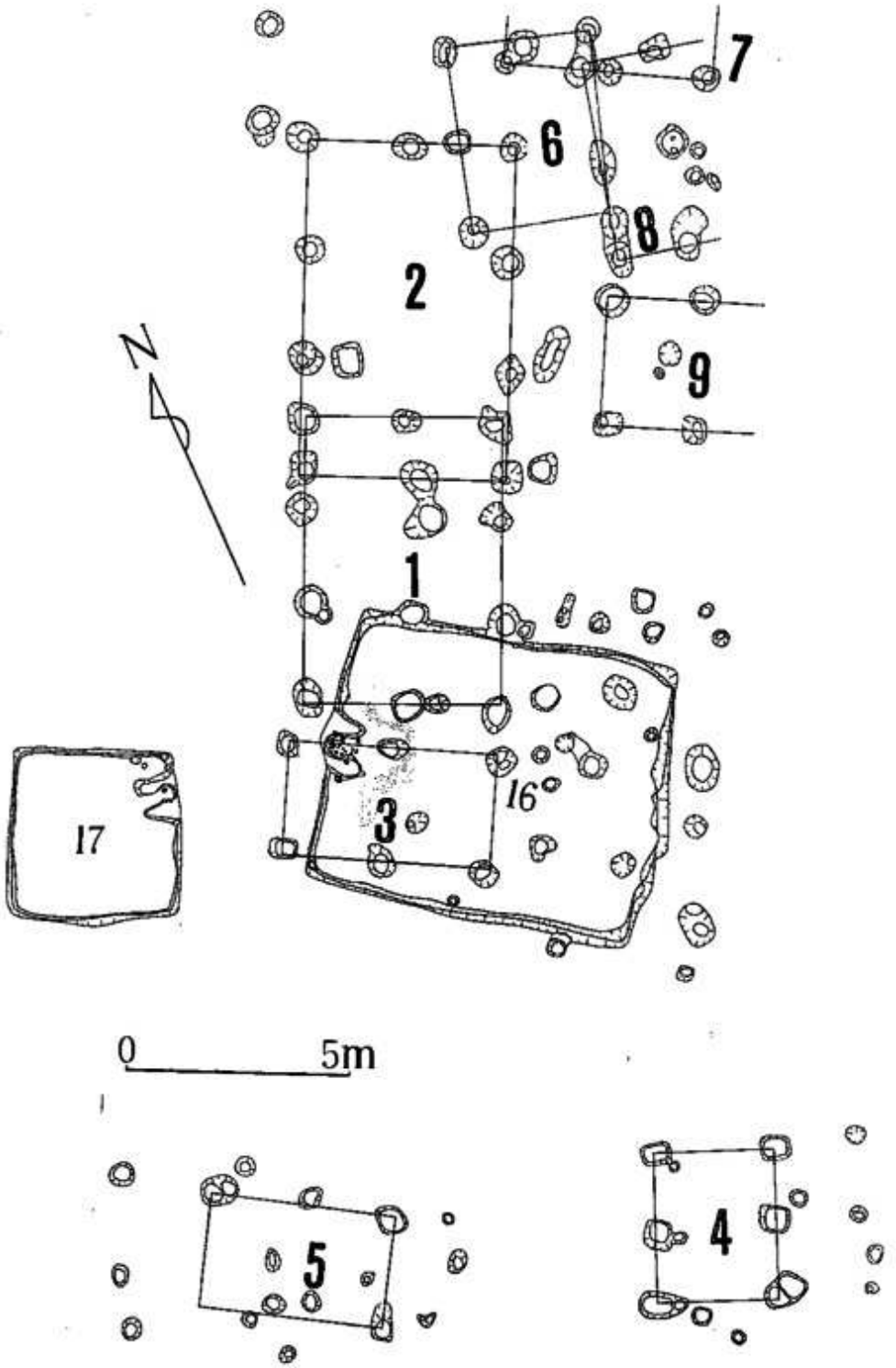


Fig.41　B地区掘立遺構配置図1/180

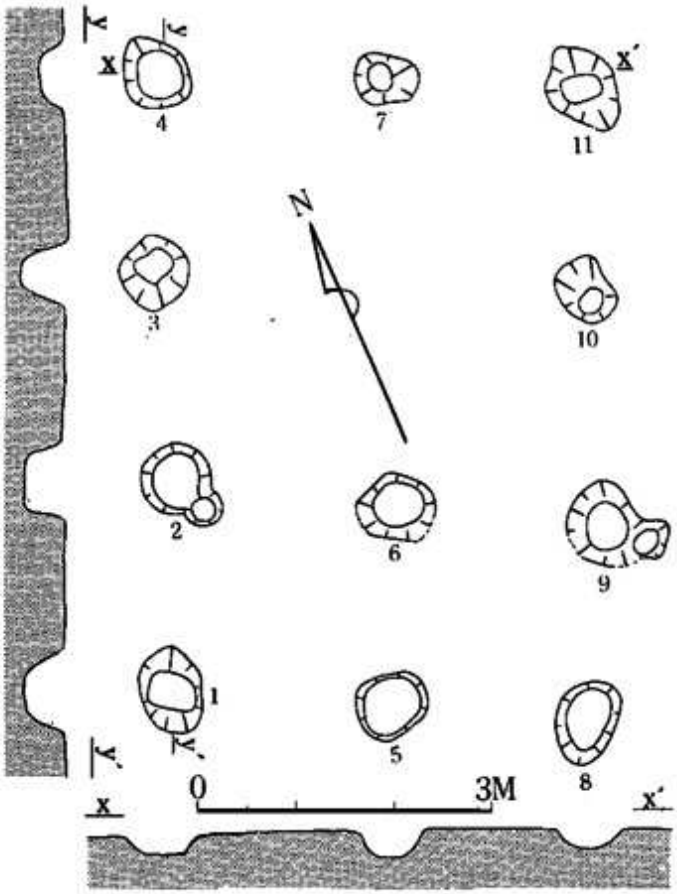


Fig.42　B 1 号掘立遺構実測図 1/80

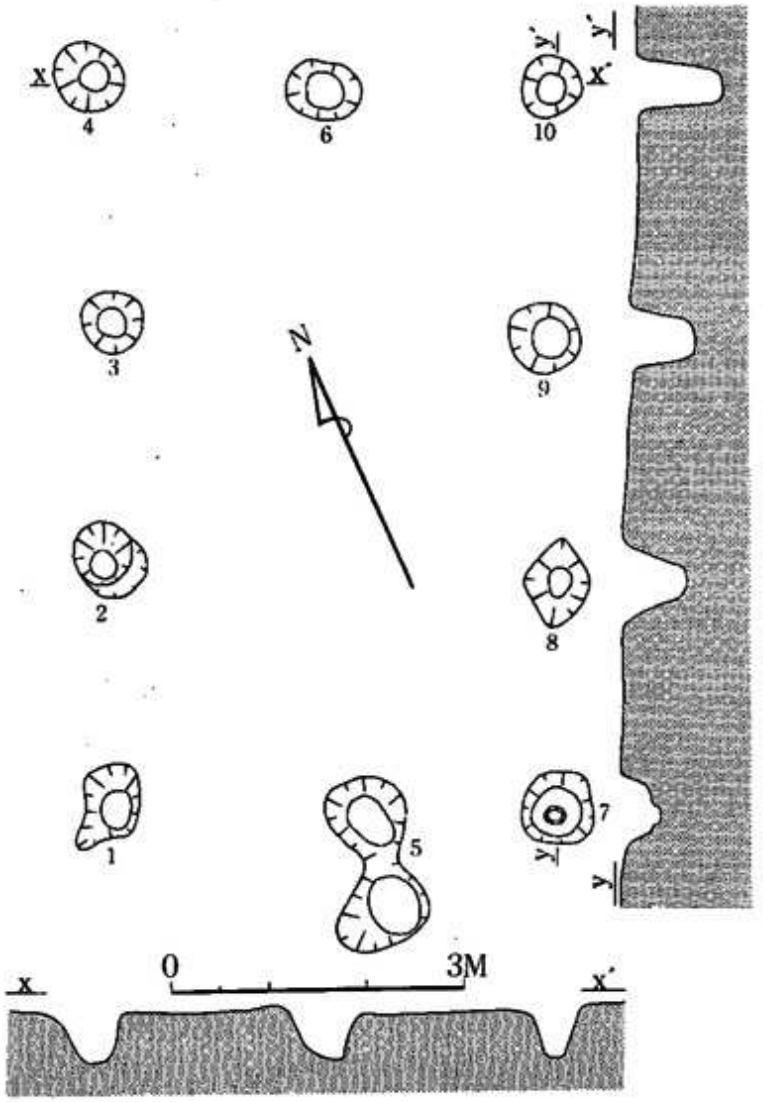


Fig.43 B 2号掘立遺構実測図 1/80

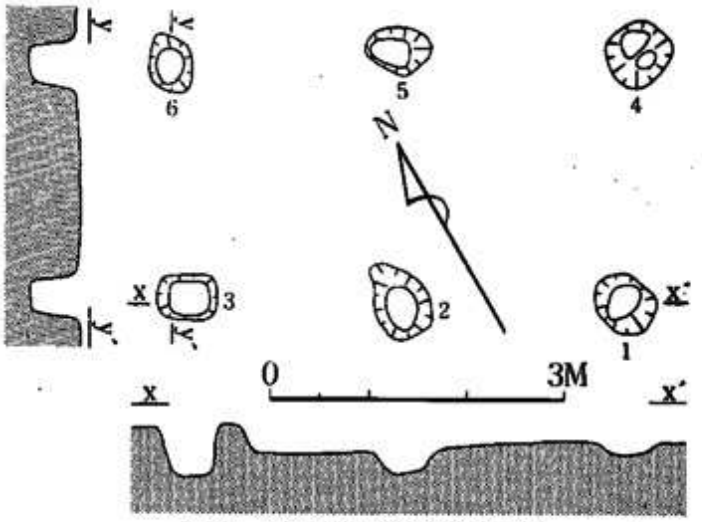


Fig.44　B３号掘立遺構実測図 1/80

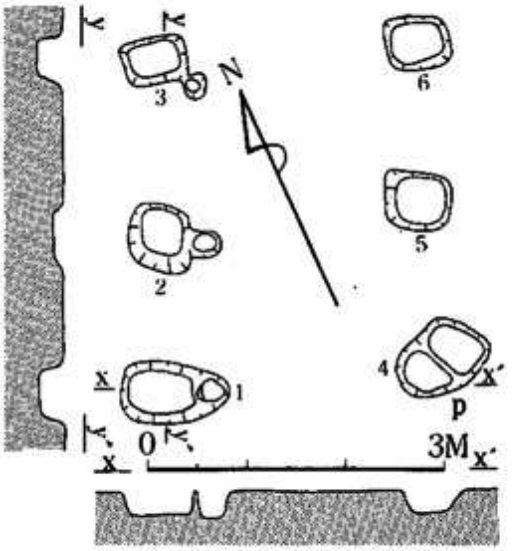


Fig.45　B４号掘立遺構実測図 1/80

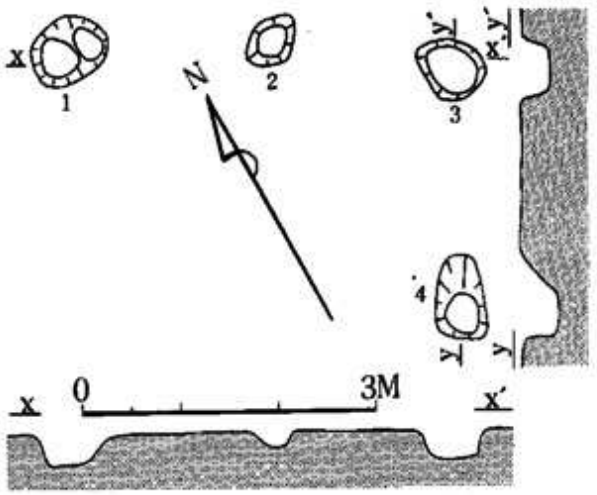


Fig.46　B 5 号掘立遺構実測図 1/80

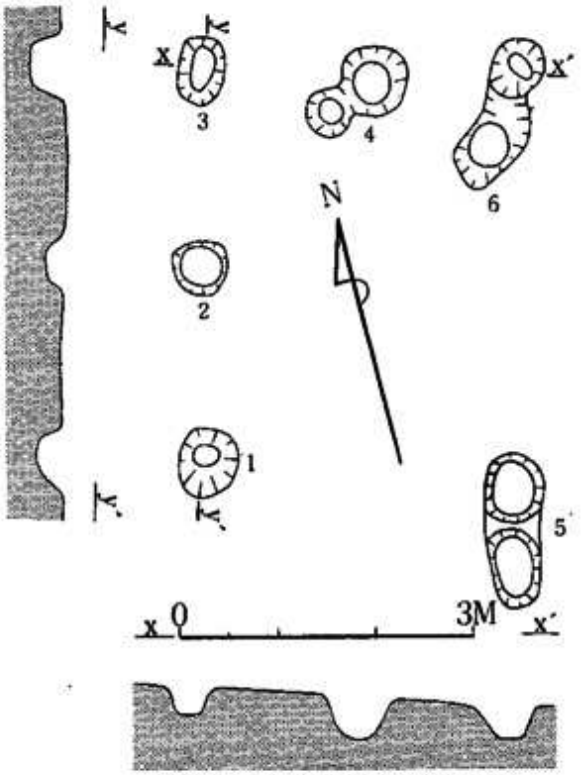


Fig.47　B 6 号掘立遺構実測図 1/80

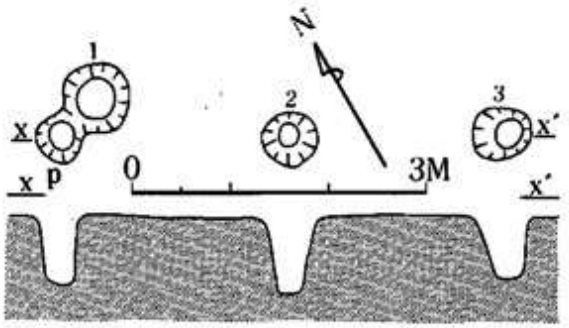


Fig.48　B７号掘立遺構実測図 1/80

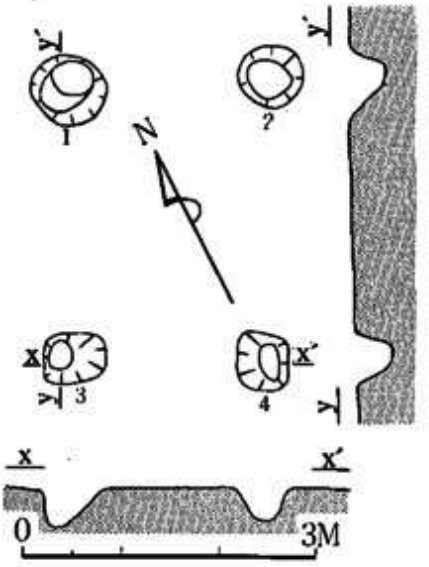


Fig.49　B９号掘立遺構実測図 1/80

C　地　区

C地区は，16×25mの範囲を発掘し，４軒の住居跡を確認した。８，９，10号跡の重複住居跡で10号は火災に遭ったものである。本地区はA地区に北接し，黒色土の流出は比較的少く，その堆積は80～100cmであった。

C７号住居跡（Fig50，第８図版）

平面形	側　壁	床	周　溝	柱　穴	カ　マ　ド	備考
7×7.4mの方形平面でカマドは西壁ほぼ中央に設けられた，竪穴式住居跡である。	側壁上部はローム層上面まで除土したため，壁の立ちあがりはきわめて低い。四囲の壁は西（カマドあり）約30cm，東約21cm，南約32cm，北約22cmであり外傾している。	床は全面的に貼床が10～20cmの厚さに認められ，その遺存状態は良好でありほぼ平らである。	四囲側壁下に巾20～40cm，深さ15～30cmのものが認められた。	本跡床面上（貼床面上）においては柱穴らしき穴はまったく認めえなかった。しかし床面を取り除きローム面まで掘り下げた結果，四隅にそれぞれ１個計４個の主柱の穴（P_1～P_4）とさらに補助的柱穴と考えられる柱穴４個（P_5～P_8）を確認は認することができた。	西壁ほぼ中央に設けられ，側壁外に半円形に掘りこんである。少数の石を芯として，その上を粘土で構築している。火床は方形であり，あまり良く焼けていないが，わずかに赤色を呈している。煙道を認められなかった。	

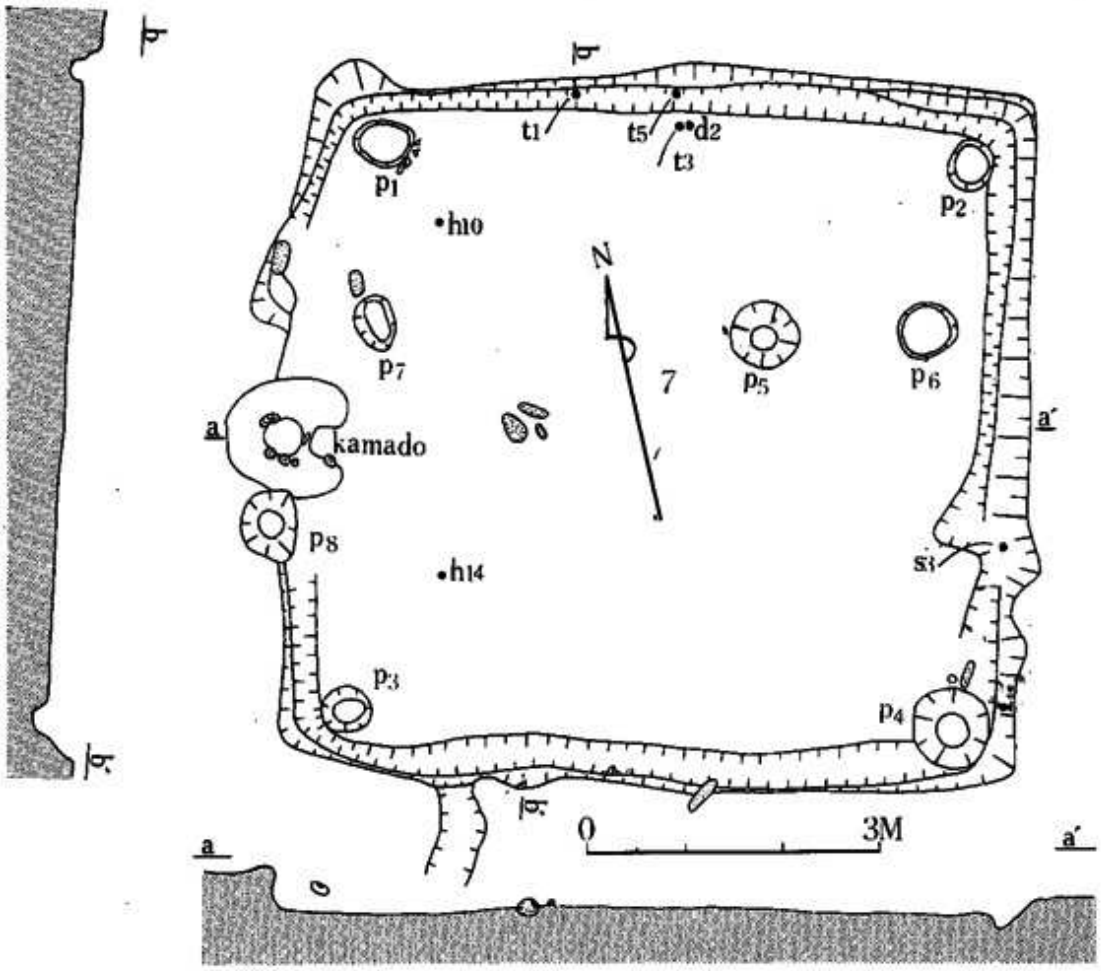


Fig.50　C 7 号跡実測図 1/80

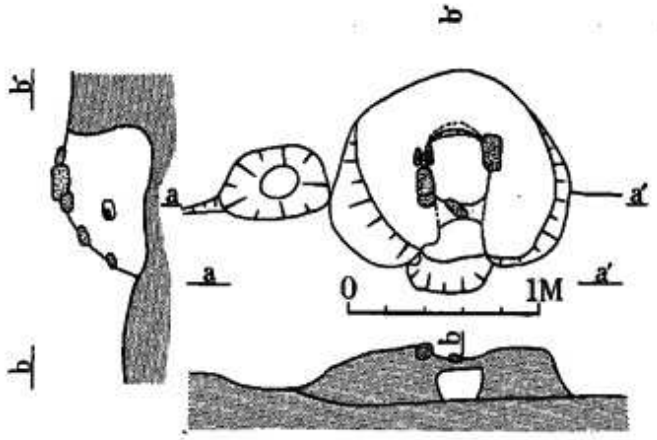


Fig.51　C 7 号跡カマド実測図 1/40

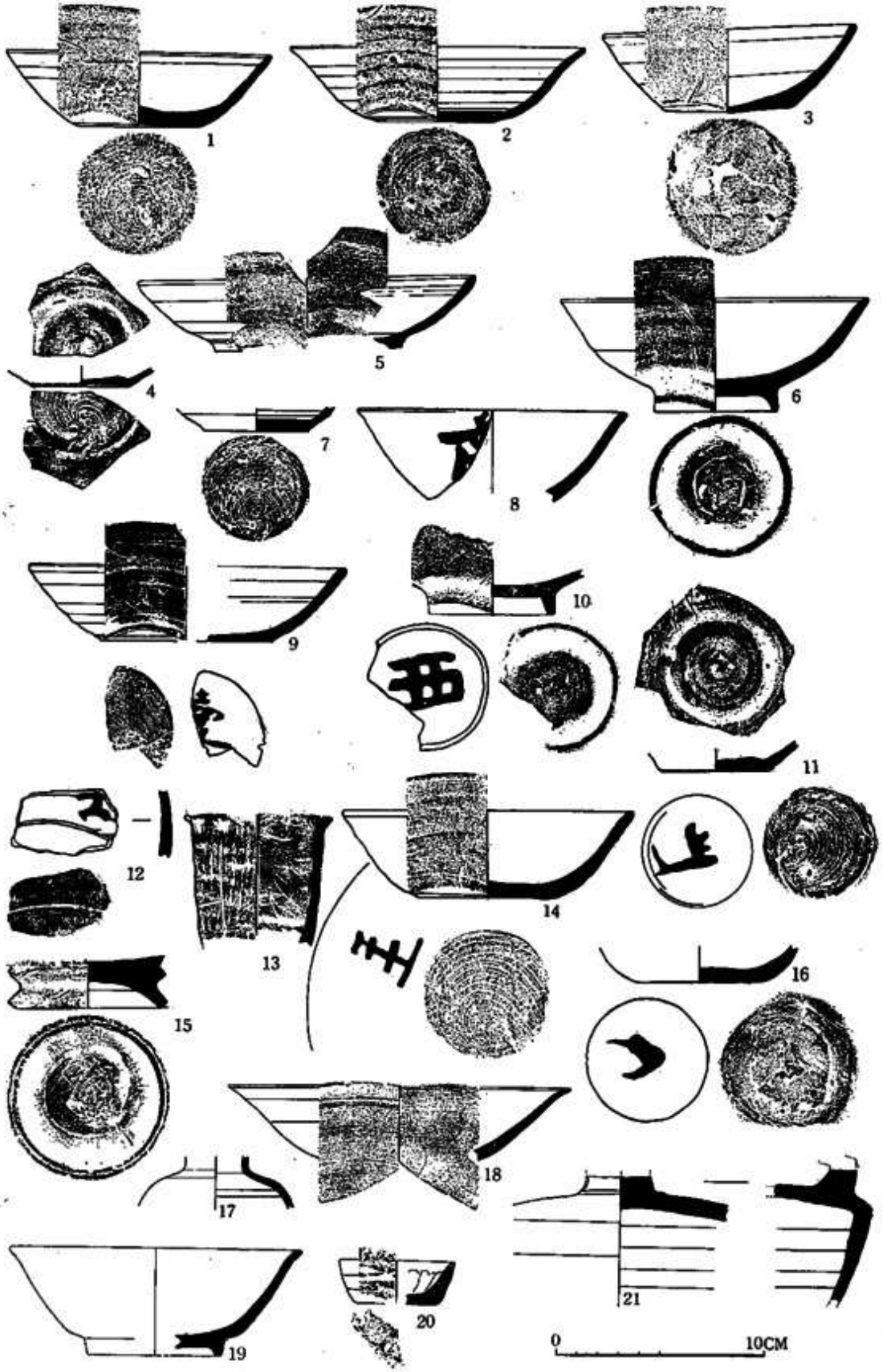


Fig.52　C 7 号跡土器実測図 1/3

C７号跡土器一覧表　(Fig52・53・54，第16・17・21・26・27・28・29図版)

器形	種別	番号	図版番号	出土位置	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	手法 体部	手法 底部	手法 口辺	備考
坏	H	1			黒	褐	砂粒含有	A	ロクロ	糸切		
坏	S	2			灰褐	灰褐	砂粒多含有	B	ロクロ	糸切		
坏	H	3	21—9		黒	褐	砂質	B	ロクロ	糸切		底部から体面にかけ煤附着
坏	S	4			茶褐	茶褐		B	欠	糸切	欠	堅緻
坏	S	5			淡灰	淡灰	砂粒僅かに含有	A	ロクロ	欠		
坏	H	6	21—10 27—9		黒	褐色		A	ロクロ	糸切		高台付
坏	S	7			暗灰	暗灰			ロクロ	糸切	欠	
坏	H	8			黒	褐色	良質で雲母含有	A	ロクロ	欠		墨書
坏	S	9			灰	灰	黄褐色斑附着	B	ロクロ	糸切		墨書
坏	H	10			黒	赤褐		A	欠		欠	高台付，底面墨書「西」
坏	S	11			灰	灰		A	欠	糸切	欠	墨書
不明	H	12			赤褐	赤褐		B		欠	欠	墨書
甕	H	13	26—17		褐	褐	粗砂粒雲母含有	A	輪積	欠		表面に篦状具による整形痕
坏	H	14	21—7		黒	褐		A	ロクロ	糸切		墨書，暗文
不明	H	15			黒	淡褐	粗砂粒含有	A	欠		欠	高台付
坏	S	16			灰	灰		A	欠		欠	墨書
壺	K	17	26—12		灰	灰		A	欠	欠		肩部から頸部にかけてロクロ条痕
坏	K	18			灰	灰		A	ロクロ	欠		内外面共に施釉
坏	K	19			灰	灰		A	ロクロ			高台付
手捏	H	20	29—4		淡褐	淡褐	粗砂粒雲母含有	B	輪積	木葉		
平瓶	K	21	26—14		灰	緑	良質	A	ロクロ	欠		把手が缺けるが平瓶と認定
蓋	S	22			灰	灰	砂粒含有	A				天井部上半欠く，ロクロ条痕
蓋	S	23	26—11		青灰	青灰	砂粒含有	A				宝珠，天部部欠く，ロクロ条痕
不明	K	24			灰	灰		A	欠	欠		ロクロ条痕
壺	S	25			暗灰	暗灰		A	叩目	欠	欠	有紐壺形須恵器
不明	S	26			灰	灰		A	欠	欠		
不明	S	27			灰	灰		A	欠	欠		
不明	S	28	26—15		灰	灰		A	欠	欠		
不明	H	29			褐	褐	粗砂粒雲母含有	A	欠	木葉	欠	内面は櫛目状痕
不明	S	30	28—2		灰	灰		A	欠	欠		
不明	S	31	28—3		灰	灰		A	欠	欠		
不明	H	32			褐	褐	雲母含有	B	欠	木葉	欠	
不明	H	33			黄褐	黄褐	粗砂粒雲母含有	A	欠	木葉	欠	内面細櫛目状痕
不明	S	34			暗灰	暗灰		A	ロクロ	欠	欠	堅緻
壺	S	35			灰	灰	粗砂粒若干含有	A	押型	欠	欠	肩部下方に耳を付す「四耳壺」と認定
壺	K	36	16—7		白灰	緑	良質	A	ロクロ		欠	底面煤附着，内底に灰密着
不明	S	37	16—2		灰	灰		A				
不明	K	38	26—10		黒褐	黒褐	砂粒含有	A	ロクロ			頸部
壺	K	39	26—16	埋	灰	灰		A	ロクロ	欠	欠	外面釉薬附着
坏	H	40	26—20	埋	黒	褐	雲母，砂粒含有		ロクロ	ヘラ起	欠	高台付，暗文あり

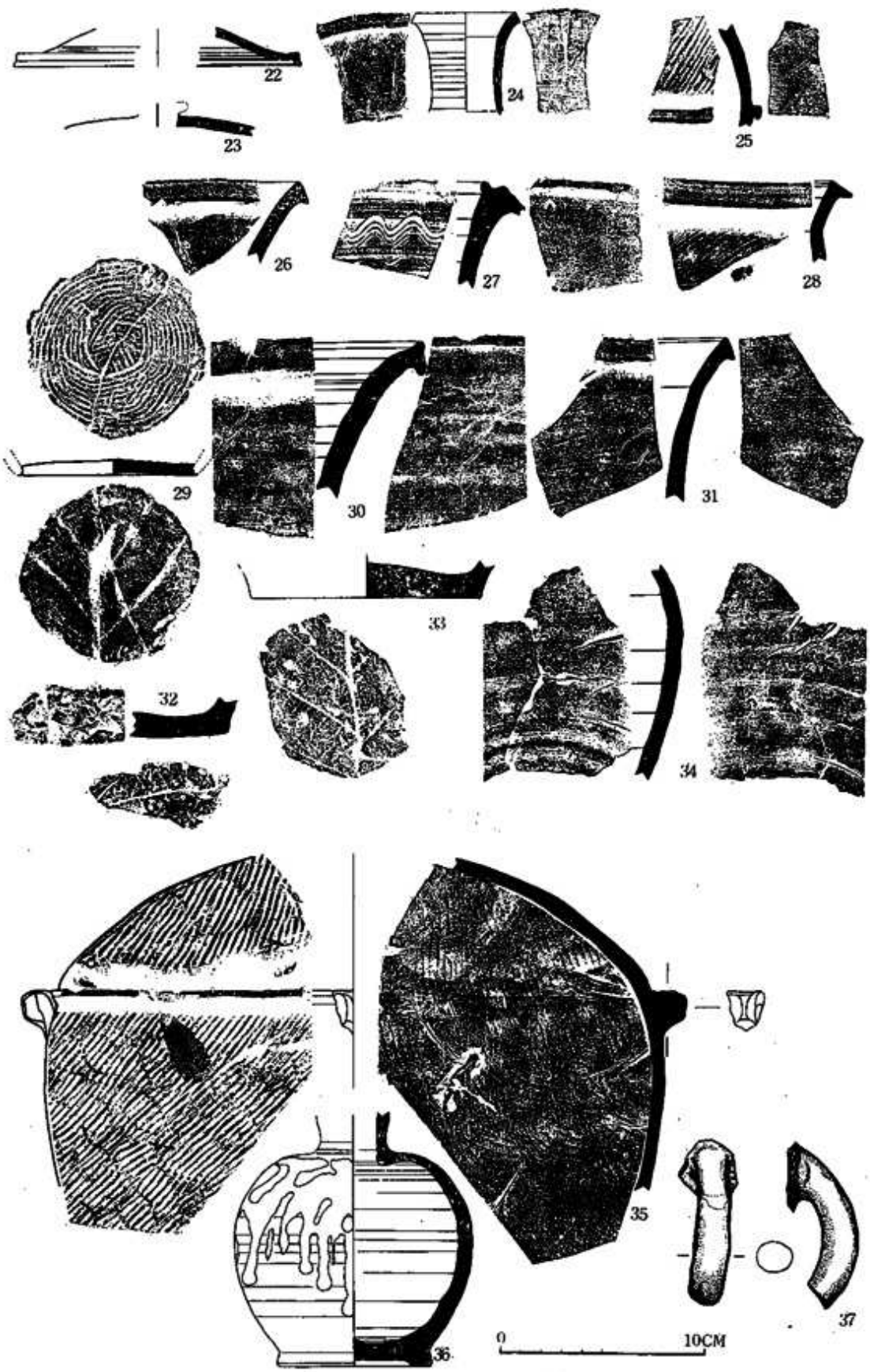


Fig.53　C 7 号跡土器実測図 1/3

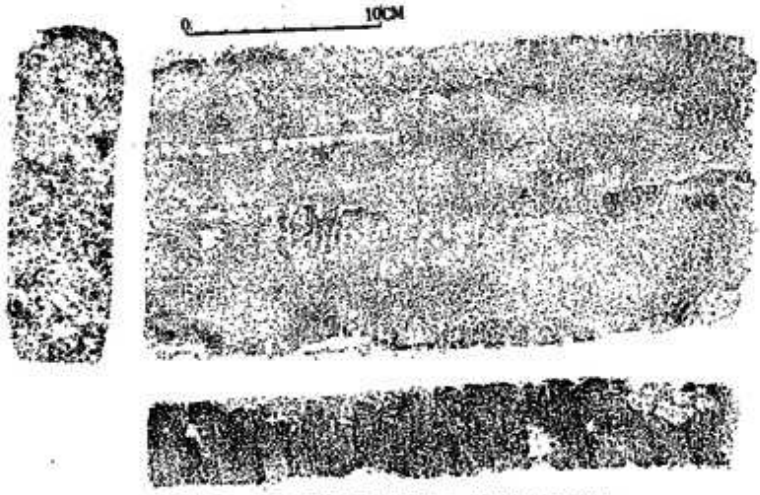


Fig.54　C 7 号跡長方扁平石（砂岩）拓影1/4

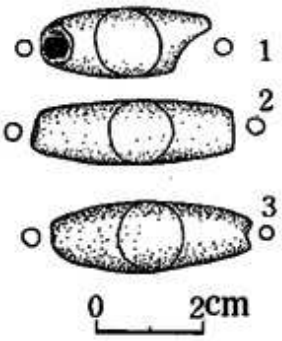


Fig.55　C 7 号跡土錘実測図 2/3

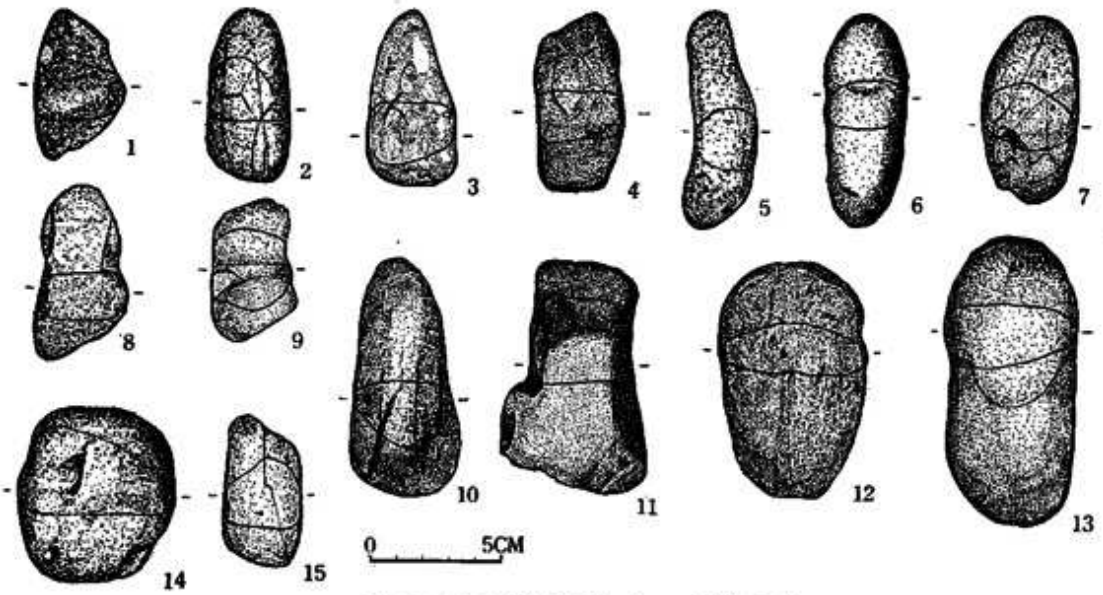


Fig.56　C 7 号跡 Toilet stone 実測図 1/3

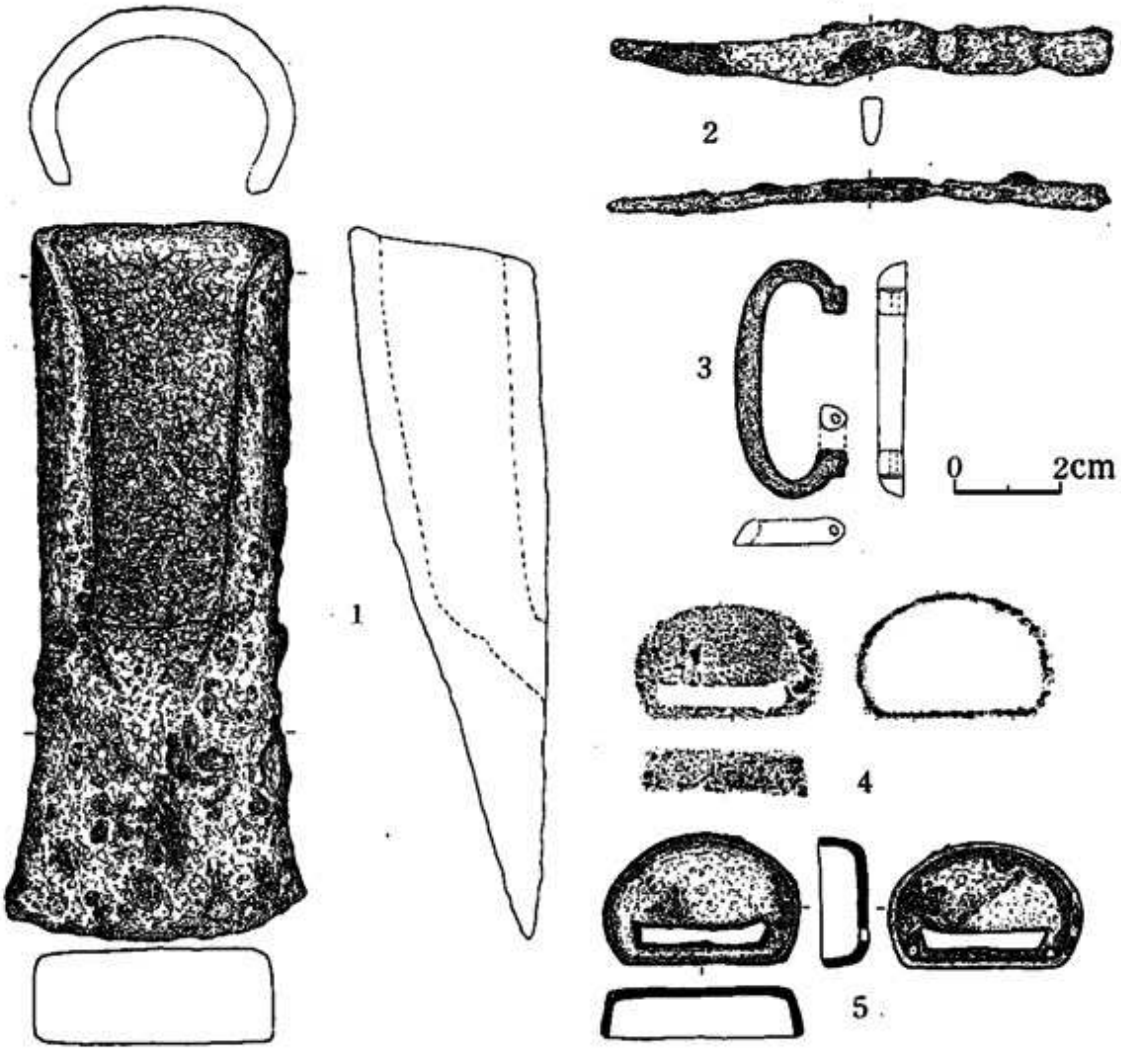


Fig.57　C７号跡青銅・鉄製品実測図 2/3

青銅・鉄製品 (Fig57)

名称	番号	図版番号	出土状況図版番号	備考
鉄斧	t_1	19—8	15—1 15—2	周溝出土
刀子	t_2			床面直上出土
鏃具	t_3	18—7	15—2 15—3	
錘	t_5	18—8	15—2 15—3	丸鞆，周溝附近出土

C地区8・9・10号住居跡 (Fig58, 第6～8図版)

この三軒の住居跡は，互いに切り合ったものであったが，発掘の結果，9号は火災に遭い，焼材や焼土が，散在していたもので，10号がその平面形の部分のみを整地して構築した。したがって9号跡と10号跡平面以外には，火災によって廃屋になったままの状態で，焼材や焼土などが散在していたのである。10号跡の廃屋後に8号跡が9号跡と10号跡の西側の一部を切って構築された。8号跡にはカマドが遺存し，9，10号跡よりも新しい構築であることは述べるまでもないが，カマド周辺の焼土が，10号跡にも及び，さらに，中央床上に炭化萱の遺存などから火災に遭ったものとすることができる。

C8号住居跡 (Fig58, 第6・8図版)

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡は9，10号跡の西側の一部を切り込んで構築した5.5×5.7mの長方形平面の竪穴式住居跡である。	側壁上部はローム層上面まで除土したため壁の立ちあがりはきわめて低い。四囲の壁は東（カマドあり）約30cm，西約28cm，南約18cm，北約28cmで直立せず外傾している。	床はローム層そのものに設けられ，遺存状態は良好，ほぼ平らである。カマドの南側から10号跡にかけて焼土の堆積がみられ，さらに中央部床上には炭化した藁が遺存していた。この藁は住居内での敷物として用いられたものであるのか明瞭を欠くが，火災に遭ったものとは考え難い。	周溝は四壁下床にかなり明瞭に認められ，巾15～40cm深さ約10～15cmである。	柱穴らしき穴は8個認めえたが，P_1～P_4を主柱として，P_5～P_8までを補助の柱穴とすることができるであろう。	東壁中央より北寄りに設けられたものであったが両袖の遺存状態は耕作などによって若干削平され，基部の遺存した粘土製のカマドである。火床は長円形平面で，良く焼けて赤色を呈していた。煙道は認められなかった。 カマドの周辺には焼土が散在していたが，火災によるものでなく，カマドの崩れたものと解しえられる。	

Fig.58　C 8 · 9 · 10号跡実測図 1/80

C 9号住居跡 (Fig58, 第6～8図版)

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡の西一部は8号跡の構築によって切断され，さらに10号跡がほぼ中央に重複構築された。さらに本跡は火災に遭って柱材や垂	側壁上部はローム層上面まで除土したため，壁の立ちあがりはきわめて低い。遺存する壁の立ちあがりは北約20cm，東約35cm，南約30cmで直立せず，外傾している。	火災による廃屋で南東隅の炭化木材のごときは，放射状に遺存し，垂材を思わせた。その他10号跡の構築部分以外は炭化材，焼土などが遺存していて火災ののち整地をしなかったことがうかがわれた。床はローム層そのもので，ほぼ平らであった。	周溝はまったく認めることができなかった。	柱穴らしき穴は全部で11個認めたが，P_1～P_4までを主柱穴とし，P_5-P_{11}までを補助的柱穴としていいだろう。	北，東，南壁にはカマドの遺存を認めえなかったので，西壁に構築されたものと考えられる。	本跡は火災に遭ったため焼材の遺存が顕著であり，ことにP_2の柱穴の中には柱材の一部が炭化して遺っていた。またこの柱穴の近くには，トイレットストーンが一塊まりになって多数遺存していた。
材などが焼け落ちて遺存していた。住居跡は5×5.5mの長方形の平面で，北，東には，カマドを認めえず，西壁に設けられていたものであると考えられる竪穴式住居跡である。						

C10号住居跡 (Fig58, 第6～8図版)

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
9号跡上に構築され，さらにその西側の一部は8号跡によって切られていた。一辺4.5mの方形平面の竪穴式住居跡である。	側壁の立ちあがりは，図によって判明するごとく，削平によってうしなわれたものと考えられる。もっとも本跡は，9号跡の上に構築されたため，ローム層を掘りくぼめてつくった住居跡と異なり側壁の遺存は他の一般的竪穴式住居跡と同一視するわけにはいかない。	床は火災に遭った9号住居跡のそれをそのままつきかためて床としている。	北東と南東に周溝と思われるものが巾10～30cm，深さ5～10cmにわたって認められた。この周溝の遺存によって，二つの住居跡の平面形を推定する一つの手掛りとなった。なほカマドの両側に周溝は及んでいない。	本跡の柱穴と思われる穴は全部で6個確認したが，主柱をP_1～P_4までとした。P_5，P_6は補助的柱穴ではなかったろうか。	南東側壁中央にあったわけで石を芯として構築されていた。このカマドは9号跡の火災のあとの炭化物（厚さ約10cm，長さ約20cm）の上に芯の石を置き，粘土で覆ったものと考えられる。	

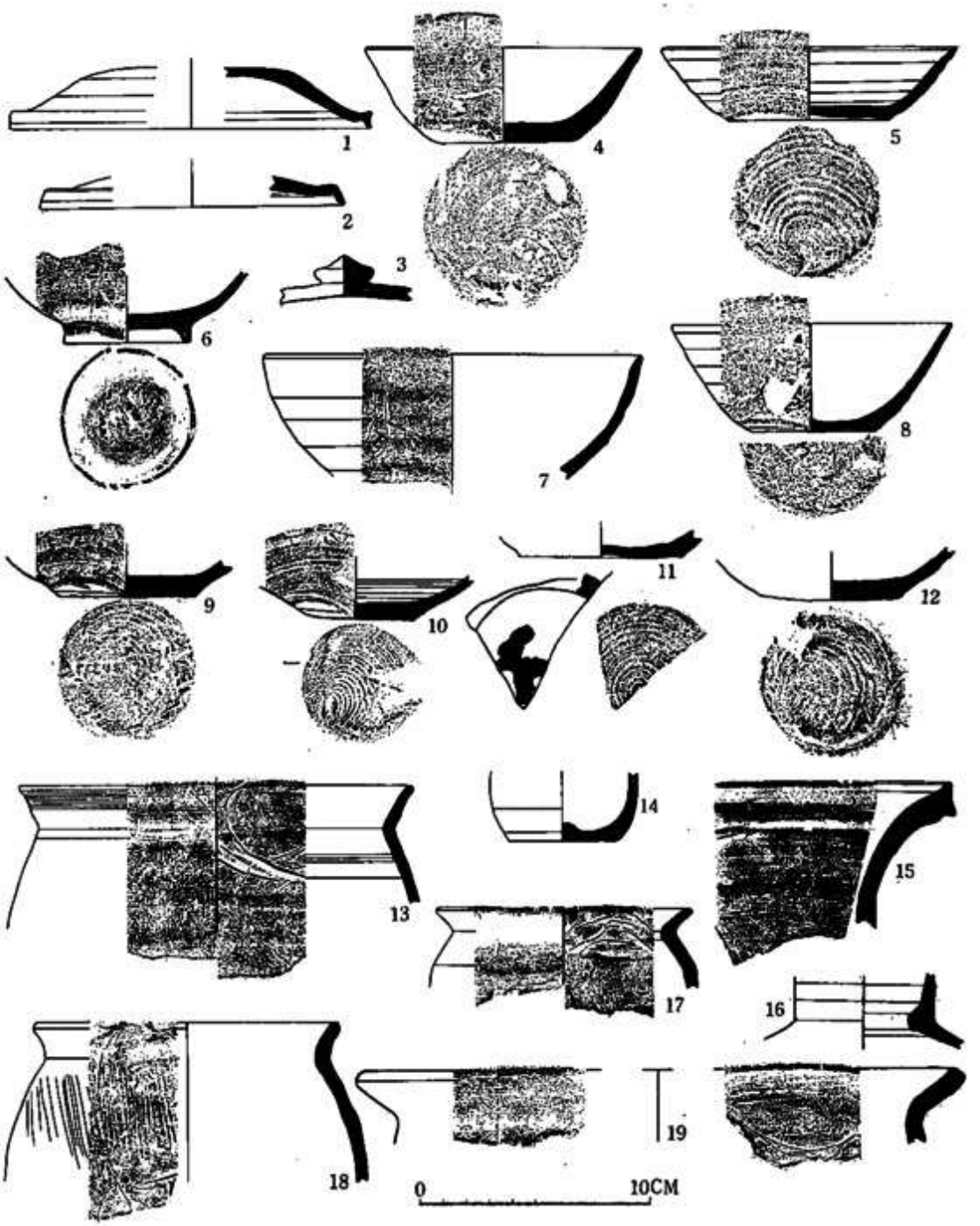


Fig.59　C８号跡土器実測図 1/3

C 8号跡土器一覧表 (Fig59, 第21・26・27図版)

器形	種別	番号	図版番号	出土位置	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	手法 体部	手法 底部	手法 口辺	備考
蓋	S	1			灰	灰		A				ロクロ痕
蓋	S	2			灰	灰	良質	A				ロクロ痕
蓋	S	3	27—5		灰褐	灰褐		C				宝珠
坏	H	4	21—11 27—1		黒	褐	砂粒多分含有	A	ロクロ	糸切		体外面に部分的に黒斑を認める，暗文
坏	S	5			暗灰	暗灰		A	ロクロ	糸切		外底面糸切のあと篦で若干整形
坏	H	6	26—21		黒	淡褐	粗砂粒，雲母含有	A	ロクロ		欠	数条の細櫛目状具による暗文，高台付
坏	H	7			黒	褐	雲母含有	A	ロクロ	欠		
坏	H	8			黒	赤褐	粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		暗文
坏	H	9		埋	黒	暗褐	雲母含有	B	欠	糸切	欠	
坏	H	10			暗褐	暗褐	雲母含有	B	ロクロ	糸切	欠	墨書
坏	H	11		埋	黒	赤褐		B	欠		欠	墨書
坏	H	12			黒	褐	雲母含有	A	ロクロ		欠	
甕	H	13	26—18	埋	淡褐	淡褐	粗砂粒，雲母含有	A	ロクロ	欠		外面煤附着
不明	K	14	26—19		灰	灰		A	ロクロ	ヘラ削	欠	
不明	S	15	27—4		灰	灰		A	欠	欠		ロクロ整形
不明	K	16	27—6	埋	灰	灰		A	欠	欠	欠	ロクロ整形
甕	H	17	27—3		褐	褐	粗砂粒，雲母含有	A	欠	欠		外面煤附着
甕	H	18	27—2		茶褐	茶褐	粗砂粒，雲母含有	B	ク シ	欠		外面櫛目状具による整形痕
甕	H	19	27—8		赤褐	赤褐	雲母含有	B	欠	欠	横なで	
不明	H	20	27—7		褐	褐	雲母含有				横なで	
不明	K	21	27—10		灰	灰	砂粒含有	A	ロクロ	欠	欠	外面釉薬附着
		22	27—11		灰	灰	砂粒含有		ロクロ	欠	横なで	外面釉薬附着
注口	S	23	17—1	埋	灰褐	灰褐	砂粒含有	A	ヘラ			

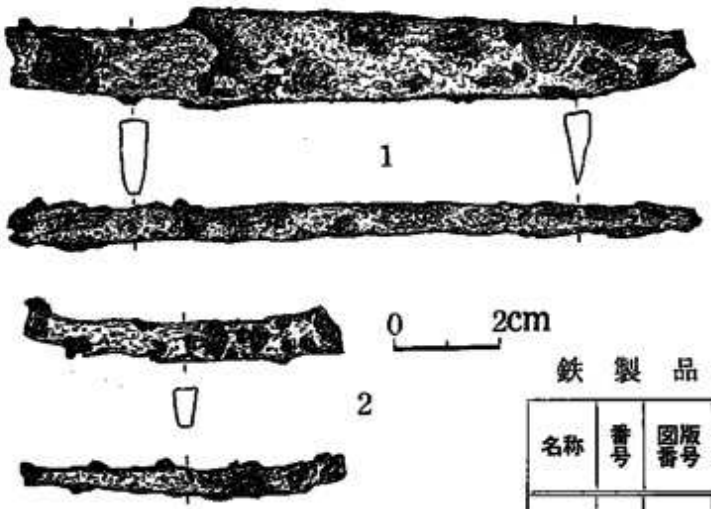


Fig.60 C 8号跡鉄製品実測図 2/3

鉄製品 (Fig60)

名称	番号	図版番号	出土状況図版番号	備考
刀子	t_1	18—5		木質錆着，刃部先端欠失
刀子	t_2			両端欠失

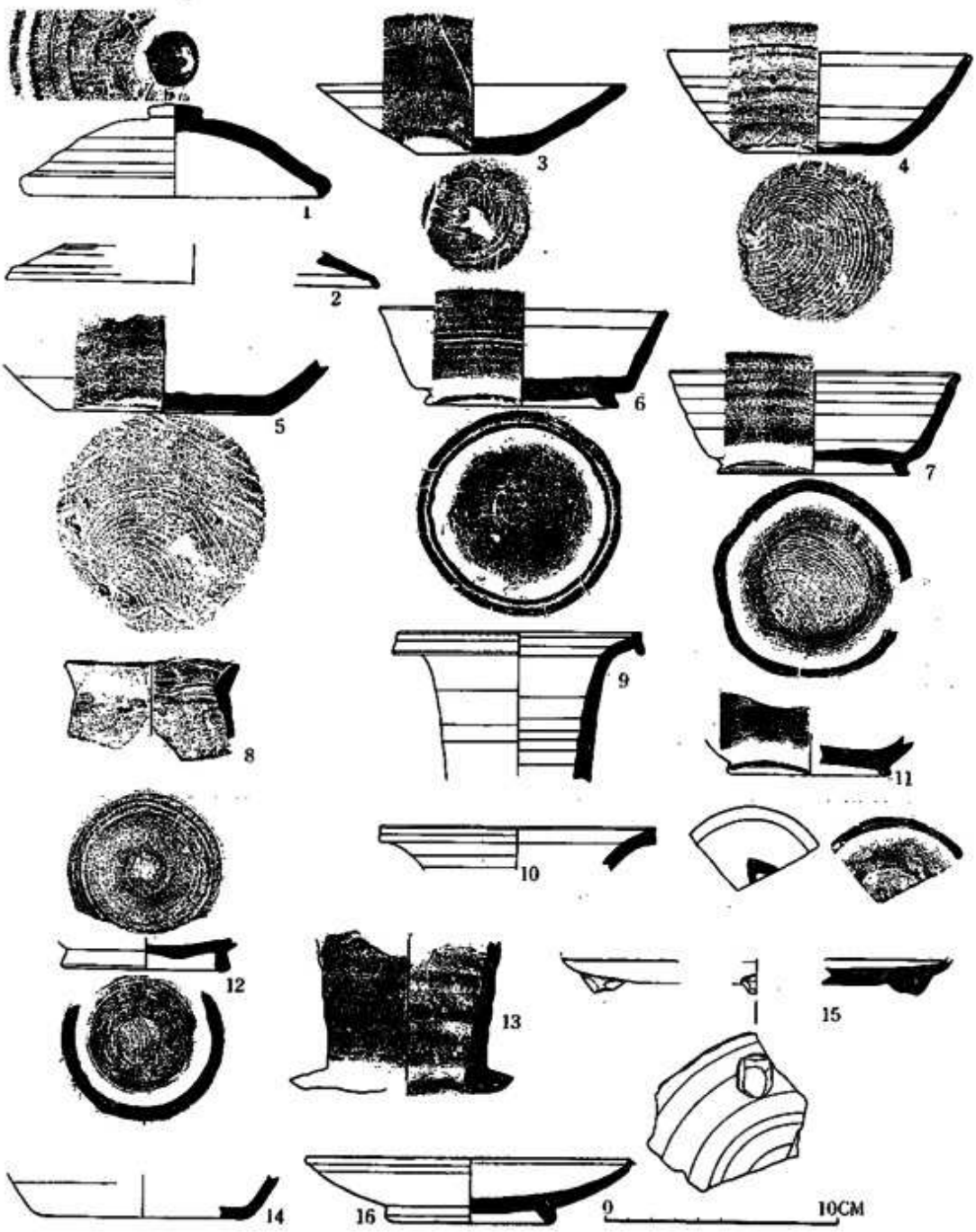


Fig.61　C９号跡土器実測図 1/3

C 9号跡土器一覧表 (Fig61, 第21・22・27・28図版)

器形	種別	番号	図版番号	出土位置	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	手法 体部	手法 底部	手法 口辺	備考
甕	S	1	22—2 27—16	床	暗灰	暗灰	砂粒多含有	A				
甕	S	2		埋	灰	灰	良質	A				
坏	H	3		床	黒	淡褐		A	ロクロ	糸切		暗文，底面の糸切痕を篦ですり消している
坏	S	4	22—3	床	灰褐	灰褐	砂粒含有	A	ロクロ	糸切		
坏	H	5	28—1		黒	淡灰		A	ロクロ	糸切	欠	暗文
坏	S	6	21—6		灰	灰		A	ロクロ			高台付
坏	S	7	21—12		淡灰	淡灰	粗砂粒若干含有	A	ロクロ	糸切		高台の作りは粗い
甕	H	8	27—15		暗褐	暗褐	雲母含有	A		欠		煤附着
不明	K	9	27—12		灰	灰	良質	A	欠	欠		内外面灰によるつや有
不明	K	10			緑	灰	良質	A	欠	欠		
坏	S	11			灰	灰		A	欠		欠	底面墨書
坏	S	12			灰	灰	良質	A	欠		欠	
不明	S	13	27—14		灰	灰		A	欠	欠		
坏	S	14			灰	灰	良質	A	ロクロ	欠	欠	
皿	K	15	27—13		緑	灰		A	欠	ヘラ起	欠	「四足皿」？
皿	K	16			灰	灰		A	ロクロ			高台付

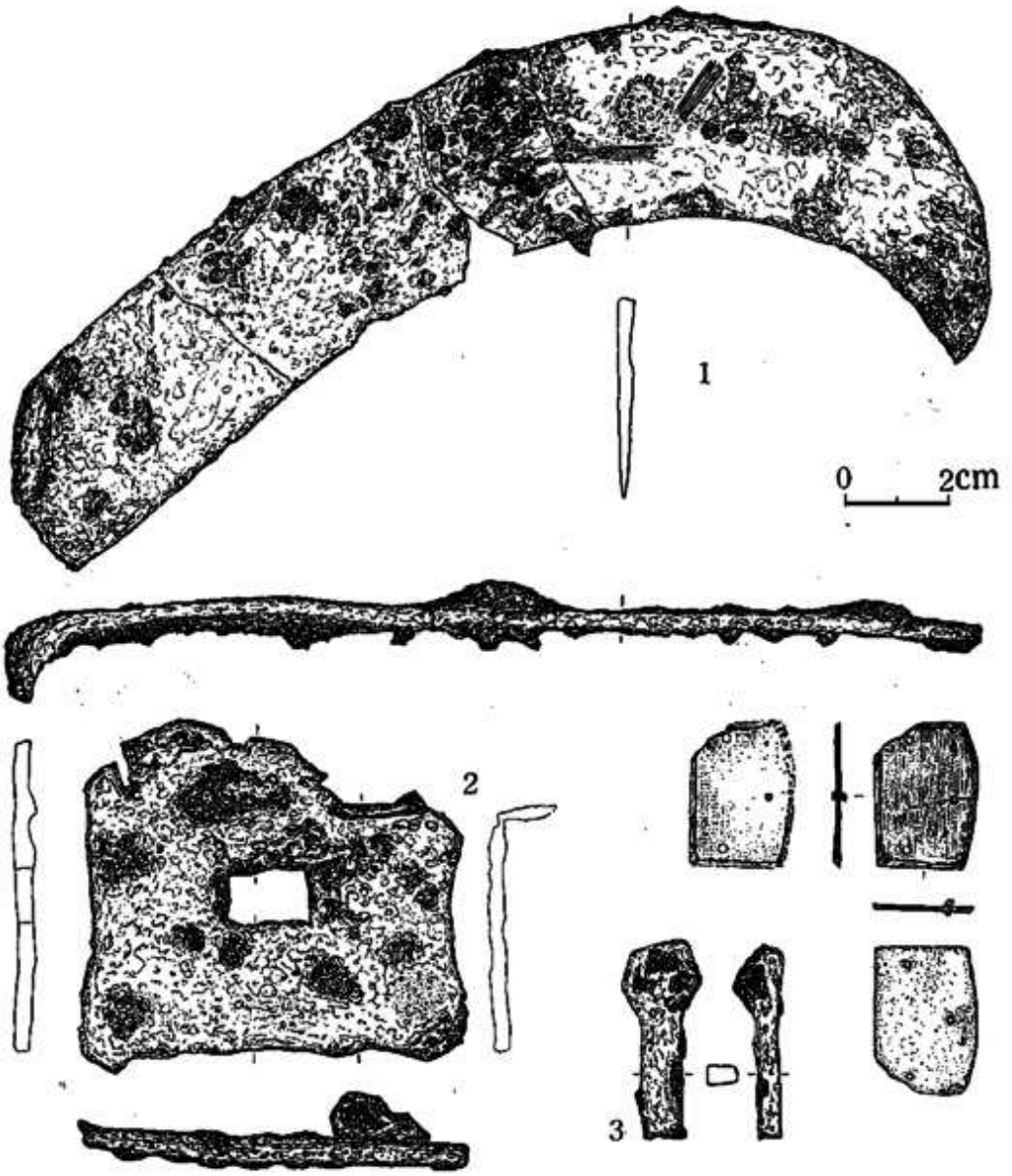


Fig.62　C９号跡鉄製品実測図 2/3

青銅・鉄製品 (Fig62)

名　称	番号	図版番号	出土状況図版番号	備　　考
鏃	t_1	19—1		中央部，刃部先端に木質誘着
不　明	t_2			一部欠失
刀　子	t_3			刃部先端欠失
帯先金具	t_4	18—9		一部欠失，周溝出土

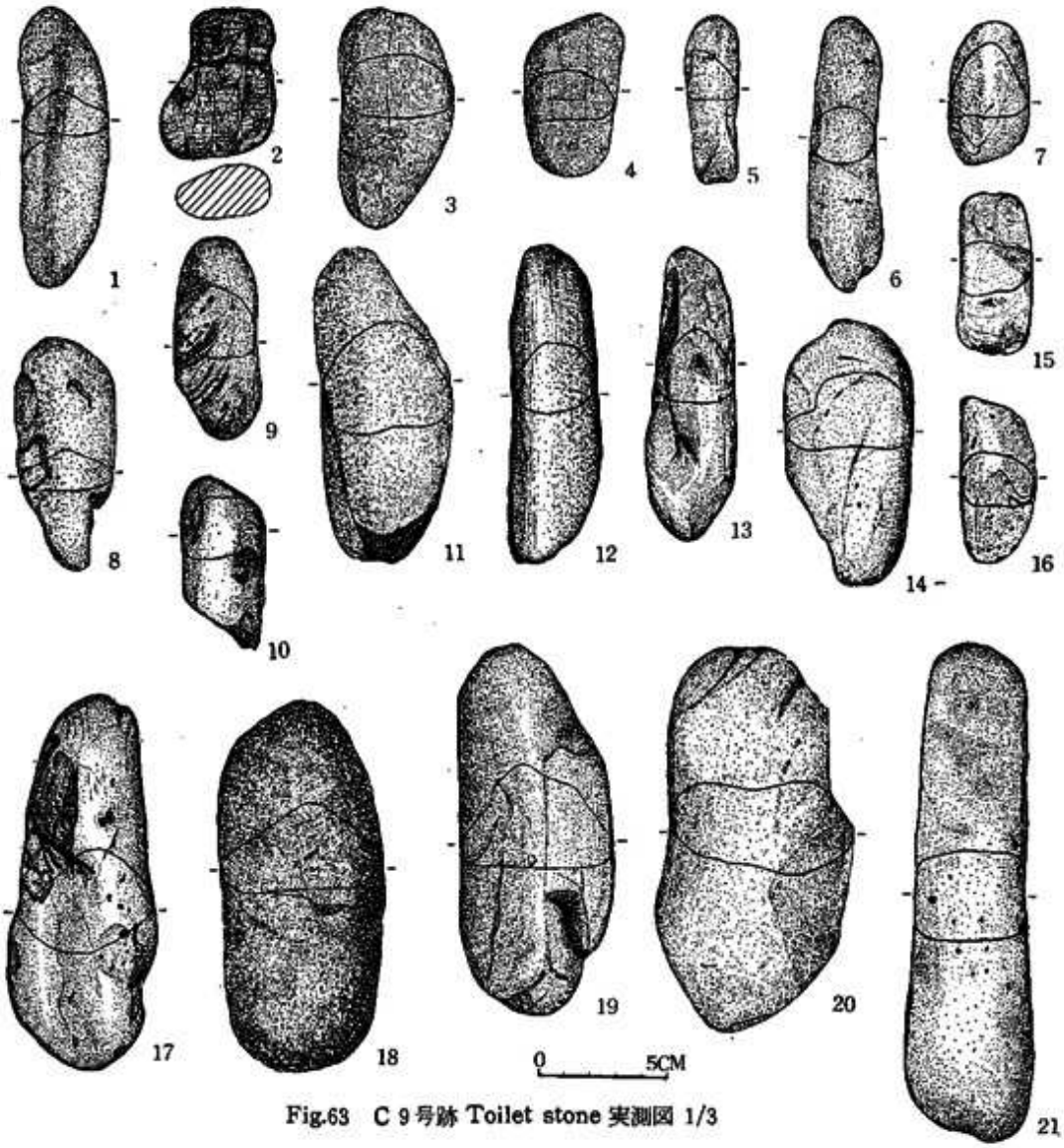


Fig.63 C 9号跡 Toilet stone 実測図 1/3

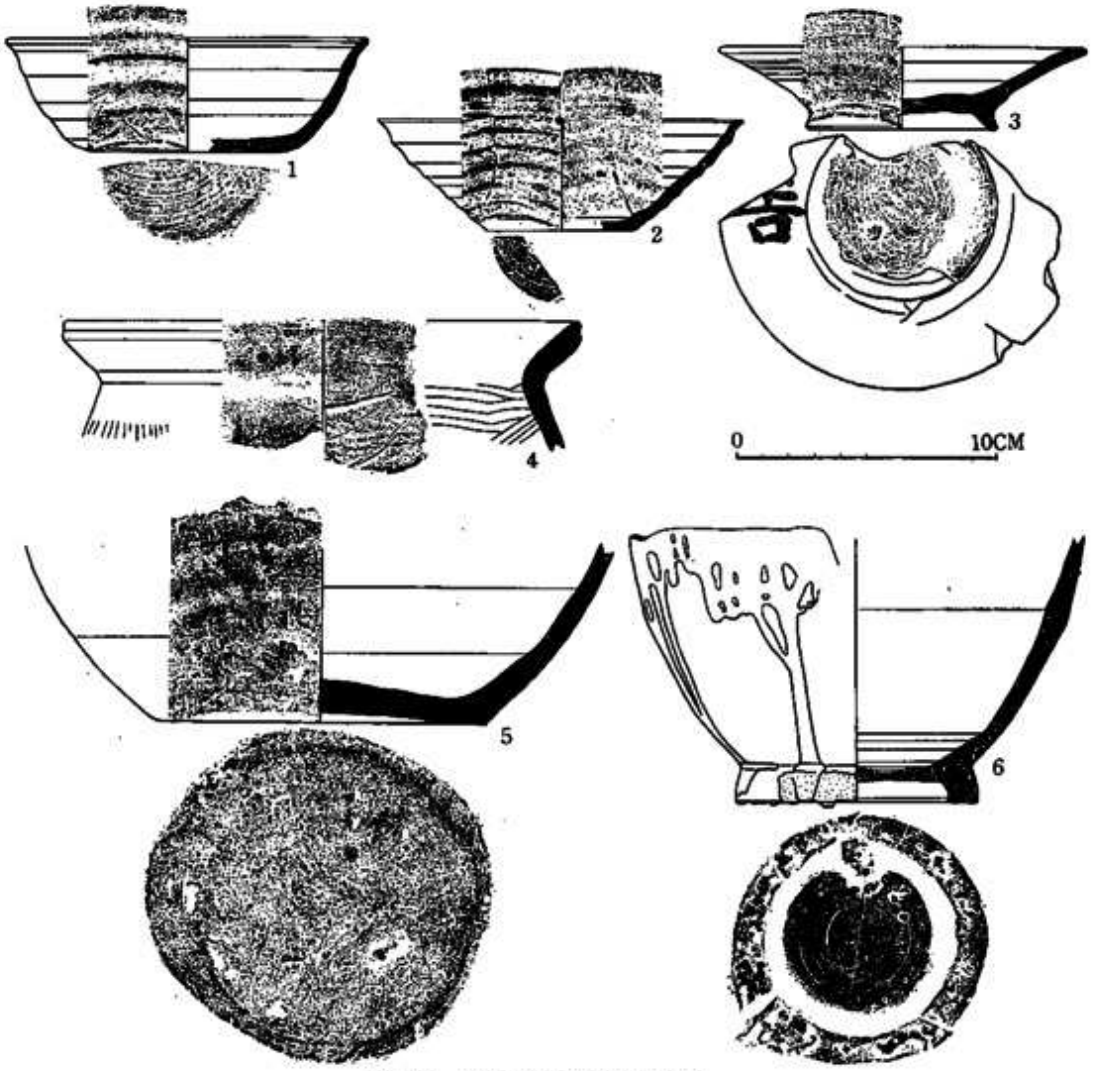


Fig.64　C10号跡土器実測図 1/3

C10号跡土器一覧表（Fig64，第22図版）

器形	種別	番号	図版番号	出土位置	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	手法 体部	手法 底部	手法 口辺	備考
坏	S	1		床	灰	灰	粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		
坏	S	2		床	青灰	青灰		A	ロクロ	糸切		
坏	H	3		埋	黒	暗褐	粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		体面墨書，はりつけ高台，外面煤附着
甕	H	4	22—9	床	淡黄	淡黄	粗砂粒含有	A	欠	欠		内面櫛目状痕
不明	H	5		埋	赤褐	赤褐		B	輪積	ヘラ削	欠	底部内外共に黒ずんでいる
不明	K	6		埋	灰	緑	粗砂粒若干含有	A	ロクロ		欠	底面に灰が被った跡が有，底面に十文字の筆描痕

D 地 区

D地区は25×35mの範囲を発掘し，5軒の住居跡と掘立柱の建物遺構を6軒分以上確認した。

本地区はC地区同様に，黒色土は80～100cmの厚い堆積であった。なお，B16，17号跡は竪穴式住居跡とは考えられず，きわめて浅いくぼみという感じの遺構であった。

D11号住居跡（Fig65・66，第9・10図版）

平面	側壁	床	周構	柱穴	カマド	備考
一辺6.1mの方形平面で，東壁中央に粘土づくりのカマドを設けた竪穴式住居跡である。	側壁上部はローム層上面まで除土したため，壁の立ちあがりはきわめて低い。四囲の壁は北約26cm，南約36cm，東約32cm，西約22cmで直立せず，外傾している。	床は5～10cmの厚さの貼床でほぼ平らであった。	四囲側壁下巾15～30cm，深さ約15～20cmの周溝が認められ，カマドの両側には及んでいない。	柱穴らしき穴は全部で12個認めたが，中央部の4個（P_1～P_4）の柱穴を主柱とすることができる。P_5～P_{12}は補助的な柱穴であろう。	東壁中央にあり，粘土で構築され，火床の平面はやや長方形である。火床は非常に良く焼けて赤色を呈し，煙道は認められなかった。	本跡西壁中央より北寄りの壁の上端直上黒色土中より黒色粘板岩製の石帯の石（丸鞆）が出土した。

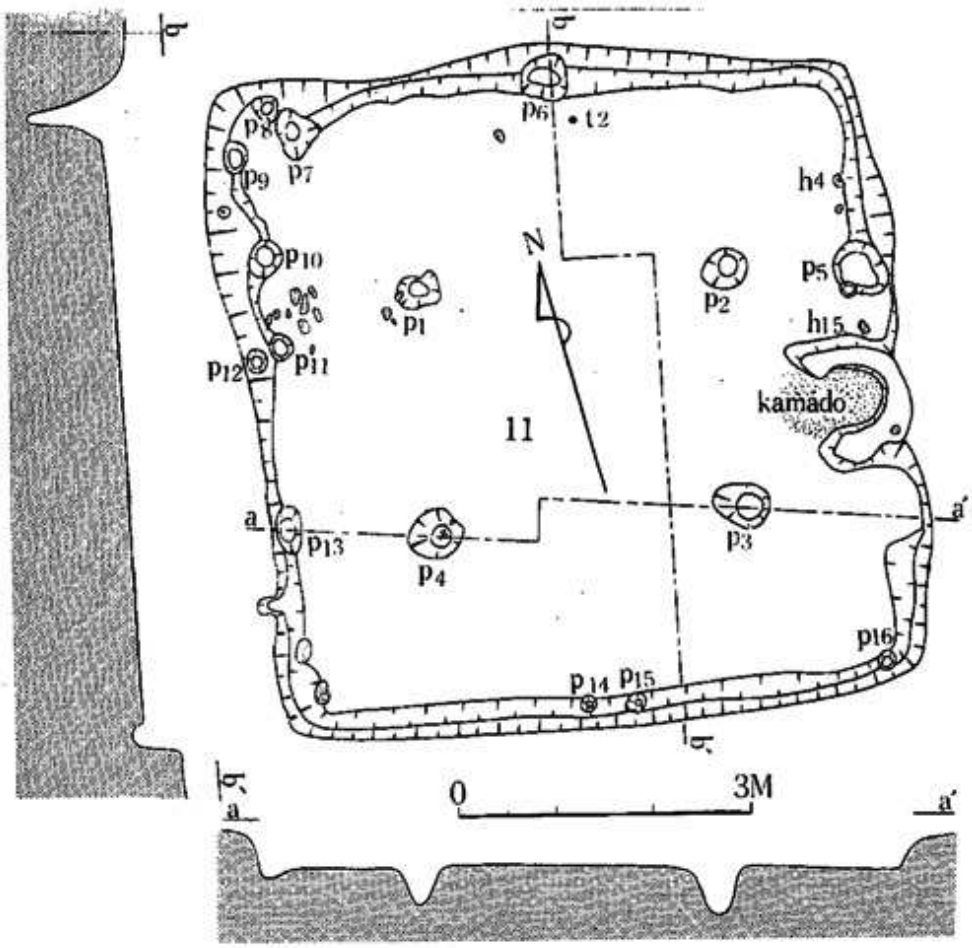


Fig.65 D11号跡実測図 1/80

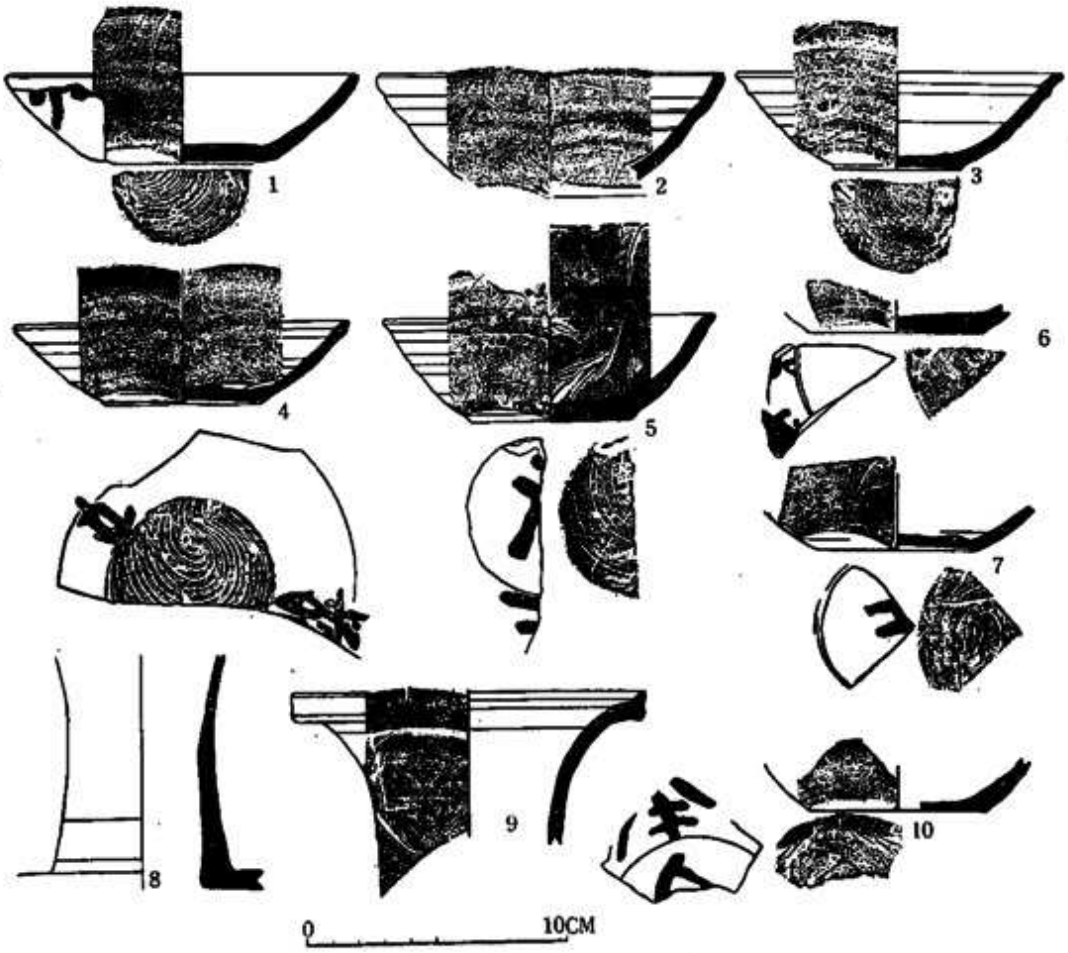


Fig.67　D11号跡土器実測図 1/3

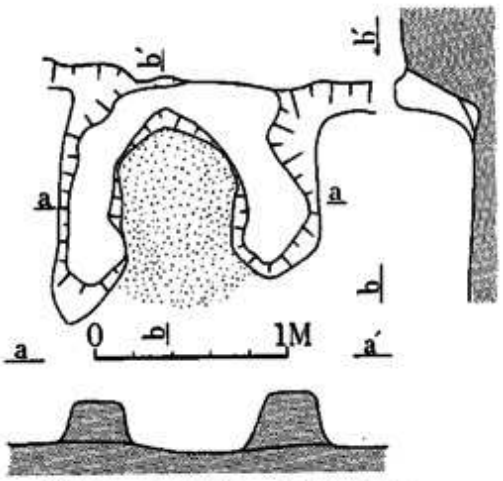


Fig.66　D11号跡カマド実測図 1/40

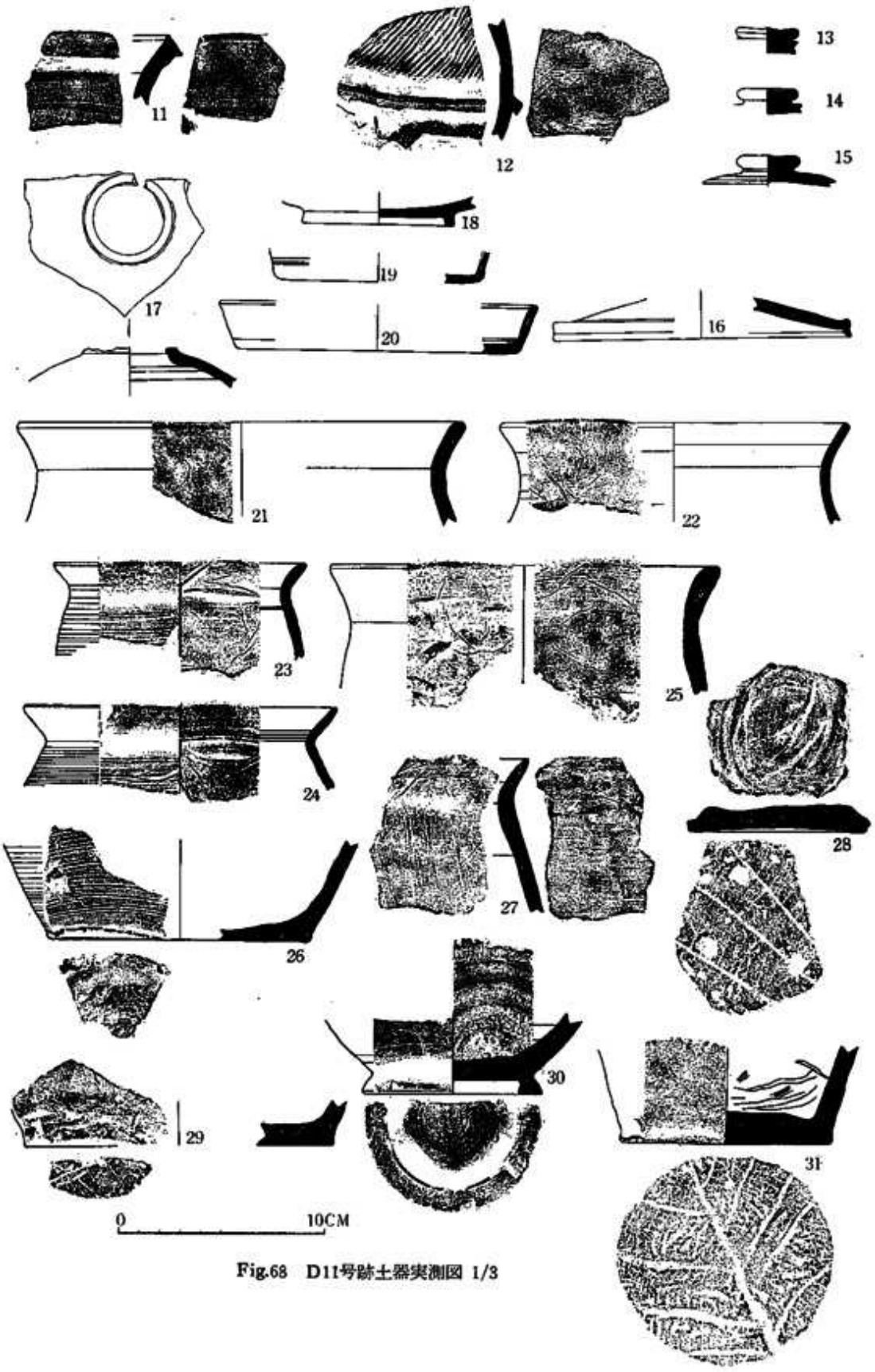
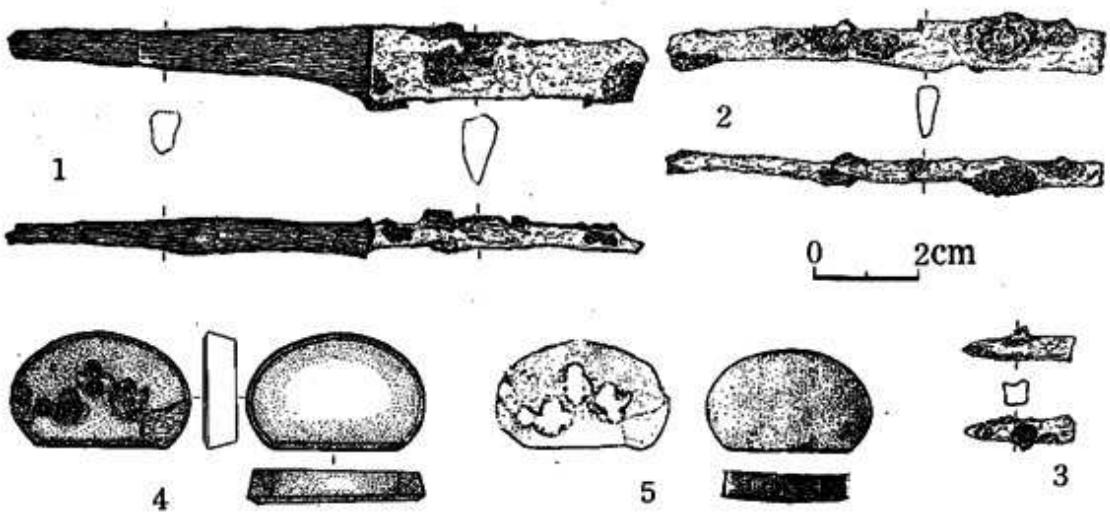


Fig.68　D11号跡土器実測図 1/3

D11号跡土器一覧表（Fig67・68、第28・29図版）

器形	種別	番号	図版番号	出土位置	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	手法 体部	手法 底部	手法 口辺	備考
坏	S	1		埋	灰褐	茶褐	粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		墨書有
坏	H	2		埋	黒	暗茶	雲母含有	B	ロクロ	欠		
坏	S	3		床	褐	灰褐	粗砂粒若干含有	A	ロクロ	糸切		
坏	S	4		床	灰	灰	粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		墨書二字
坏		5		埋	褐	褐			ロクロ	糸切		墨書
坏	H	6		床	黒	赤褐		A	ロクロ	糸切		墨書，暗文
坏	S	7		床	褐	褐		A	ロクロ	糸切		墨書
壺	S	8	29—1	床	灰	灰		A				頸部
壺	K	9		埋	灰褐	灰褐		A	ロクロ			内面口辺部に施釉附着
坏	H	10		埋	黒	褐	雲母，粗砂粒含有	B	ロクロ	糸切		墨書
壺	S	11	29—7	埋	灰褐	灰褐		A	ロクロ			
壺	S	12		埋	灰褐	灰褐	粗砂粒含有	A	輪積	ヘラ起		有紐壺形
蓋	S	13		埋	灰	灰		A	ロクロ			宝珠
蓋	S	14		埋	灰	灰		A	ロクロ			宝珠
蓋	S	15		埋	灰	灰		A	ロクロ			宝珠
蓋	S	16		埋	青灰	青灰	粗砂粒含有	A	ロクロ		横なで	細櫛目状痕
壺	K	17	28—7	埋	灰	淡青		A	ロクロ			外面釉薬若干附着
坏	K	18		埋	灰	灰		A	ロクロ	ヘラ起		高台付，内面釉薬附着
坏	K	19	28—4	埋	灰	灰		A	ロクロ	ヘラ切		全体釉薬
坏	K	20	28—5	埋	灰	灰		A	ロクロ	ヘラ切		皿形
壺	S	21		埋	灰褐	灰褐	砂粒含有	A	輪積			有紐壺形
甕	H	21		埋	淡褐	淡褐	雲母，粗砂粒含有	A	輪積		横なで	
甕	H	22	29—3	埋	赤褐	赤褐	雲母含有	B	輪積			口辺細櫛目状痕
小甕	H	23		埋	褐	褐	雲母，粗砂粒含有	A	ロクロ		横なで	櫛目状痕
甕	H	24	28—2	埋	赤褐	赤褐	雲母，粗砂粒含有	A	輪積			口辺細櫛目状痕
小甕	H	25		埋	褐	褐	粗砂粒含有	A	ロクロ			内外面共に櫛目痕
甕	H	26		埋	茶褐	茶褐	雲母含有	B	輪積			
甕	H	27		床	茶褐	茶褐	雲母，粗砂粒含有	A		木葉		細櫛目状痕内面有り
甕	H	28		床	黒	褐	粗砂粒含有	A	輪積	ヘラ		外面櫛目状痕
甕	H	29		埋	茶褐	茶褐	雲母，粗砂粒含有	A		木葉		
壺	S	30	28—13	床	灰	灰	粗砂粒若干含有	A	ロクロ	ヘラ		内面釉薬附着，煤附着，高台付
壺	H	31	28—11	床	淡褐	淡褐	良質	A	輪積	木葉		底部内面指，篦痕，外面篦，櫛目状痕
壺	S	32	28—6	埋	青灰	青灰	良質	A			横なで	細櫛目状痕
甕	S	33	28—8	埋	淡褐	淡褐	砂粒含有	A	ロクロ		横なで	流水文あり
壺	S	34	28—9	埋	灰褐	灰褐	砂粒含有	A	ロクロ	ヘラ起		高台付，内面釉薬附着
壺	S	35	28—10	埋	青灰	青灰	砂粒含有	A	輪積			櫛目状痕
不明	H	36	28—12	埋	赤褐	褐	雲母，砂粒含有	A	ロクロ	糸切		



鉄製品 (Fig69)

Fig.69 D11号跡青銅・鉄・石製品実測図 2/3

名称	番号	図版番号	出土状況図版番号	備考
刀子	t_1	18—2		基部木質膠着，刃部先端欠失
刀子	t_2			両端欠失，中央部に木質膠着，床面直上出土
刀子	t_3			両端欠失
石帯	t_4	18—10		(丸鞆)，西壁上端出土

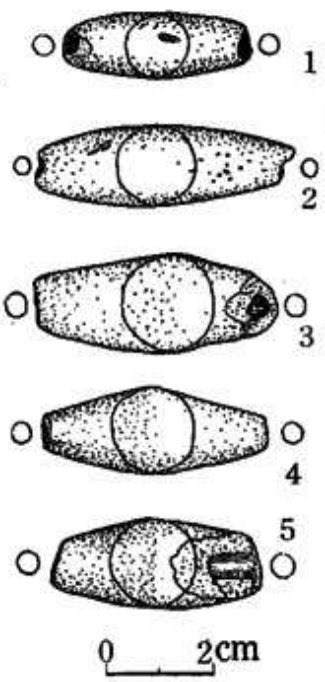


Fig.70 D11号跡土錘実測図 2/3

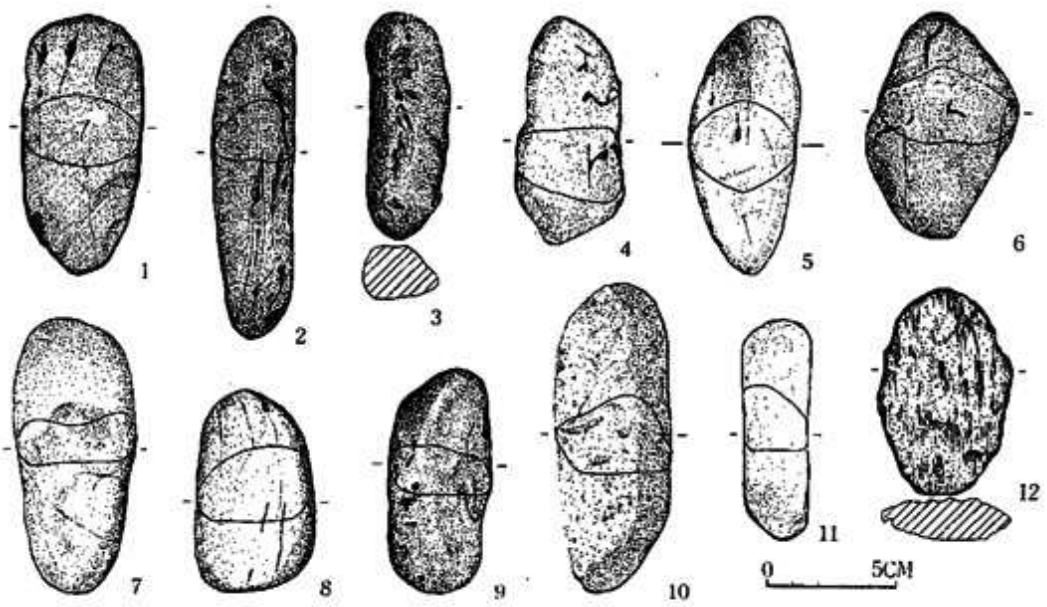


Fig.71　D11号跡 Toilet stone 実測図 1/3

D12号住居跡（Fig73，P8・9図版）

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡は13号跡によって破壊されたもので，推定では一辺約5mの方形の竪穴式住居跡である。	側壁上部はローム層上面まで除土したため，壁の立ちあがりはきわめて低い。遺存する壁は，北約48cm，南約50cm，西約34cmであり，直立せず外傾している。	床はローム層そのもので，東壁側が13号跡によって切られ，さらに，13号跡の西側部分の貼床が進入してきたため，床面上には13号跡の貼床が遺存していた。	周溝は南，北，西壁下に巾約10～25cm深さ約10～20cmの周溝が認められた。	柱穴らしき穴は全部で，4個認められたが，P_3，P_4とP_1，P_2との配置が床中央部に4本配する一般的な竪穴住居跡の柱の配置とは若干異り，上屋構造にしても，若干の相違をもつものであろう。	本跡のカマドは現存北，西，南壁には認められず，13号跡の貼床の進入によって破壊されてしまい焼土が散在していた。このカマドはおそらく11号跡類似の粘土製のものであったと思える。	

D13号住居跡 (Fig73, 第8・9図版)

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡は12号跡の東壁部を壊わして構築したものである。4.4×5mのやや台形を思わせる平面形で，東壁中央部にカマドが設けられている。	側壁上部はローム層上面まで除土したため，壁の立ちあがりは，きわめて低い。四囲の壁は北約30cm，南約25cm，東約38cm，西約32cmであり直立せず，外傾している。	床はローム層そのもので，遺存状態は良好，西壁部が12号跡東壁を壊して構築しているため貼床となり，12号跡床面よりも約20cm低くなっている。	北，東，西壁下に巾約10～25cm，深さ5～10cmの周溝が認められた。 西壁部は別記のごとく破壊に遭ったため明瞭を欠く。	柱穴らしき穴は3個確認したが，いかなる柱の配置を考えるべきか即断し難たい。	東側壁中央に設けられ，石を芯としてその上を粘土で構築していた。カマドの左袖手前にはカマドがくずれ粘土が散乱し，さらに芯材に用いられた石も散在していた。火床は方形で良く焼け，赤色を呈していた。煙道は認められない。	

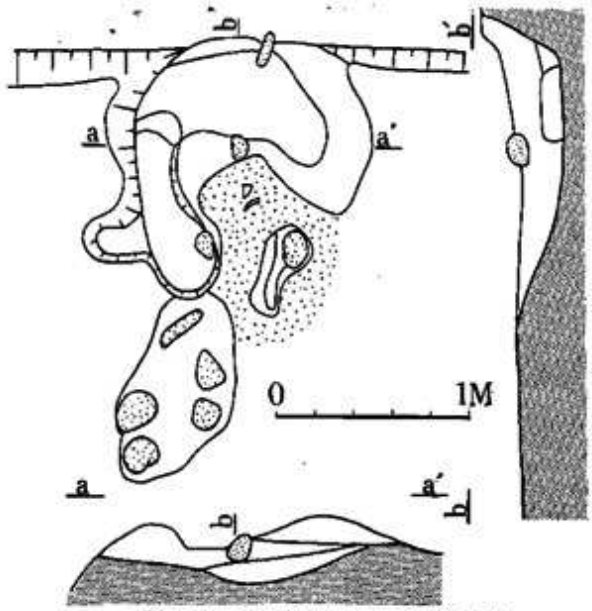


Fig.72 D13号跡カマド実測図 1/40

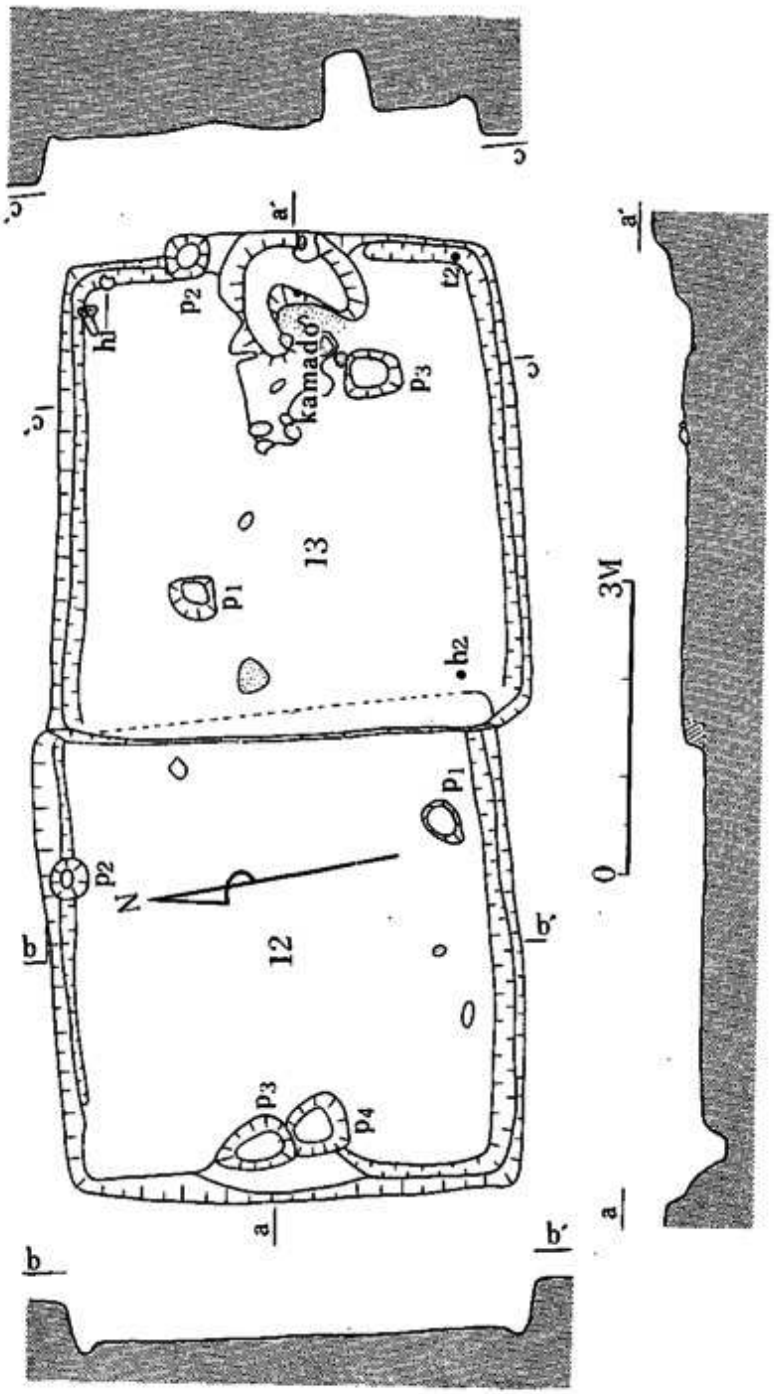


Fig.73 D1213号跡実測図 1/80

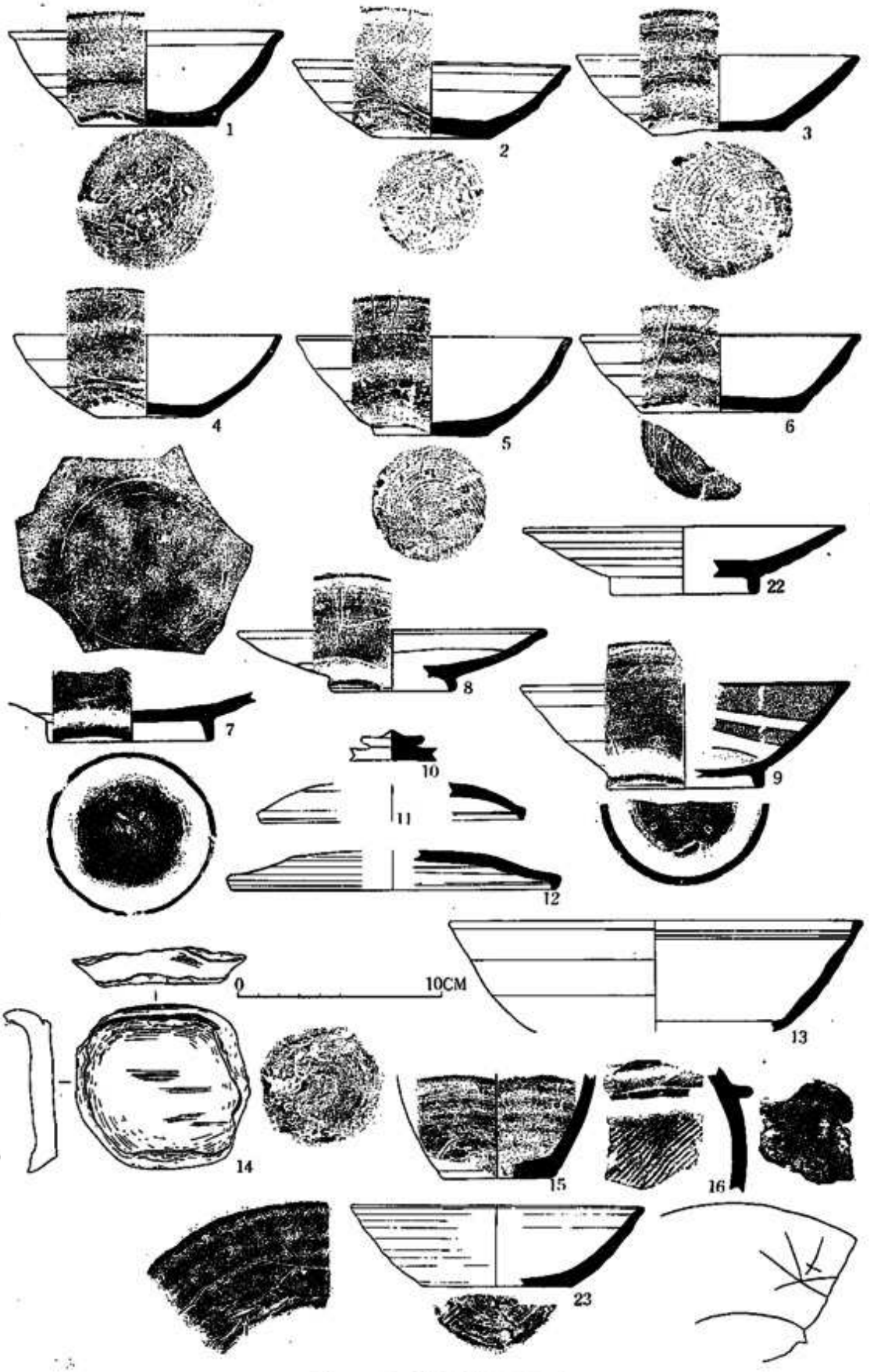


Fig.74　D12号跡土器実測図 1/3

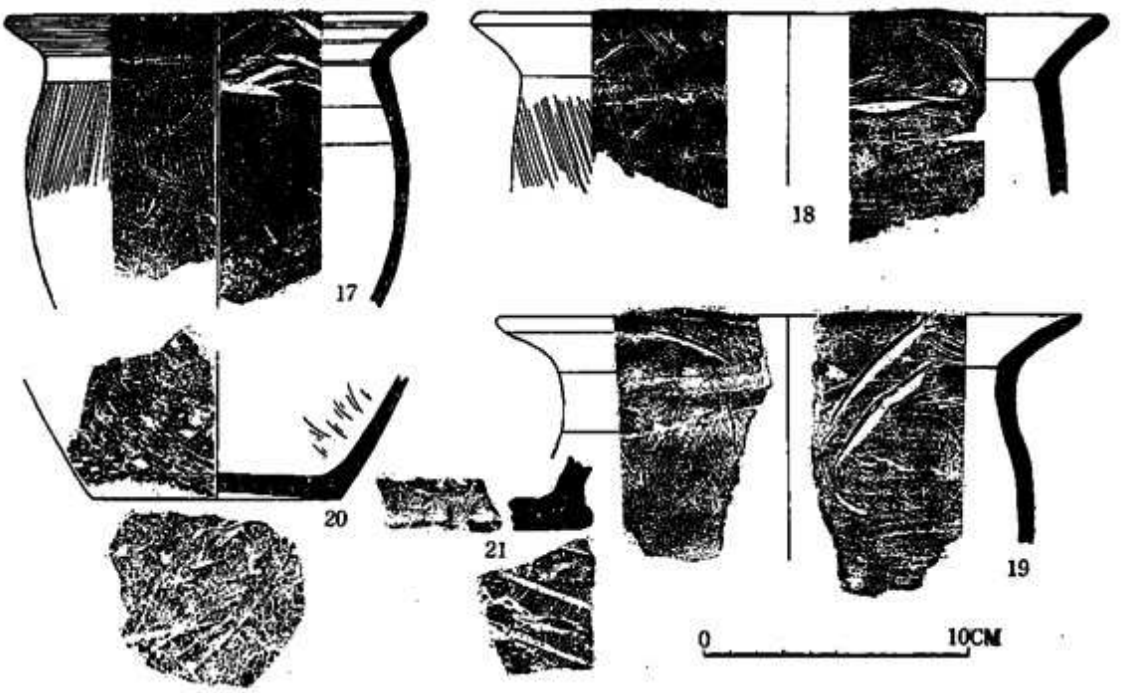


Fig.75　D12号跡土器実測図 1/3

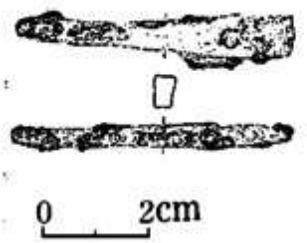


Fig.76　D12号跡鉄製品 2/3

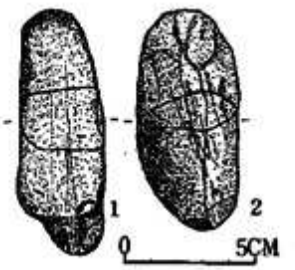


Fig.77　D12号跡 Toilet stone 実測図 1/3

鉄　製　品 (Fig76)

名称	番号	図版番号	出土状況図版番号	備　　考
刀子	t_1			両端欠失，床面直上出土

D12号跡土器一覧表 (Fig74・75, 第16・22・29図版)

器形	種別	番号	図版番号	出土位置	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	手法 体部	手法 底部	手法 口辺	備考
坏	H	1	22—5	床	黒	褐	粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		外面より口辺部にかけ指で整形
坏	H	2	22—6	床	黒	褐	雲母含有	A	ロクロ	糸切		暗文
坏	H	3		床	黒	褐	雲母含有	A	ロクロ	糸切		器底部不正形，暗文
坏	H	4	29—13	床	黒	淡褐	粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		暗文，外口辺部煤附着
坏	H	5	22—4	床	黒	褐	雲母，粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		
坏	H	6		埋	赤褐	赤褐		B	ロクロ	糸切		窯焚れ有
坏	K	7	29—5	埋	灰	灰	釉薬附着	A	ロクロ	糸切		高台付
坏	K	8	29—10	埋	淡灰	淡灰	外面釉薬附着	A	ロクロ			皿形高台付
坏	K	9	29—6	床	淡灰	淡灰	砂粒含有	A	ロクロ	ヘラ起		高台付，内面釉薬が層をなし付着
蓋	S	10		埋	灰褐	灰褐	粗砂粒含有	B	ロクロ			宝珠のみ
蓋	S	11		埋	灰	灰	良質	A	ロクロ			天井部のみ，内面横なで整形
蓋	S	12		埋	灰褐	灰褐		A	ロクロ			天井部のみ
坏	K	13	29—9	埋	淡褐	淡褐		B	ロクロ	欠		釉薬若干附着
耳皿	H	14	16—5	床	淡褐	淡褐	雲母，粗砂粒含有	A	手捏ね	ヘラ起	欠	内面指，篦で整形
壺	H	15		床	褐	褐	雲母，粗砂粒含有	A	輪積	ヘラ起	欠	底面一部剝離，内部篦整形
甕	S	16		埋	灰褐	灰褐	粗砂粒若干含有	A		欠	欠	有紐甍形須恵器
甕	H	17	29—12	埋	褐	褐	雲母，粗砂粒含有	A	ロクロ	欠		体面煤附着，櫛目状痕
甕	H	18	29—8	埋	茶褐	茶褐	雲母，粗砂粒含有	A	ロクロ	欠	横なで	体面細櫛目状痕
甕	H	19		床	褐	褐		A	輪積	欠	横なで	頸部から胴部にかけて細櫛目状痕 内面篦で整形，口辺部煤附着
壺	H	20		床	茶褐	黒褐	雲母，粗砂粒含有	A	輪積	木葉		木葉底の上を篦で削っている
不明	H	21		埋	茶褐	茶褐	雲母含有	A	不明	木葉		内面細櫛目状痕
坏	S	22		床	灰褐	灰褐	良質	A	ロクロ	ヘラ起		高台付，内面自然釉附着
坏	H	23		床	黒	赤褐	雲母，粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		暗文，体部に「本」の篦書き

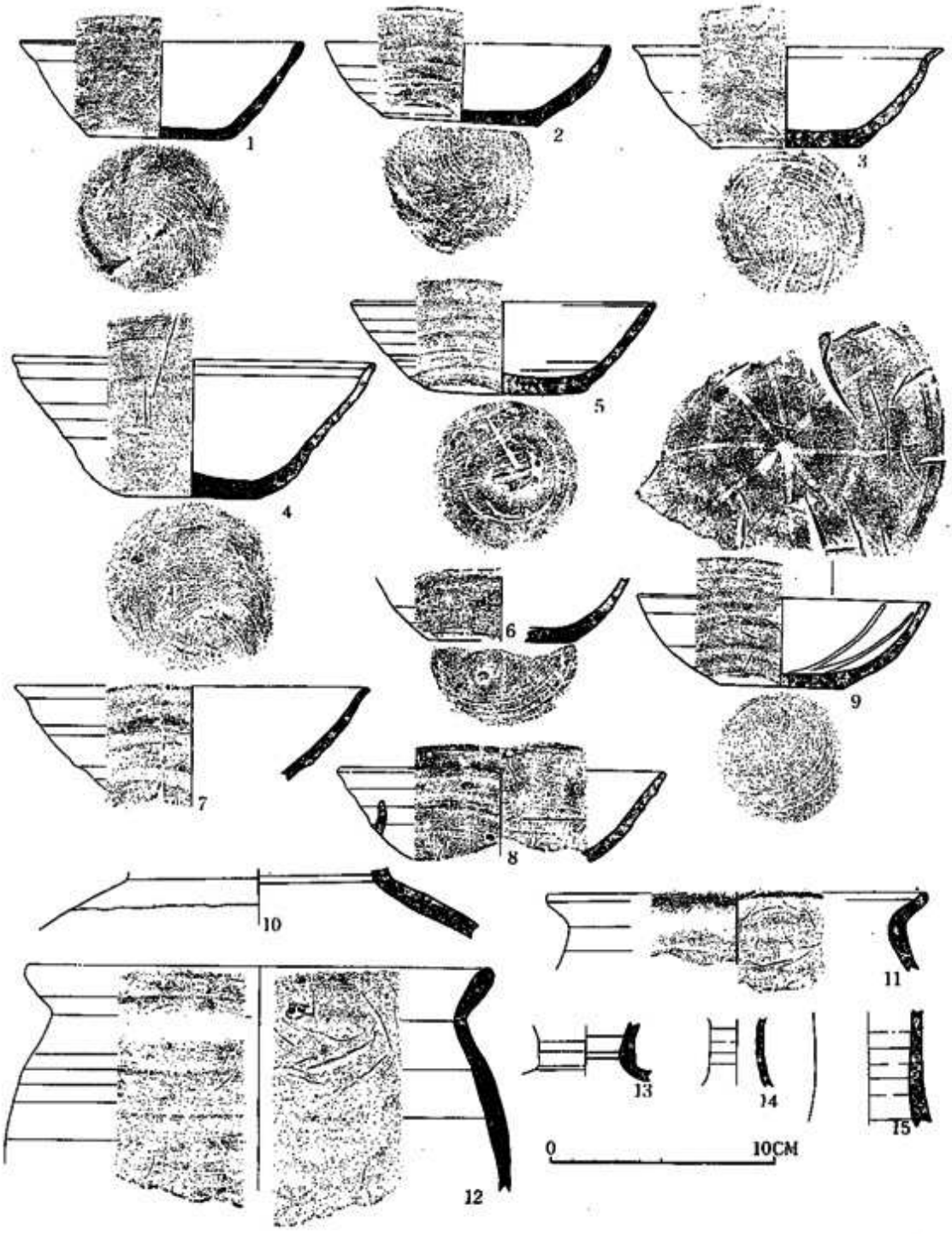


Fig.78　D13号跡土器実測図 1/3

D13号跡土器一覧表 (Fig 78, 第22・30図版)

器形	種別	番号	図版番号	出土位置	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	手法 体部	手法 底部	手法 口辺	備考
坏	H	1	22—7 30—1	床	黒	褐	雲母含有	A	ロクロ	糸切		暗文，外面全体煤附着
坏	H	2		床	黒	淡褐	粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		口辺一部黒色
坏	H	3		床	黒	淡褐	粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		口辺部黒色
坏	H	4		床	黒	淡褐	粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		口辺部黒色
坏	S	5	30—8	床	灰褐	灰褐	粗砂粒含有	A	ロクロ	巻き上げ		底面「粘土紐巻上手法」 ワラ付痕
坏	S	6		埋	暗灰	暗灰	粗砂粒多含有	B	ロクロ	糸切		
坏	H	7		埋	黒	褐	粗砂粒含有	B	ロクロ	欠		
坏	H	8		埋	黒	赤褐		B	ロクロ	欠	横なで	体面摩滅
坏	H	9	30—2	床	黒	褐	雲母，粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		暗文
壺	K	10	30—12	埋	灰	灰	良質	A	輪積	欠		頸部欠損
甕	H	11	30—11	埋	褐	褐	雲母若干含有	B	輪積	欠	横なで	
甕	H	12	30—9	埋	褐	褐	粗砂粒多含有	A	輪積	欠	横なで	体面煤附着
壺	K	13	30—6	埋	白灰	白灰		A	ロクロ	欠		外面緑色釉薬附着
壺	S	14	30—5	埋	茶褐	茶褐	砂粒含有	A	ロクロ	欠		
壺	S	15	30—7	埋	茶褐	茶褐	砂粒含有	A	ロクロ	欠		
壺	S	16	30—4	埋	灰	灰褐	砂粒含有	A	ロクロ			頸部のみ
坏	S	17	30—10	埋	灰褐	灰褐	粗砂粒含有	A	ロクロ	ヘラ切		内面火襷

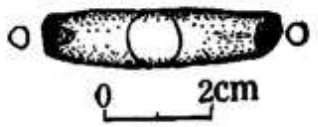


Fig.79 D13号跡土錘実測図 2/3

鉄製品 (Fig 80)

名称	番号	図版番号	出土状況図版番号	備考
刀子	t_1	18—3		刃部先端欠失，茎部に木質錆着
鉄鏃	t_2	19—2	14—4	東壁床上＋20cm埋積土中出土

Fig.80 D13号跡鉄製品実測図 2/3

D14号住居跡（Fig 81・82，第11図版）

平面形	側壁	床面	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡は15号跡南東部大半を切壊して構築したものである。平面は5.8m×5.2mの不正長方形で，各壁は若干中央部が外へ張り出し気味でいわゆる胴張りを思わせる。カマドは西壁中央に設けられていた。	西側壁は15号跡を切って構築されたため，壁の立ちあがりはきわめて低く4～5㎝程の痕跡を認め得た。北，東，南側壁はそれぞれ約22㎝，の立ちあがりであった。	床面は比較的よく保存され，ほぼ平らであったが，全床面は5～10㎝程度の貼床であった。 床面中央に，粘土，炭化物を含んだ焼土が薄く遺存していた。この焼土は位置からして15号跡のカマドの痕跡のように思えるが，貼床の埋土であったから，15号跡とは無関係である。	北，東，南壁下に巾10～25㎝，深さ10～15㎝にわたって周溝が認められた。	P_1～P_4の柱穴が主柱の穴と考えられる。その他のP_5～P_8は補助的な柱穴であろう。	カマドは西側壁，ほぼ中央に設けられ石を芯とし，その上を粘土で構築している。火床の平面は長方形で非常に良く焼け赤色を呈していた。煙道は認められない。	

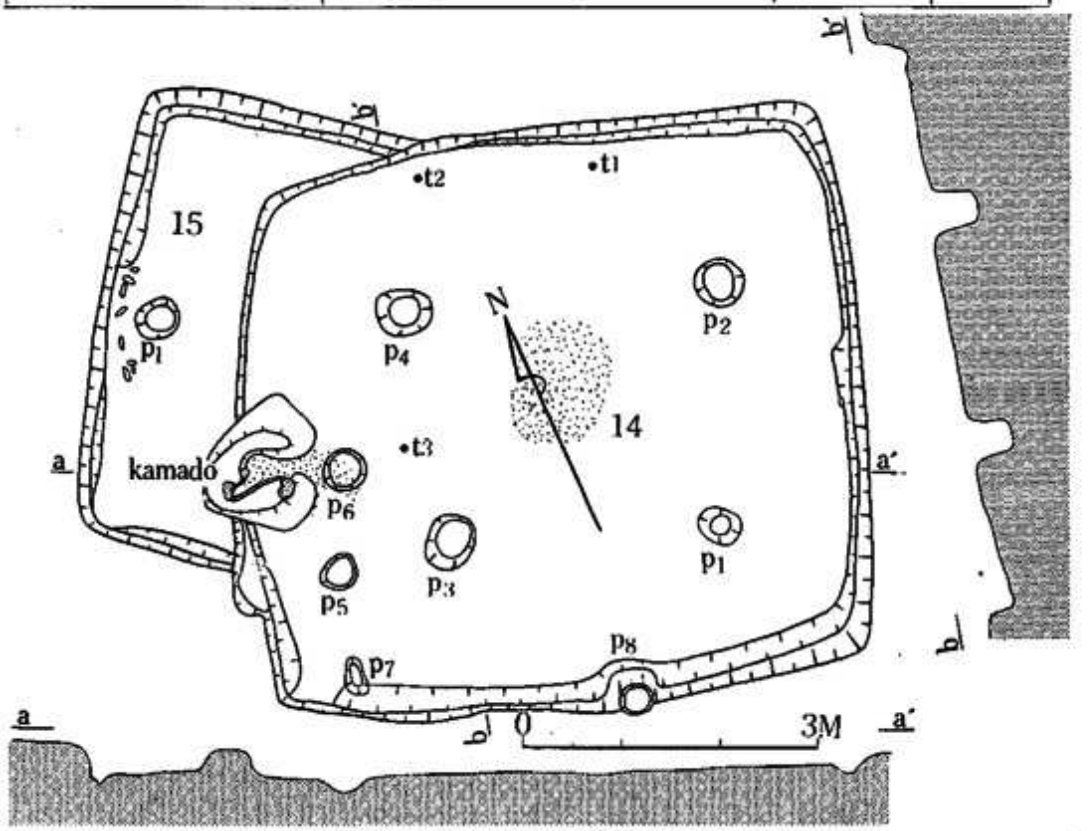


Fig.81　D14・15号跡実測図 1/80

D15号住居跡 (Fig 81, 第11図版)

平面形	側壁	床	周溝	柱穴	カマド	備考
本跡は14号跡の構築によって東半分以上が破壊されたものである。	側壁上部はローム層上面まで除土したため，壁の立ちあがりはきわめて低い。遺存する壁の立ちあがりは北西約28㎝，北東約28㎝，南西約20㎝で直立せず外傾している。	現存部においては，ローム層そのものを床としている。	西壁中央部に認められず，それ以外の現存部壁下には巾約10～15㎝，深さ5～15㎝の周溝が認められた。 周溝の認められなかった西壁中央部と，P_1との間にトイレットストーンが遺存していた。	柱穴らしき穴は一個しか認められなかった。もっとも，14号跡のP_5などは本跡所属のものであったかも知れない。	実測図によれば，14号跡が本跡のカマドの痕跡である様に誤解され易いが，この焼土は14号跡に属するもので，本跡のカマドのカマド設備されたものかどうかは不明である。	

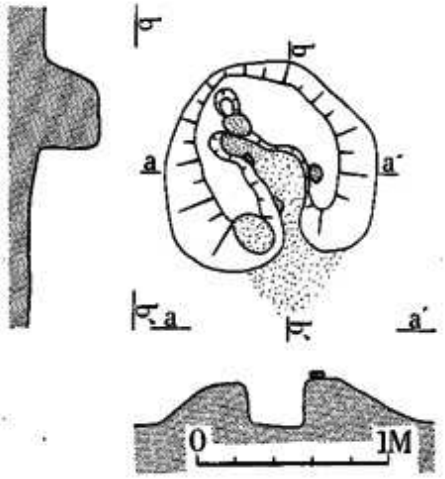


Fig.82 D14号跡カマド実測図 1/40

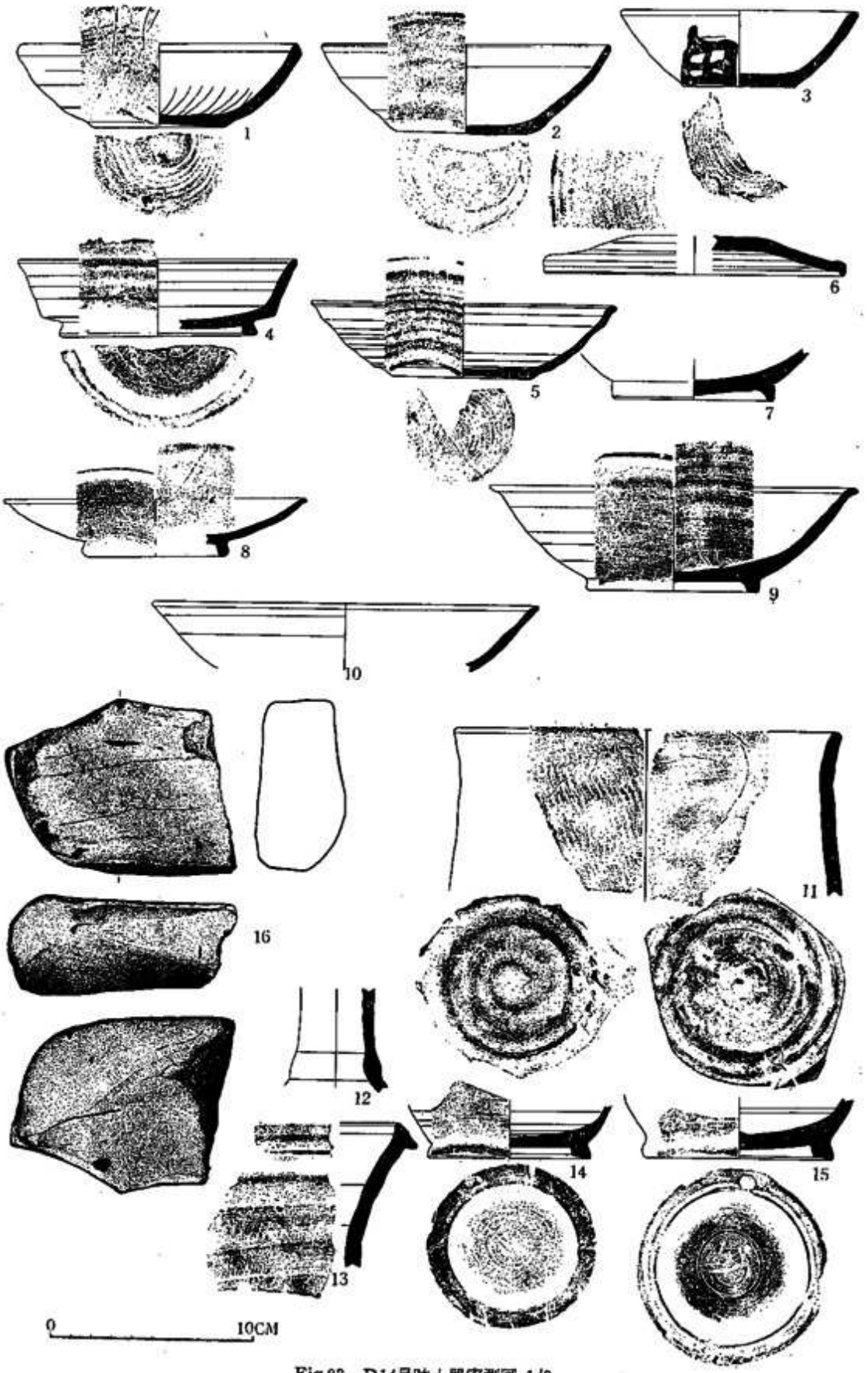


Fig.83　D14号跡土器実測図 1/3

D14号跡土器一覧表 (Fig 83, 第17・30・31図版)

器形	種別	番号	図版番号	出土位置	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	手法 体部	手法 底部	手法 口辺	備考
坏	H	1		床	黒	褐	雲母，粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		外面一部煤附着
坏	H	2		床	黒	褐	粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		外面一部黒色
坏	H	3		埋	黒	褐	粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		墨書あり
坏	S	4		床	灰	灰	粗砂粒含有	A	ロクロ	ヘラ起		高台付（はりつけ）
坏	S	5		床	灰褐	灰褐	砂粒含有	A	ロクロ	糸切		
蓋	S	6	31—3	埋	茶褐	茶褐	砂粒含有	A	ロクロ			宝珠のみ
坏	K	7		埋	灰	灰		A	ロクロ	ヘラ起		高台付（はりつけ）
坏	K	8		埋	淡灰	淡灰	砂粒含有	A	ロクロ	不明		皿型高台付，外面に施釉
坏	K	9	31—1	床	淡灰	淡灰		A	ロクロ	ヘラ起		高台付（はりつけ）
坏	K	10		埋	淡灰	淡灰		A	ロクロ	欠		内外面共に施釉
甕	H	11	31—4	埋	茶褐	赤褐	雲母含有	A	輪積		横なで	体面一部煤附着。外面に細櫛目状痕
壺	S	12	31—2	埋	灰褐	灰褐	粗砂粒含有	A	ロクロ			
甕	S	13	30—14	埋	黒褐	黒褐	粗砂粒含有	A	輪積		横なで	
坏	S	14	30—16	床	淡灰	淡灰	粗砂粒含有	A	ロクロ	ヘラ起		高台付（はりつけ），内面に施釉
坏	K	15	30—15	床	灰褐	灰褐	粗砂粒含有	A	ロクロ	ヘラ起		体面釉薬附着，底面櫛目状痕
砥石		16	17—6	床								砂質で硬い
甕	K	17	30—13	埋	灰	灰		A	ロクロ	欠	横なで	体面釉薬附着

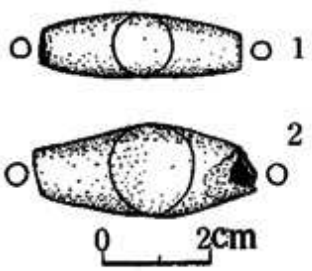


Fig.84 D14号跡土器実測図 2/3

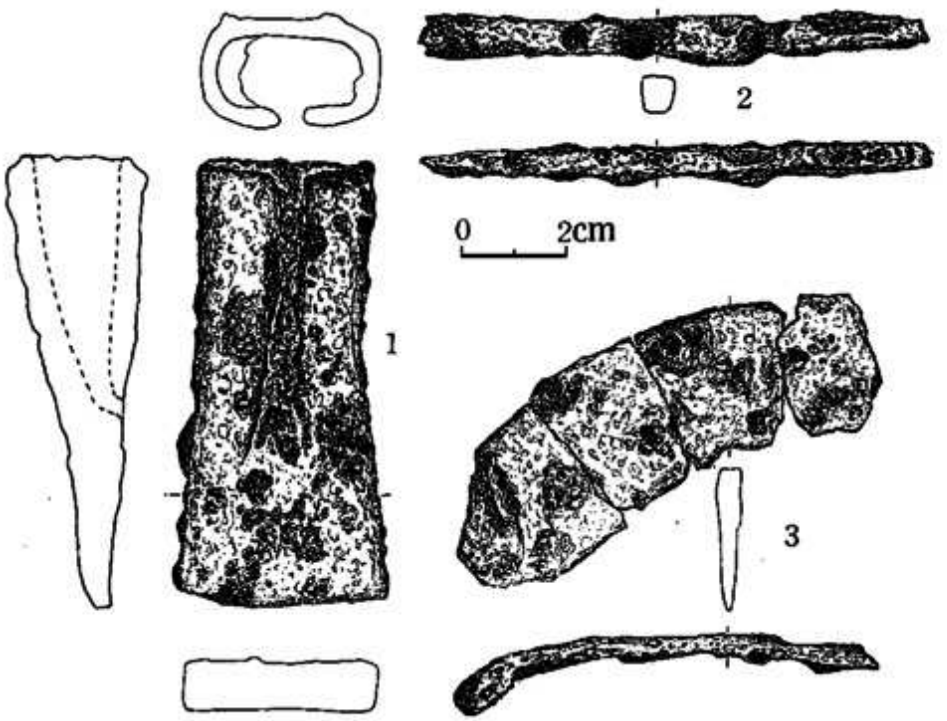


Fig.85 D14号跡鉄製品実測図 2/3

鉄製品 (Fig85)

名称	番号	図版番号	出土状況図版番号	備考
鉄斧	t_1	19—7		床面直上出土，周溝附近
釘	t_2			両端欠失
鎌	t_3			中央部より先端部は欠失，床面直上出土

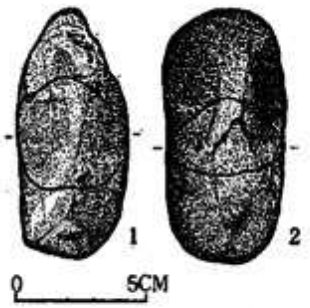


Fig.86 D14号跡 Toilet stone 実測図 1/3

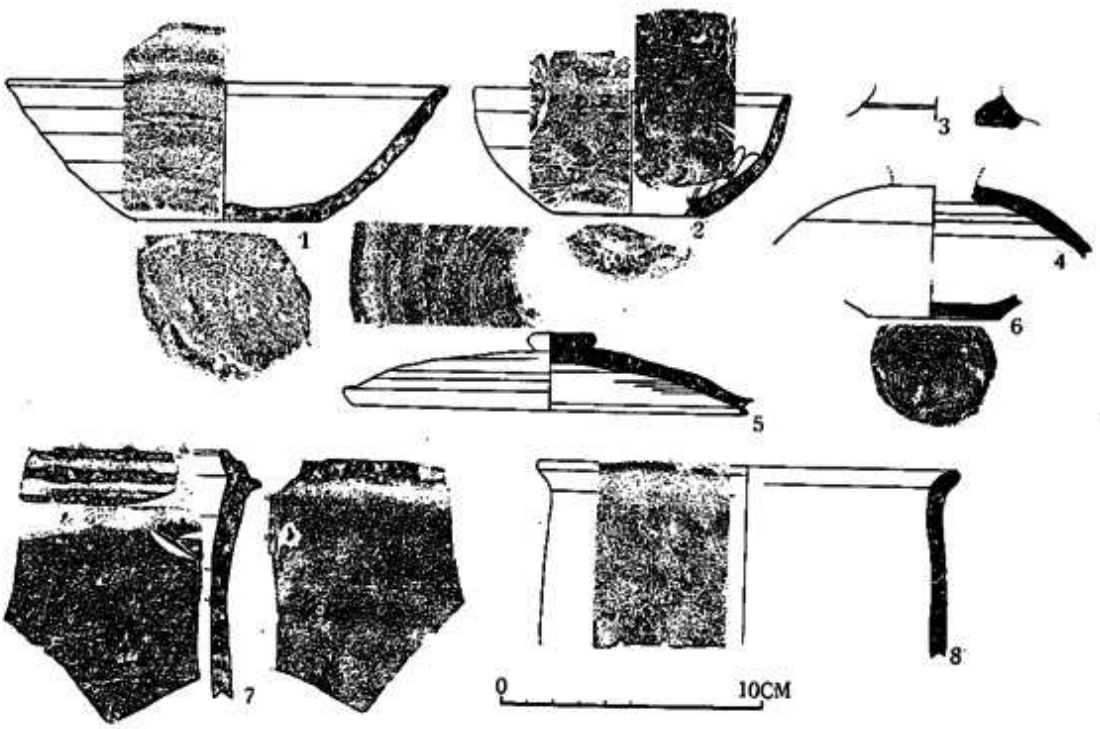


Fig.87　D15号跡土器実測図 1/3

D15号跡土器一覧表 (Fig 87, 第22・31図版)

器形	種別	番号	図版番号	出土位置	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	手法 体部	手法 底部	手法 口辺	備考
坏	H	1		床	黒	淡褐	粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		外面一部黒色
坏	H	2		埋	黒	淡褐	雲母，粗砂粒含有	A	ロクロ			暗文
不明	K	3		埋	灰	灰褐	良質	A	不明	不明		
甕	K	4	31—7 22—8	埋	茶褐	灰褐	良質	A	ロクロ	欠		若干釉薬附着
蓋	S	5	31—8	床	褐	青灰	粗砂粒含有	A	ロクロ		粗製	
坏	S	6		埋	暗灰	暗灰	粗砂粒含有	A	ロクロ	糸切		
甕	S	7	31—5	埋	暗灰	暗褐	粗砂粒含有	A	輪積			体面釉薬附着
甕	H	8	31—10	埋	淡褐	淡褐	雲母，粗砂粒含有	B	輪積		横なで	内面細櫛目状痕
甕	K	9	31—6		灰	灰褐		A				外面に釉薬剝離
甕	H	8	31—9	埋	褐	褐	雲母，粗砂粒含有	A	輪積	欠	横なで	内面細櫛目状痕

土　錘　(Fig 88) 1，2

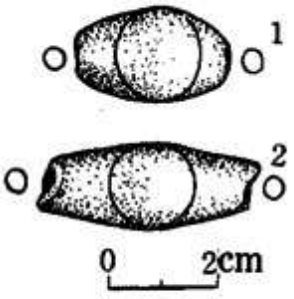


Fig.88　D15号跡土錘実測図 2/3

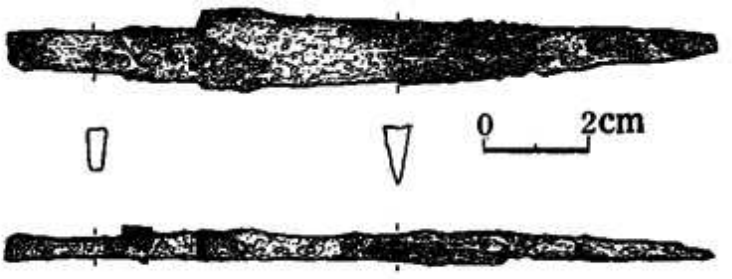


Fig.89　D15号跡鉄製品実測図 2/3

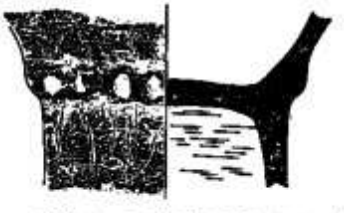
青銅，鉄製品　(Fig 89)

名称	番号	図版番号	出土状況図版番号	備　考
刀子	1	18—4		刃部先端欠失，床面直上出土

D地区掘立柱建物遺構 (Fig90～96，第9図版)

本地区もB地区同様掘立柱の建物遺構が多数発見された。調査の便宜上ローム上面までの黒色土を取り除いたので，C地区同様柱穴の深さは当初のものより浅いものであることは述べるまでもない。また遺存していた柱穴によって6棟分の遺構を想定したのであるが，他の柱穴も発掘地域を拡張することによって，それぞれ建物の遺構としてまとまるものと考えられる。本地区の掘立遺構も，C地区同様，D11号跡床面に柱穴が遺存していることから，竪穴式住居よりも後築になるものと考えられる。掘立遺構の大きさについては以下計測値を表示する。

NO	桁　行		梁　間	
10	3間	約22.5尺	2　間	約14.6尺
11	3間	約19.5尺	2　間	約15.0尺
12	3間	約19.5尺	2　間	約13.0尺
13	2間	約14.6尺	2　間	約11.5尺
14	2間	約13.0尺	2　間	約12.0尺



Fgi.90　D地区土器実測図 1/3

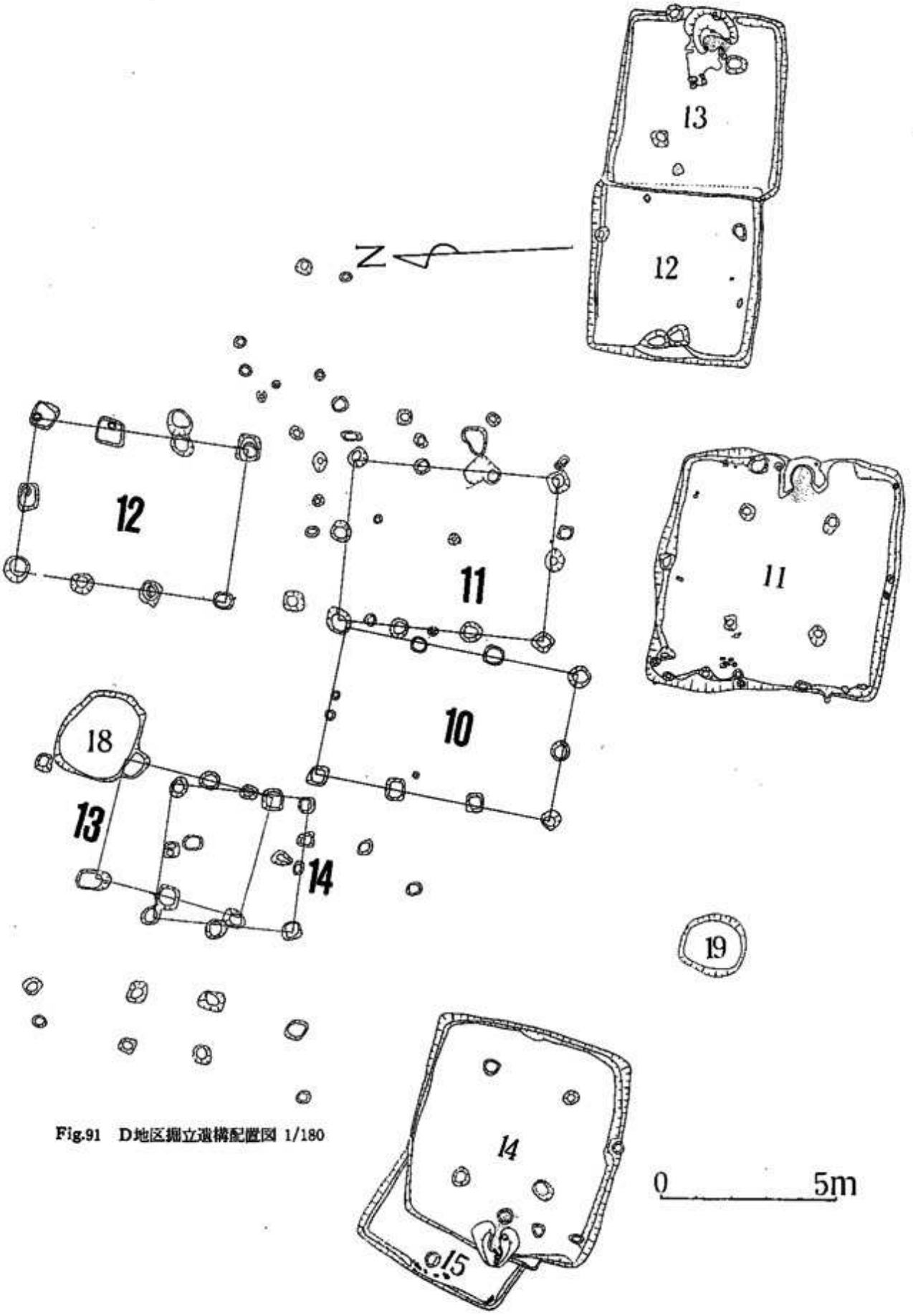


Fig.91 D地区掘立遺構配置図 1/180

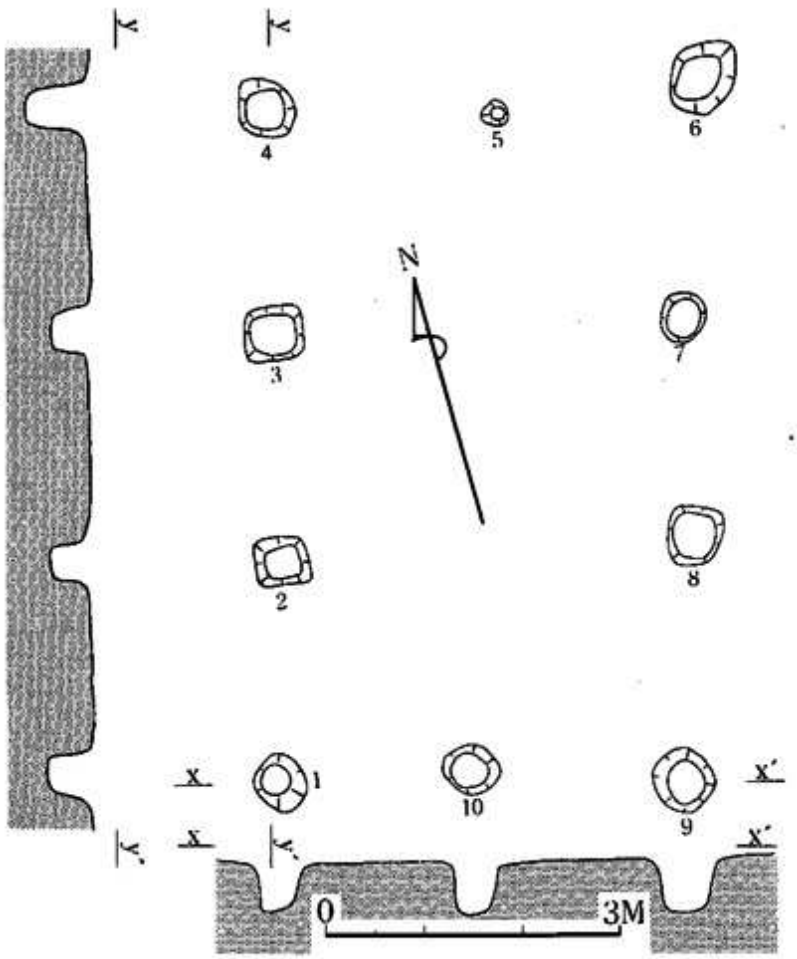


Fig.92　D 1 号掘立遺構実測図 1/80

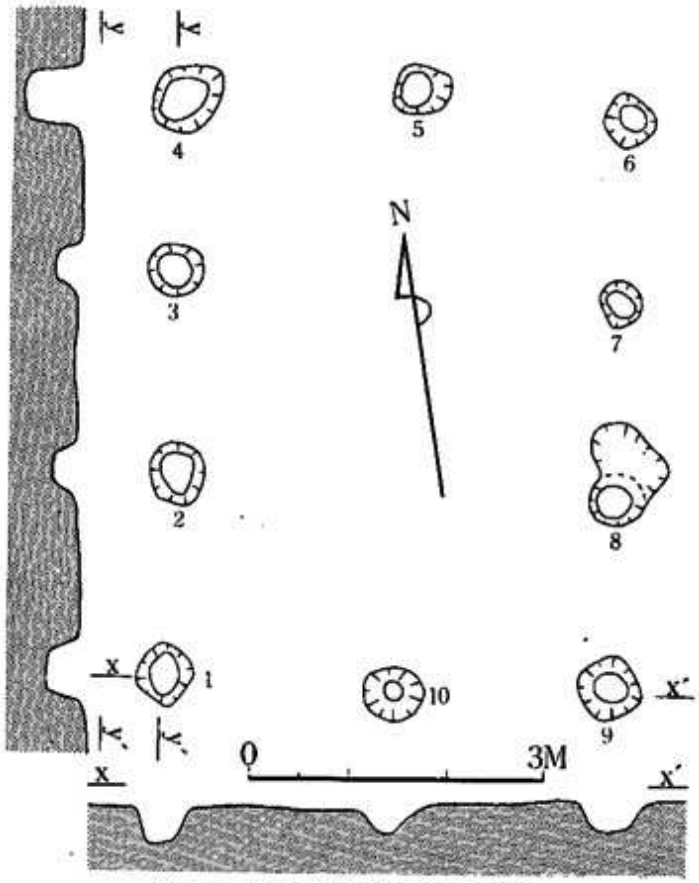


Fig.93　D 2 号掘立遺構実測図 1/80

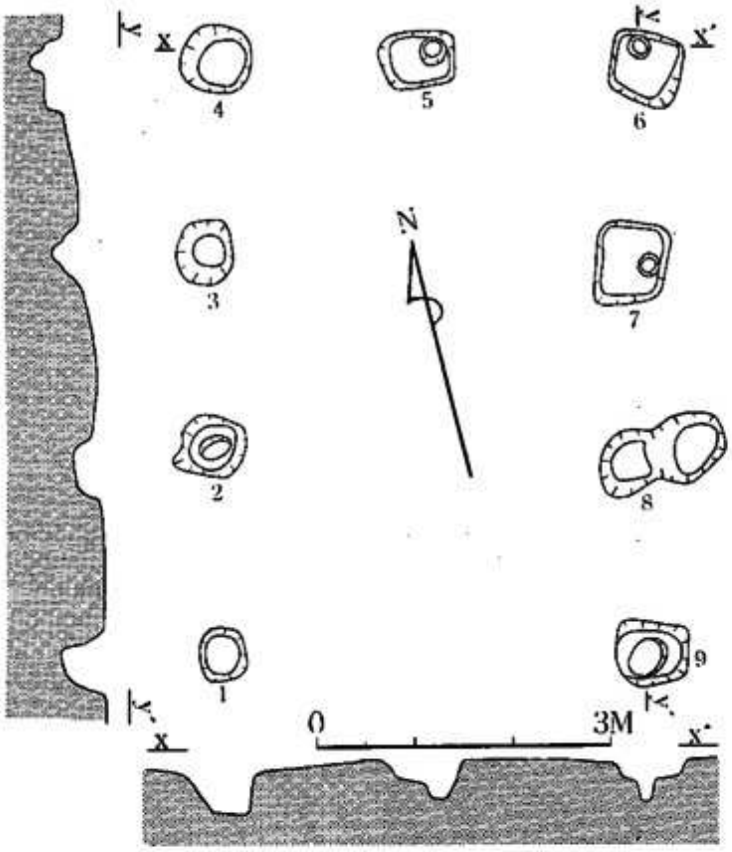


Fig.94　D 3 号掘立遺構実測図 1/80

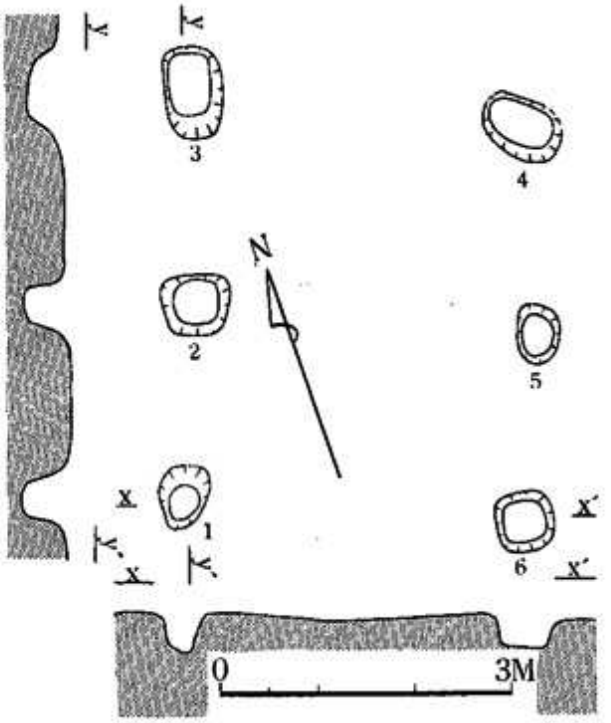
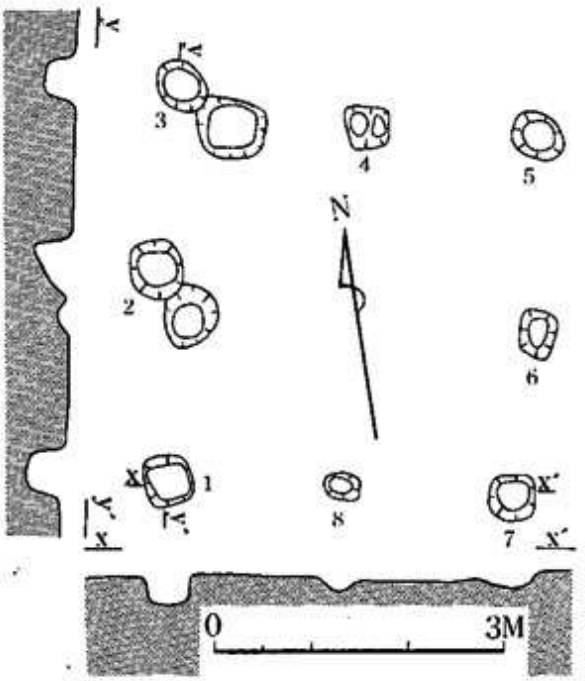


Fig95　D 4 号掘立遺構実測図 1/80



Fg.96　D 5 号掘立遺構実測図 1/80

住居跡柱穴深度一覧表 (cm)

地区	号跡	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9	P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}	P_{14}	P_{15}	備考
A	1	18	24	24	34	20	18	16	8	42	32						
	2																貼床
	3																貼床
	4	15															
	5	76	53	78	52	81	62	58	45	59	40	35					
	6	10	11	5	11	11	13	15	4	18	21						
B	16	41.2	49.4	56	50.04												
	17																
C	7	45	40	35	50	50	30	20	20	10	5						
	8	40	50	21	40	16	41	24	22	22							
	9	50	53	40	30	40	10	20	18	76	36	20	34	24			
	10	12	13	16	14	15	10										
D	11	47	66	55	40	20	55	70	18	17	18	20	23	25	20	10	貼床
	12	20	30	14	20												
	13	50	50	60													
	14	36	25	45	35	25	15	8	20								貼床
	15	25															

掘立遺構柱穴深度一覧表 (cm)

NO / 地区		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
B	1	81	44	41	19	11	46	17	18	94	34	23
	2	41	42	50	56	49	50	34	53	60	46	
	3	11	17	87	42	29	51					
	4	36	18	35	31	38	19					
	5	29	18	30	32							
	6	35	16	34	35	25	31					
	7	72	68	66								
	9	44	39	46	37							
D	10	51	45	42	70	25	60	50	50	56	54	
	11	41	30	15	60	15	25	40	40	45	35	
	12	30	40	45	40	40	50	47	15	30		
	13	40	38	42	36	33	35					
	14	22	40	38	30	32	25	20	18			

む　す　び

以上，発掘調査した4地区の遺構について略述したのであるが，遺物について若干のまとめを述べる。

竪穴住居跡から出土した坏型土師器の大多数は内面黒色を呈するいわゆる黒色土器であった。[1] そのほか須恵器が若干伴ない，合せて灰釉陶器の存在，鉄製品などは本遺跡の時代的特色を物語るものであろう。

土器に墨書の多く記るされたもの，また，さらには高貴なガラス玉，腰帯金具類の出土はこの集落内に「衣冠束帯」に身をかざるという識者の居住したことを証するものであろう。本報告において Toilet stone と名称するものは，たとえばC10号跡柱穴（P_2）そばに山積していたものを見ると大型のものと小型のものとがそれぞれかためられておかれているごとき，きわめて当初の状態を遺すものであろう。この遺物は名称するごとく用便の具としてもちいたものではなかろうかと推考するのである。もっとも便所を特定の場所に認定することは現段階において困難であるが，住居の近くにおいて便じたと考えるのはきわめて一般的ではなかろうか。集落跡の一部に溝（V字状溝などとも呼ばれる）が見られるけれどもこれらの溝が集落と同時併存していたものならば，これらの溝もまことに格好な便所としてもちいられたものではなかろうか。

灰釉陶器についてはこの地方（上伊那郡）ですでに出土地80ヵ所を数える多きに達っしている。かつて大場磐雄博士は「平出」の報告書において灰釉陶器（同書272頁）について高説を述べられ，当時長野県下において138ヵ所をあげておられたが，その後10数年の歳月は上伊那郡において大場博士は57ヵ所をあげておられるのに，すでに80ヵ所以上の多くを知りうる結果となった。この灰釉陶器は信濃，美濃を中心として発見されるもので，その製作窯は二，三知られてはいるがいずれも信濃国外であって，かくも多量に信濃国内へ供給されたことは，この時代の交通路はもちろんのこと受給者側としての信濃居住民の経済力，尚また，生活程度のいかに高度であったか推考する資料として重要であろう。もっとも灰釉陶器の製作窯が信濃国外にのみ築用されたと断ずるのではなく，おそらくはこの伊那谷のどこかに築窯され，活発な生産がなされ，居住民の生活向上に資したという考えの成立することをひそかに希うものである。

須恵器のうちC７号，D12号出土の有紐土器は紐の瘤状に表現された部分によってみると松本市の市外，大村廃寺跡ならびに松本市北西の田溝古窯から類品が出土している。これだけの資料をもって即断することはつつしまねばならないが，須恵器の一部は松本市北西の古窯から

註１　稲垣晋也「瓦器椀の成立と展開」『日本歴史考古学論叢』第２巻所収

の供給によったものであろう。

土師器の中に雲母を含むものは粘土に雲母の含有したもので製作したのである。雲母を含有する粘土は本遺跡西端の段丘崖に設けられた道路の切り通し面に露呈している粘土がそれであろう。したがって雲母含有の土師器はこの集落居住人によって製作されたものとも考えられよう。

各住居跡からは比較的多くの鉄製品の発見があった。これらの鉄製品の製作はこの集落内で製作したものかどうかを明瞭にすることはできないが，B16号跡南方ローム上面より出土の鞴口(第16図1)の出土があり，さらに各住居跡内埋積土中(B16，C7，D11号)又は床面上(C7，D11号)から鉄滓の出土があったことなどは製鉄，鍛冶の存在を認めることができるが，はたしてこの竪穴住居集落におけるものか，掘立遺構の時期に属するものかは不明である。

つぎに遺構についてみると遺物の面からほぼ同一時期として把握し得るが，住居跡の重複はそこに時間的な厚みを考えねばならない。

A2号跡は当初，面積の小さな住居で西壁中央にカマドを施設してあったが，拡張がなされカマドは当初のままであったため西壁南よりに遺存していた。この住居の拡張は居住人口の増加に伴った結果と考えてよろしかろう。

竪穴式住居の調査でしばしば考えさせられることは出入口の位置を認定し得る遺構に遭遇しないことである。これはわれわれの調査の方法に欠けるところがあるが故のものとも思えるが，調査に際しては，ことのほか，これについて意を注いでいるのであるが一向にそれを明らかにし得ない。そこで考えられることはハシゴを使って上(屋根の一部)から出入りすることであろう。あの比較的高さのある側壁を一跨にすることは骨がおれるし，かりにそこを使って出入をしたとすれば，その部分の側壁は自然にくずれて壊れることは述べるまでもない。しかし遺構について見ればそのような痕跡を認めることはできない。かりに屋根からのハシゴを利用しての出入でなかったとし，側壁にハシゴをかけたとすることも考え方としては成り立つであろう。いずれにしても，今後にのこされた重要な課題の一つである。

この遺跡においてはローム層そのものを床とした住居跡と貼床の住居跡があった。貼床の住居においては柱穴を認定することが調査の時間的制約から充分になしえなかったことはまことに残念である。また，ローム層そのものを床としているものについても屋内に柱穴を確認することのできなかったものもあった。この種の住居の上屋構造をどの様なものにすべきかについてはきわめて困難である。掘立遺構として多数を検出したがB地区において，柱の根固めに住居跡併存期の土器類を使用していたことや，B16，D11号住居跡の床面にこの種の柱穴が穿たれていたことは，竪穴式住居が廃屋となり竪穴内に周辺の土砂が埋積した後の工作であることはまちがいない。したがって掘立遺構を竪穴住居集落に伴なう高床式の建物と考えることは困

難ではなかろうか。

D地区に見るような3間×2間の建物が相接して建てられた(1号，2号)ことは1号，2号，3号の3棟が同時期の建造ではなく時を異にして建てられたものであり，そこには時間的厚みを考えなければならない。このような遺構や遺物から総合して考えるにこの集落は竪穴式住居で生活を営んだ時期とその後に掘立柱の建物による生活の展開された集落の二時期を想定し得る。しかも後者の次の時期は段丘崖下に集落を営んだ鎌倉時代であろうから，これを遡ぼれば10世紀中頃からの集落跡として考えられる。いずれにせよこれらの集落は和名抄による諏訪郡手良郷の一部とするも間違いではなかろう。

図　　版

（上）　A６、１号跡

手前は６号、向うは１号跡

西より

（下）　A１号跡　　西より

第1図版　（上）A6・1号跡　（下）A1号跡

（上）　A２号跡全景、右に３号跡の
一部がみえる
東より

（下）　A１号跡
西より

第2図版　（上）A2号跡全景　（下）A3号跡

（上）　A５号跡全景

北西より

（下）　A地区全景

左より１、６、２、３号跡

右手前はＣ７号跡

東より

第3図版　（上）A5号跡全景　（下）A地区全景

（上）　B地区全景

北より

（下）　B４掘立遺構全景

北東より

第4図版　（上）B地区全景　（下）B4掘立遺構全景

（上）　B16号跡全景

B３掘立遺構が住居跡床面にあり、住居跡右側にはB１掘立遺構がみられる。

平板（人物２人）の向うにB17号跡がみえる。

東より

（下）　B17号跡カマド附近

北西より

第5図版　（上）B16号跡全景　（下）B17号跡カマド附近

（上）　C８、９、10号跡全景

９号跡には焼材がみえる

南東より

（下）　C８、９、10号跡全景

９号跡の焼材を取り除いた。

10号跡の周溝の一部明瞭にみえる。

南東より

第6図版 （上）C8・9・10号跡全景 （下）C8・9・10号跡全景

（上）　C９号跡南東隅焼材の遺存状態

南東より

（下）　C10号跡カマド

９号跡の煙滅後につくられた10号跡は、９号の焼土や炭化物を削り取って構築したが、カマドの芯には自然石を使用し、しかも炭化物（含焼土）の上に置いてあった。

西より

第7図版　（上）C9号跡南東隅焼材の遺存状態　（下）C10号跡カマド

（上）　C地区全景

手前は7号、向うに8、9、10号跡がみえる。

南より

（下）　C7号跡全景

東より

第8図版　（上）C地区全景　（下）C7号跡全景

（上）　D地区全景（除12、13号跡）

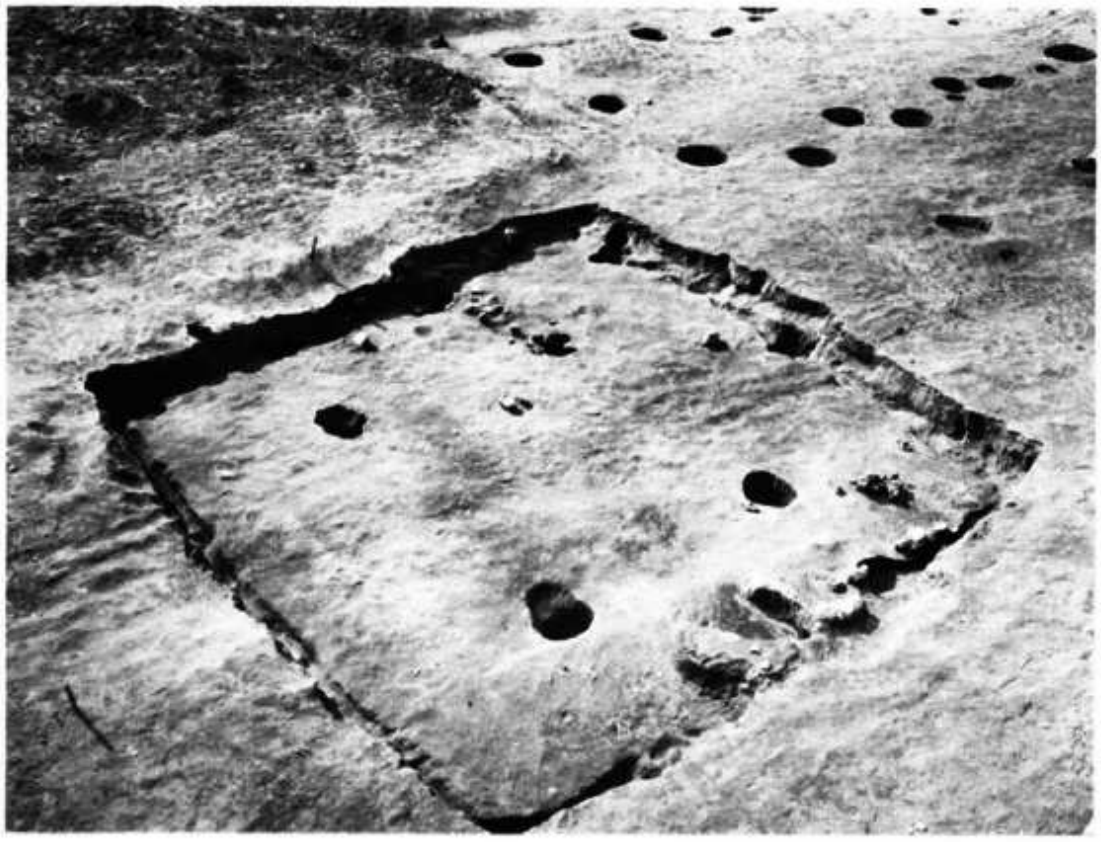
東より

（下）　D11号全景

住居跡左上方にD１掘立遺構がみえる。

東より

第9図版　（上）D地区全景　（下）D11号全景



（上）　D11号跡カマド附近

北西より

（下）　D12、13号跡全景

手前は13、その向うは13号跡

西より

第10図版　（上）D11号跡カマド附近　（下）D12・13号跡全景

（上）　D14、15号跡全景

左14号跡、右15号跡

14号跡左向うに19号跡がみえる。

北より

（下）　D18号全景

南より

第11図版　（上）D14・15号跡全景　（下）D18号跡全景

(1)

B16号跡カマド

(2)

B16号跡カマドの芯

(3)

B16号跡カマド右裾先端に遺存していたカメ。

(4)

A 2 号跡カマド

(5)

C 7 号跡カマド

(6)

D11号跡カマド

(7)

C 9 号跡柱穴(P)に遺存していた小さな焼材(柱材と思われる。)

(8)

C9 号跡遺存の焼材

第12図版

(1) B 16号跡カマド　(2) B 16号跡カマドの芯　(3) B 16号跡カマド石　(4) A 2号跡カマド　(5) C 7号跡カマド
(6) D 11号跡カマド　(7) C 9号跡柱穴(P)　(8) C 9号跡遺存の焼材

（上）　C 9 号跡の *toilet stone* の出土状態

（中）　C 9 号跡の *toilet stone* の出土状態

（下）　C 7 号跡東壁寄り北西の *toilet stone* の出土状態

第13図版　（上）（中）C9号跡のtoilet stoneの出土状態　（下）C7号跡東壁寄り北西のtoilet stoneの出土状態

（左上）

C 7号跡東壁中央部より発見された長方形砂岩(砥石？)

（右上）

A 5号跡カマド附近出土の鍔付カメ型土師器片

（左中）

ピンセット型鉄製品の出土状態

（B16）

（右中）

鉄鏃の出土状態（D13）

（下）

B－16号跡南東部の周溝に接した貼床中より出土の高台付須恵器（南寄り）。

第14図版

（左上）C7号跡東壁中央部より発見された長方形砂岩（砥石）（右上）A5号跡カマド附近出土の鍔付カメ型土師器片
（左中）ピンセット型鉄製品の出土状態（B16）（右中）鉄鏃の出土状態（D13）
（下）B16号跡南東部の周溝に接した貼床中より出土の高台付須恵器（南寄り）

（左上）　　（右上）

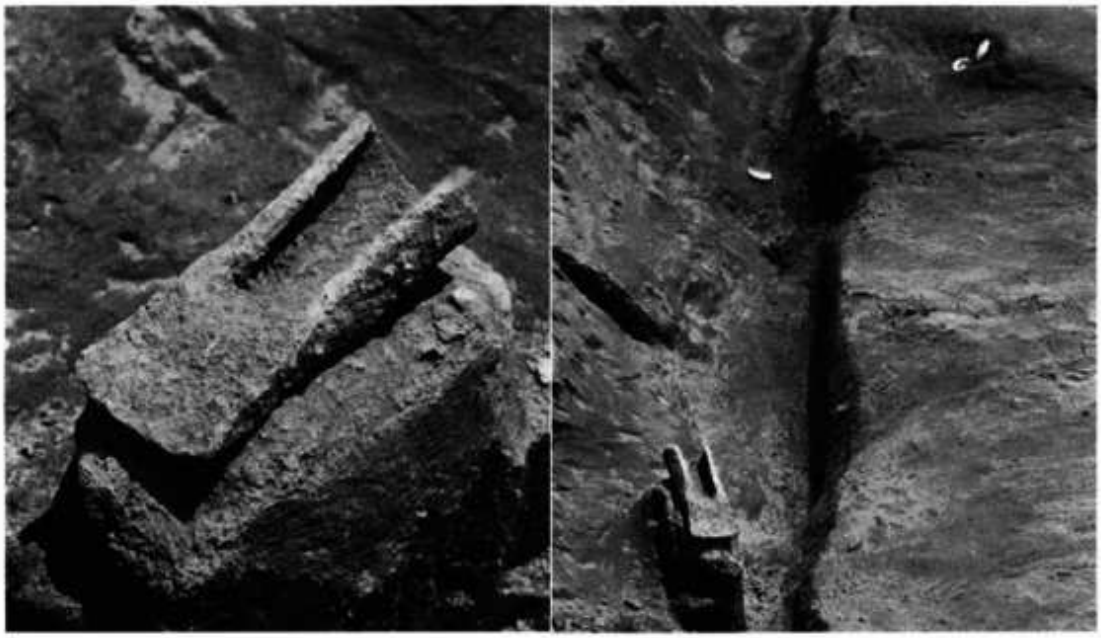
右写真の鉄斧（Ｃ７）　Ｃ７号跡北側周溝からの
鉄斧その他の出土状態

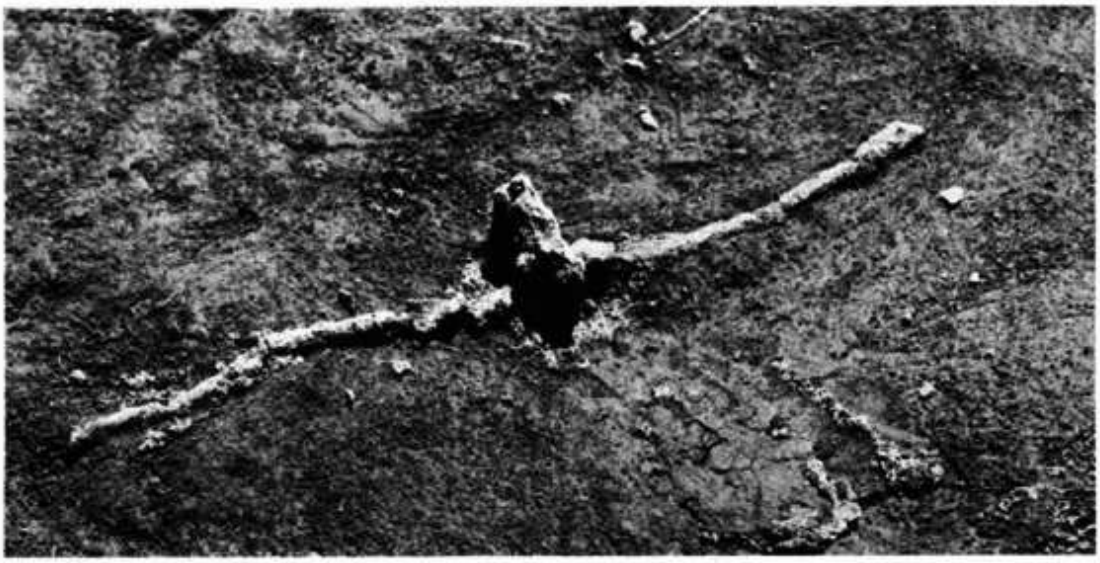
（中）
右上写真の鉸具、銙、土錘の出土状態（Ｃ７）

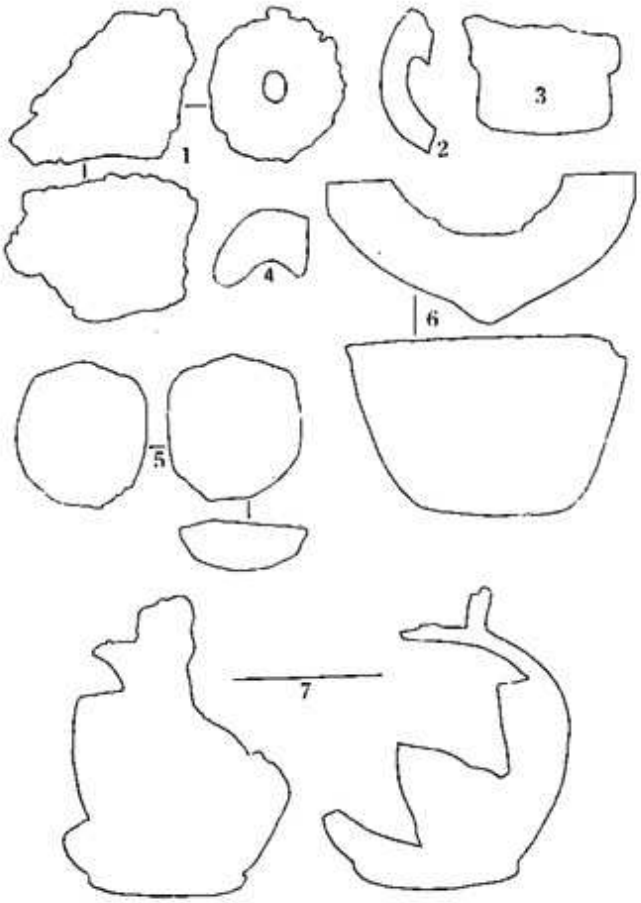
（下）
鉄製紡錘車の出土状態（Ａ５号跡）

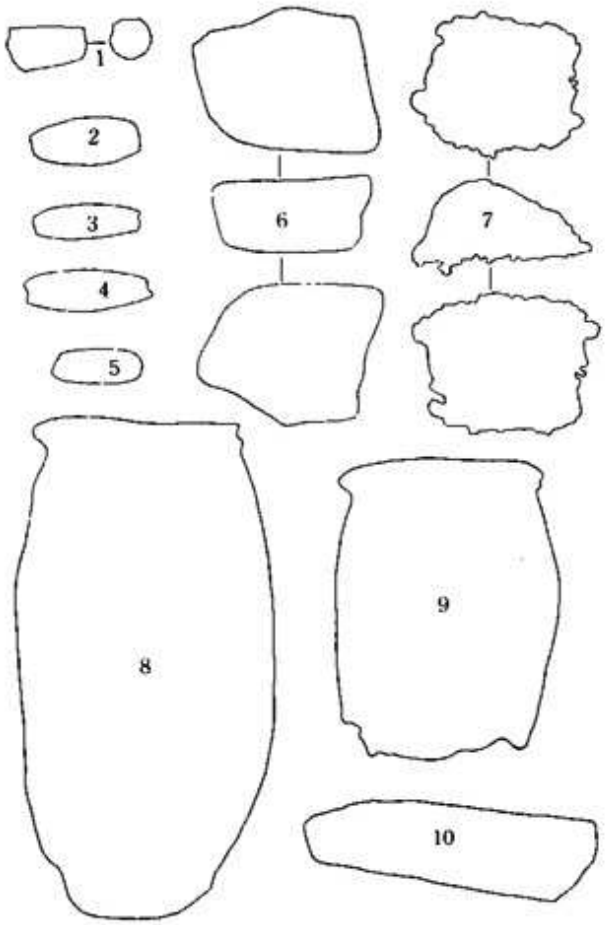
第15図版

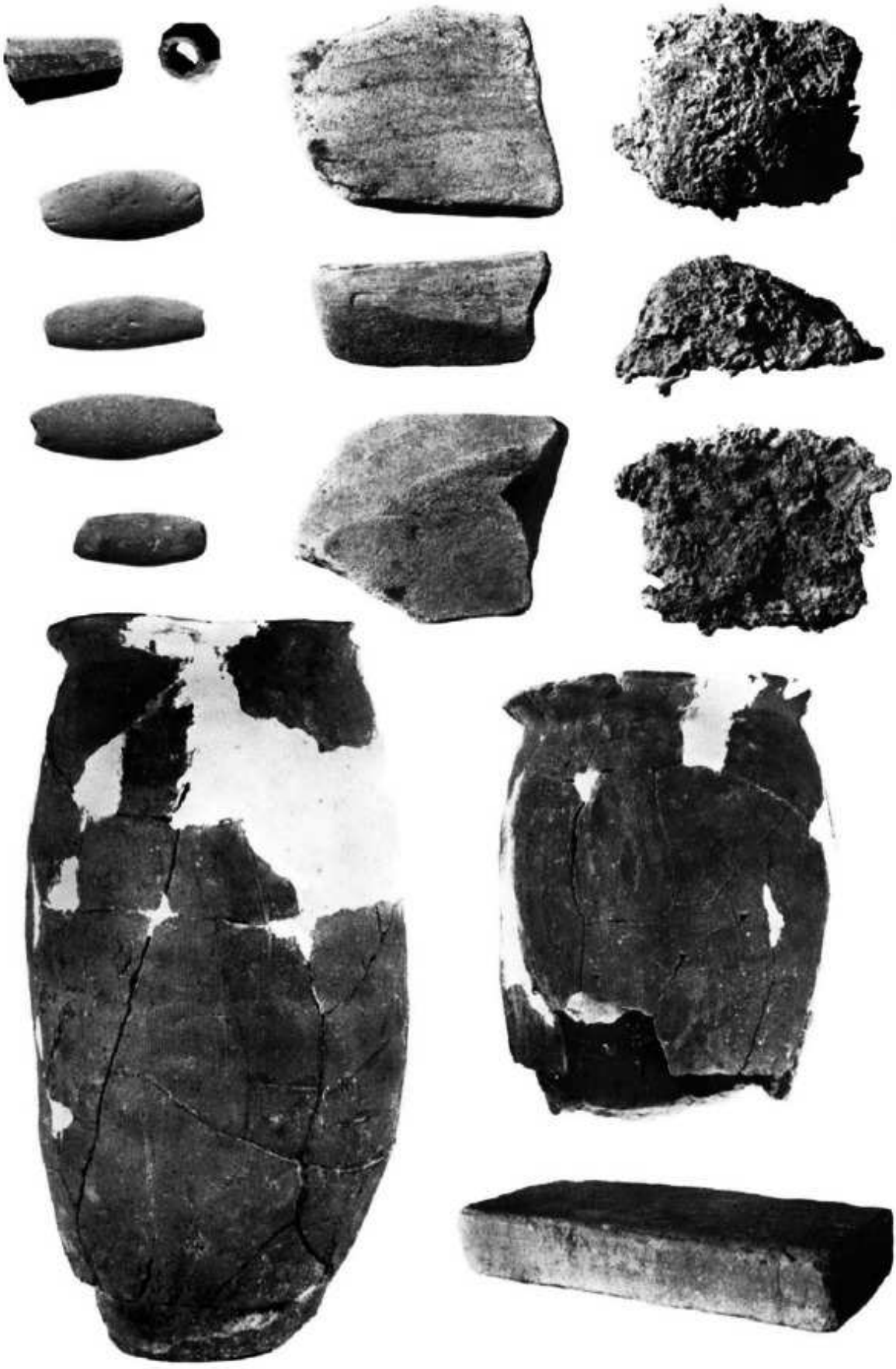
（左上）右上写真の鉄斧（C7）（右上）C7号跡北側周溝からの鉄斧その他の出土状態
（中）右上写真の紡具、銙、土錘の出土状態（C7）（下）鉄製紡錘車の出土状態（A5号跡）

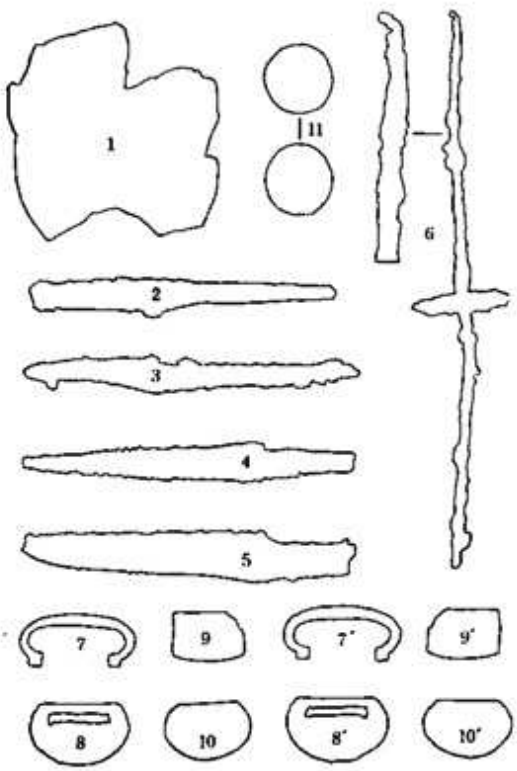


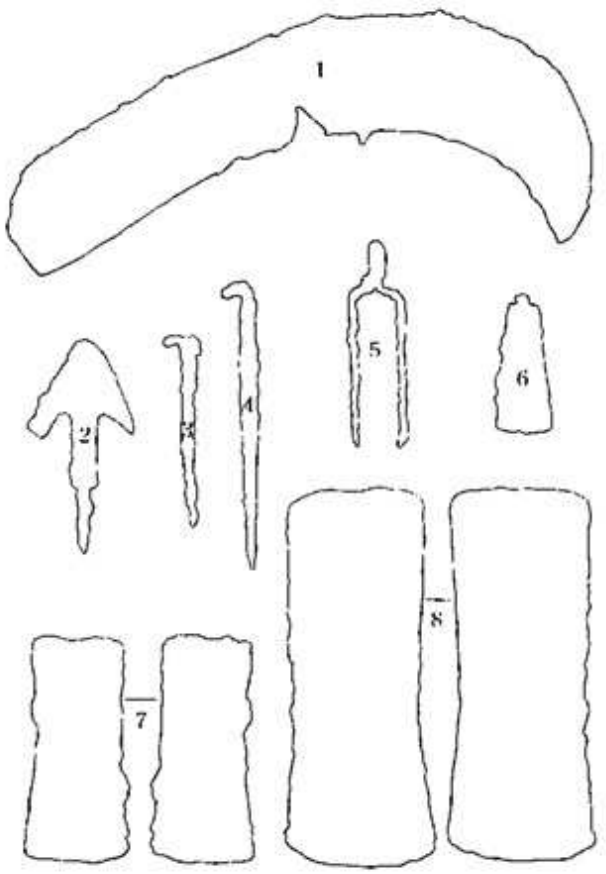


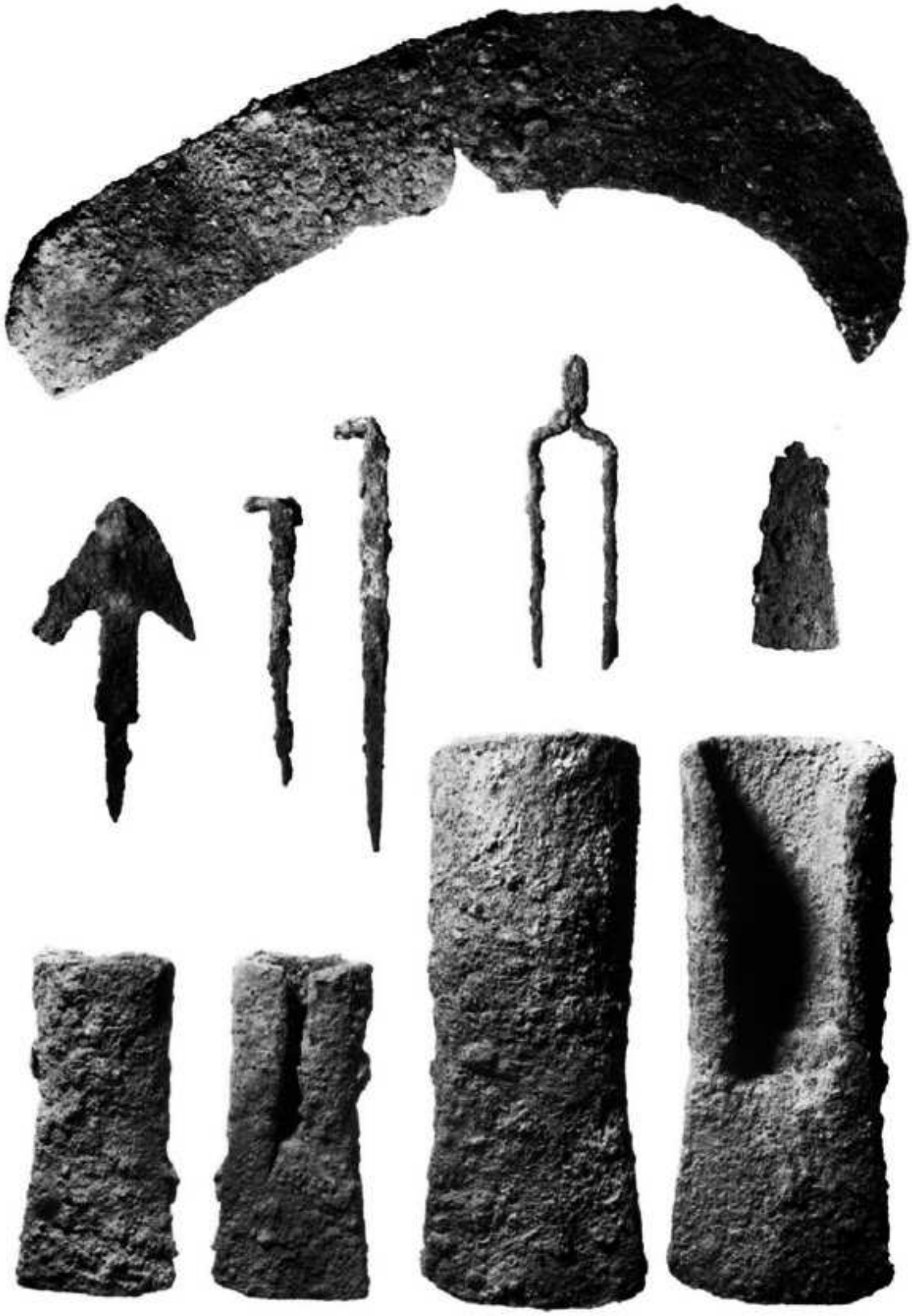

1
2
3
4
5
6
7


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10

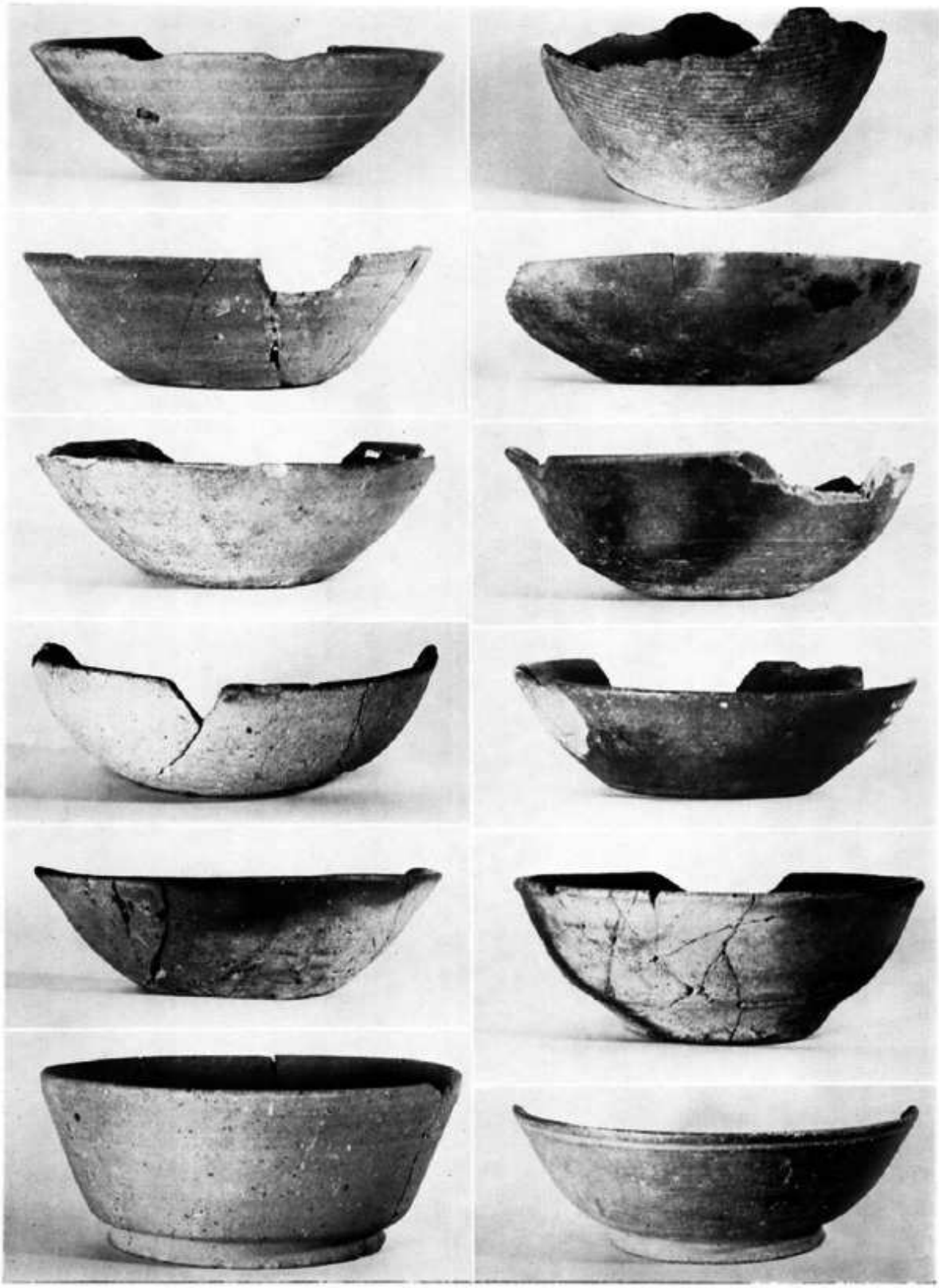



1
11
6
2
3
4
5
7
9
7'
9'
8
10
8'
10'

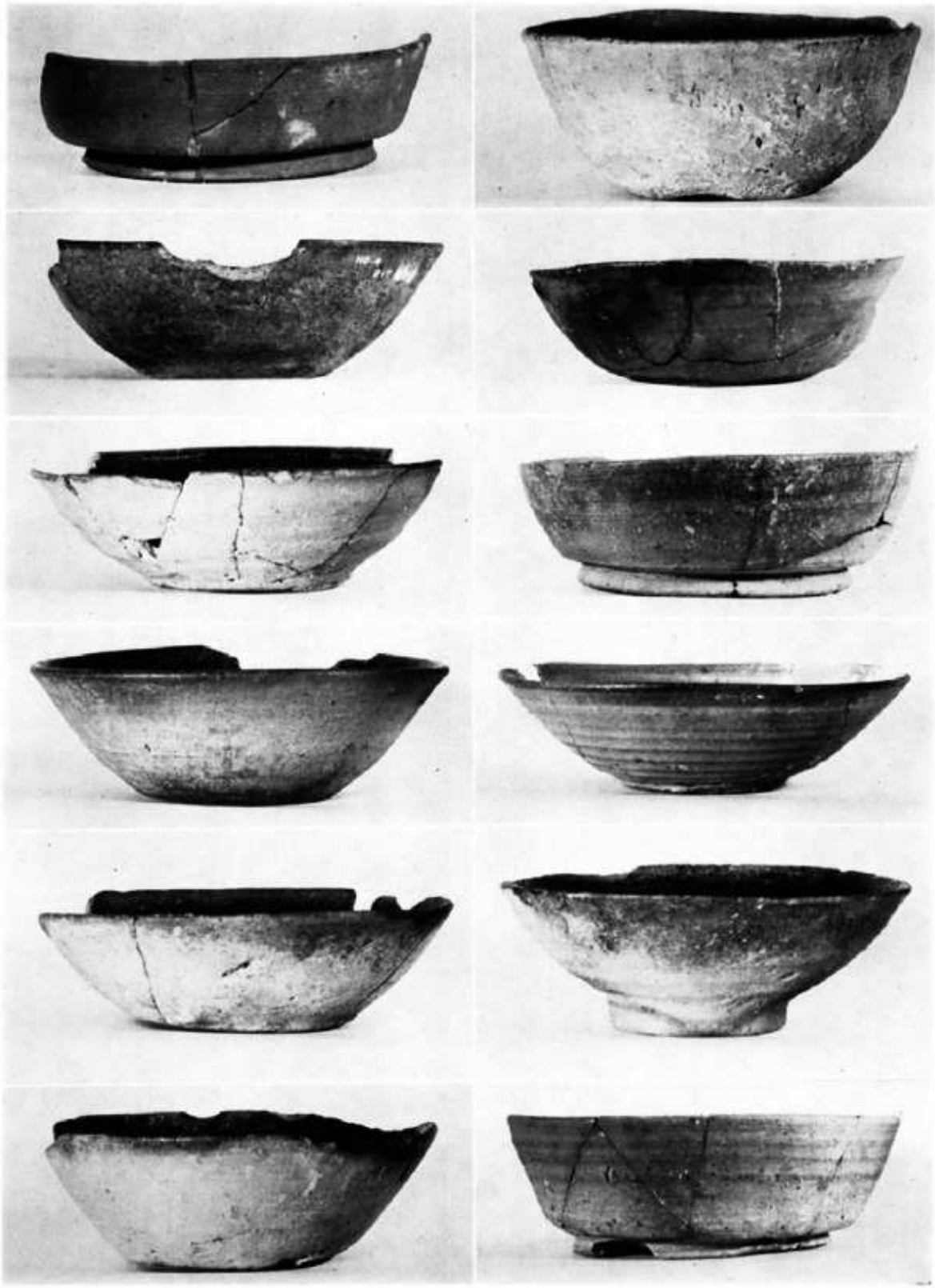

1
2
3
4
5
6
7
8

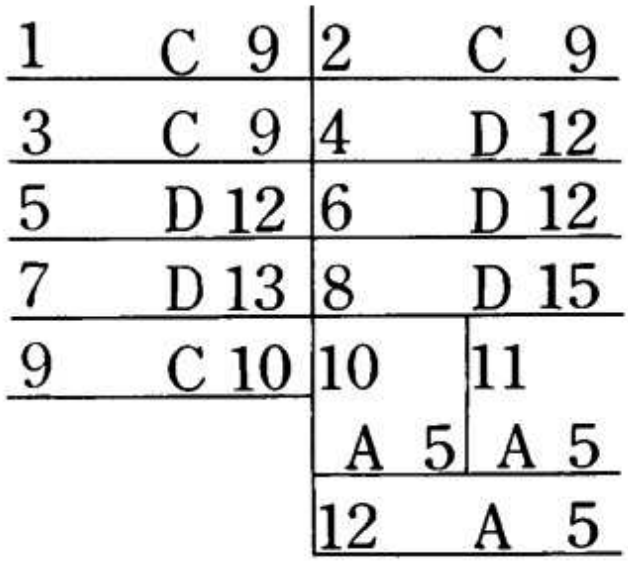


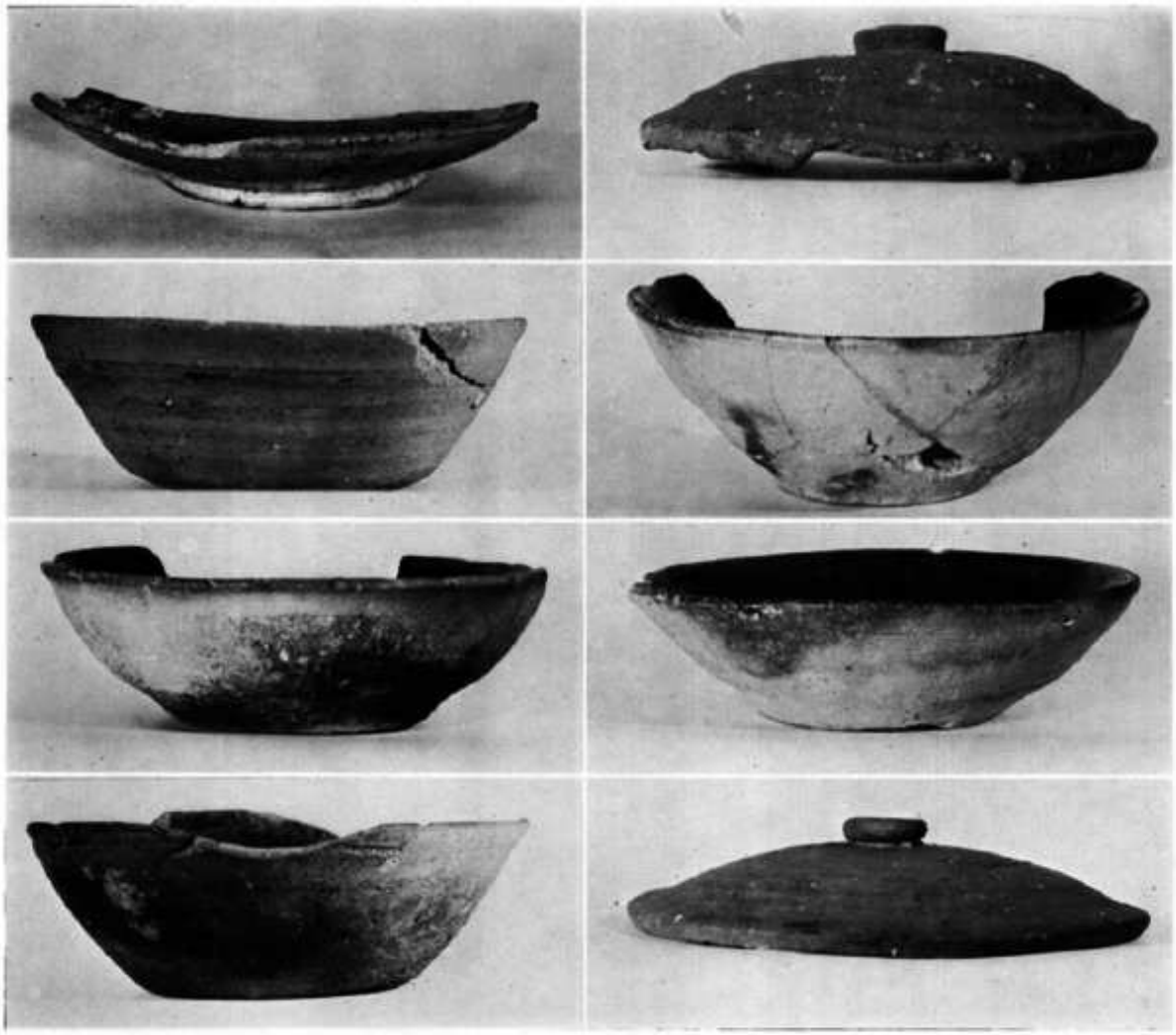
1 A 1	2 A 1
3 A 2	4 A 2
5 A 3	6 A 3
7 A 4	8 A 4
9 A 5	10 B 17
11 B 17	12 B 16

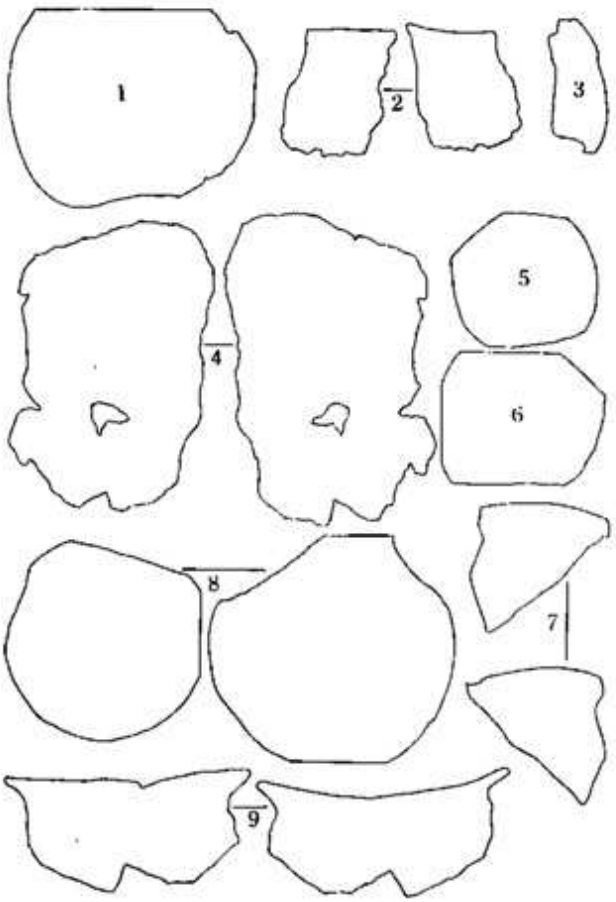


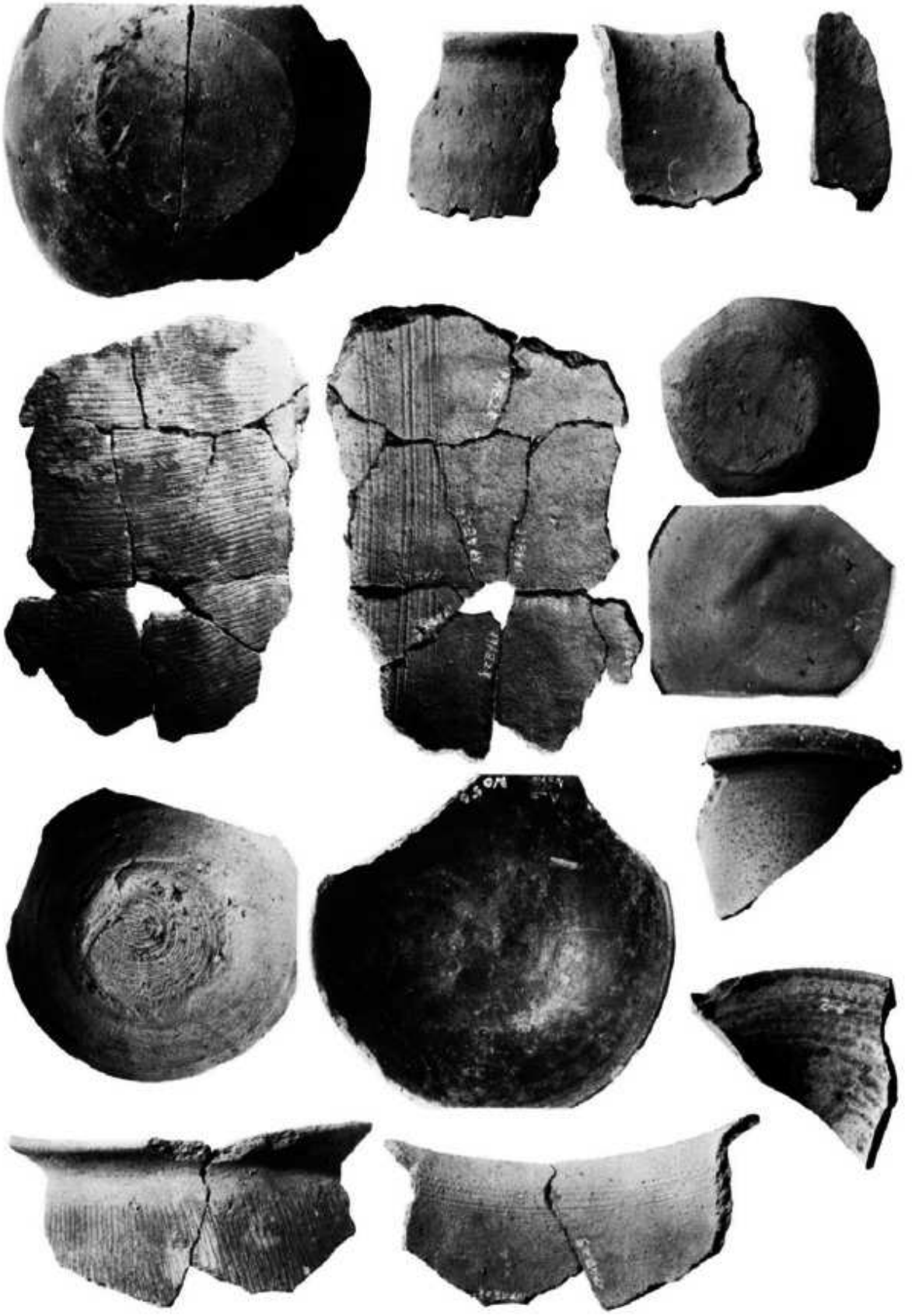
1	B 16	2	B 16
3	B 17	4	B 16
5	B 17	6	C 9
7	C 7	8	C 7
9	C 7	10	C 7
11	C 8	12	C 9

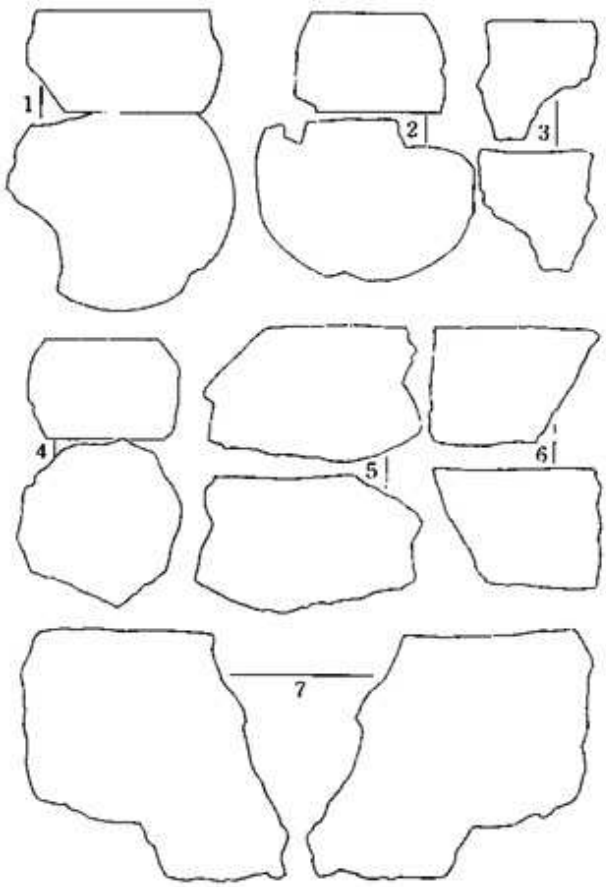


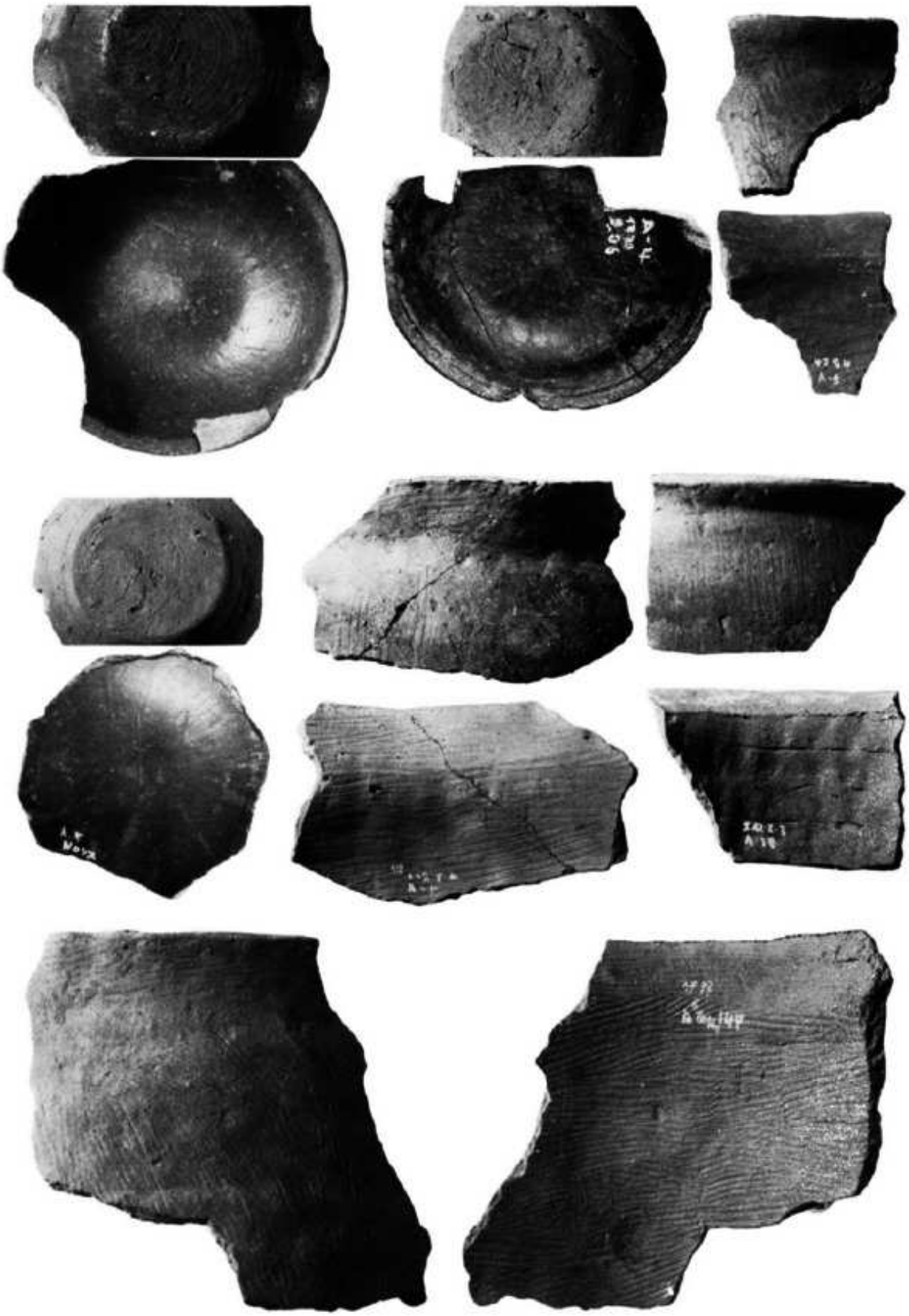

1 C 9
2 C 9
3 C 9
4 D 12
5 D 12
6 D 12
7 D 13
8 D 15
9 C 10
10 A 5
11 A 5
12 A 5

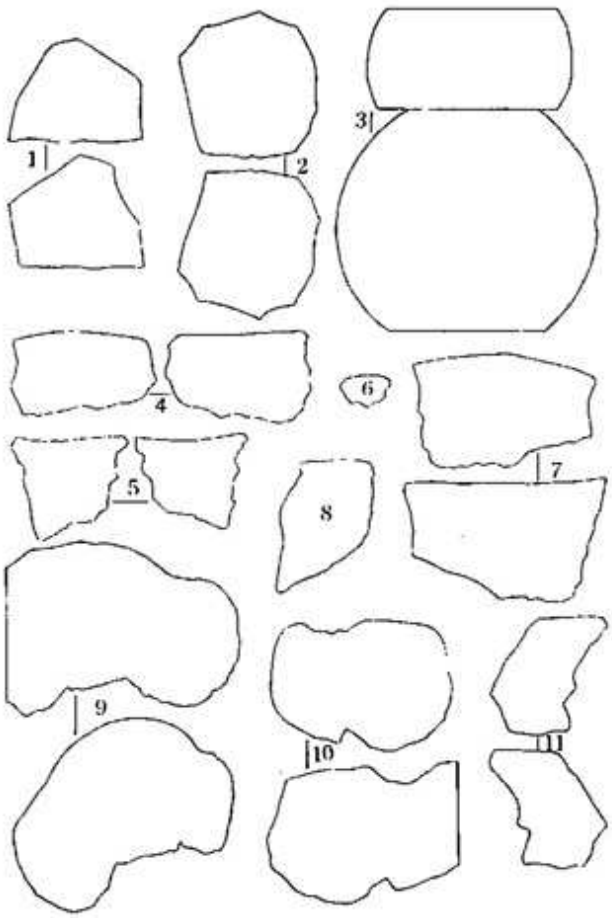


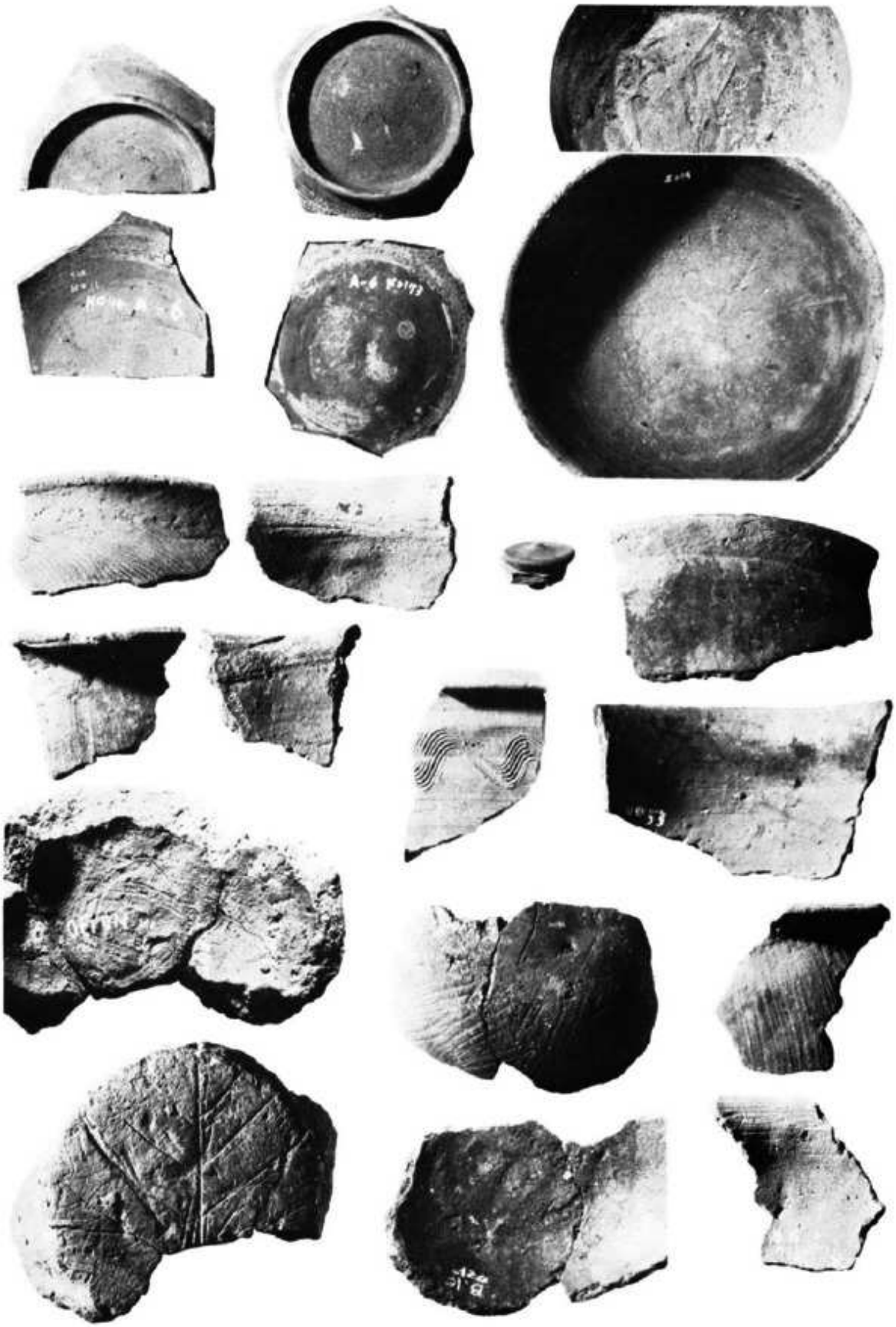

1
2
3
4
5
6
7
8
9

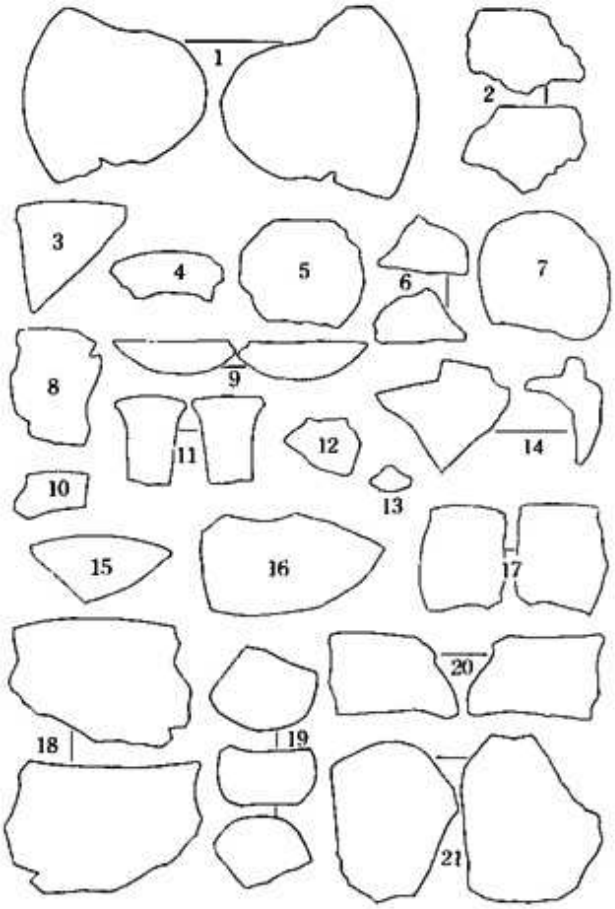


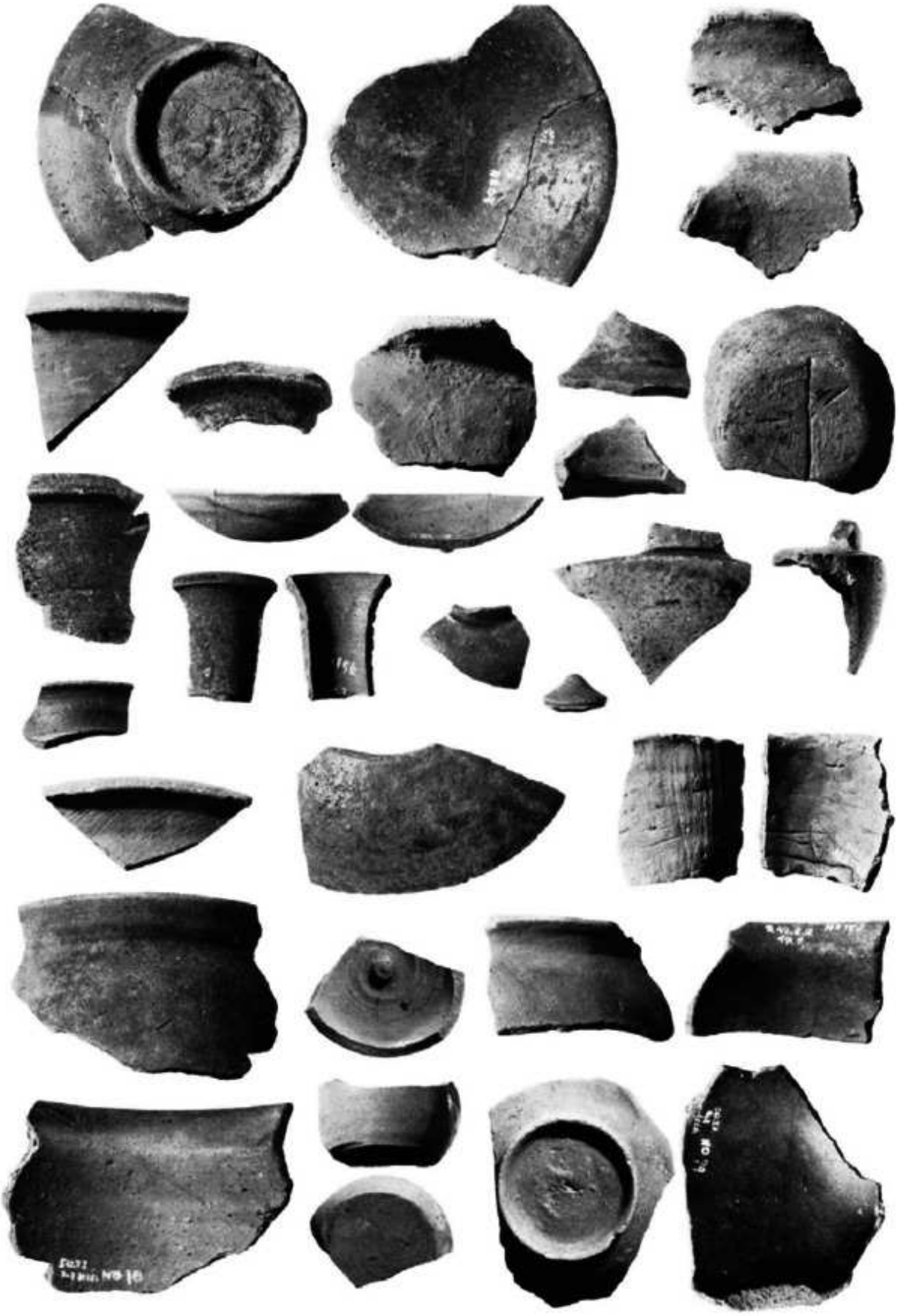

1
2
3
4
5
6
7

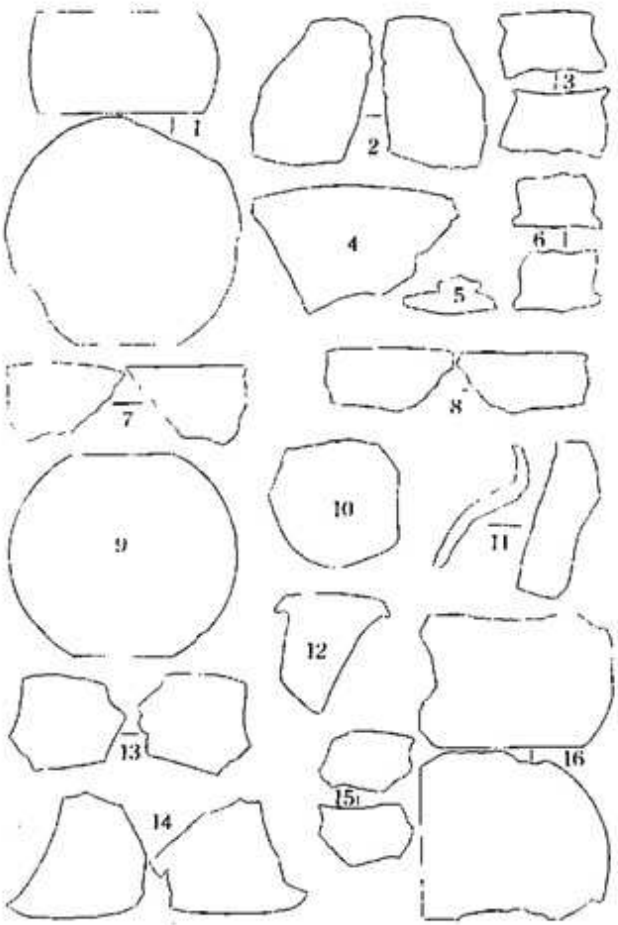


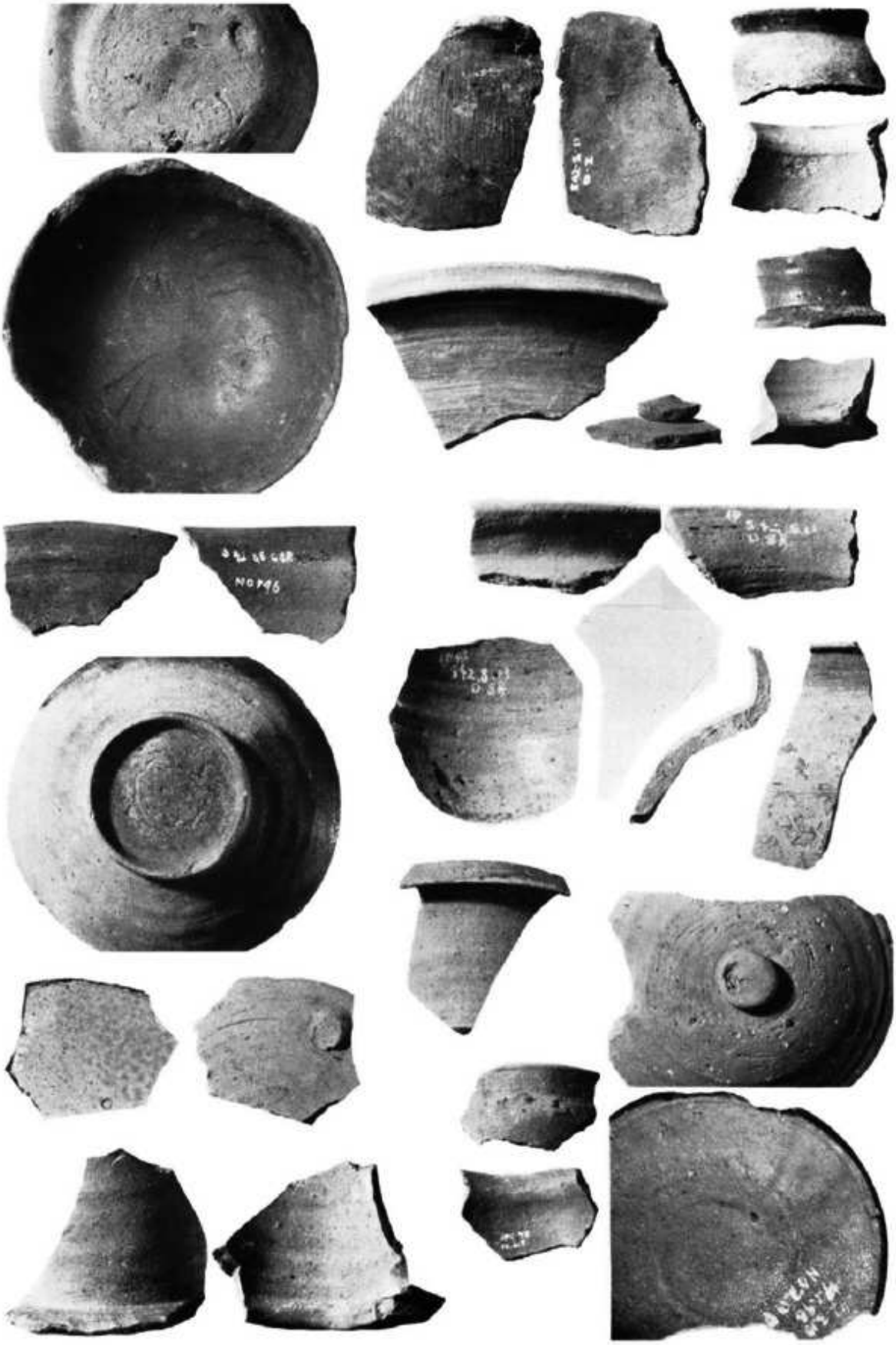

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11

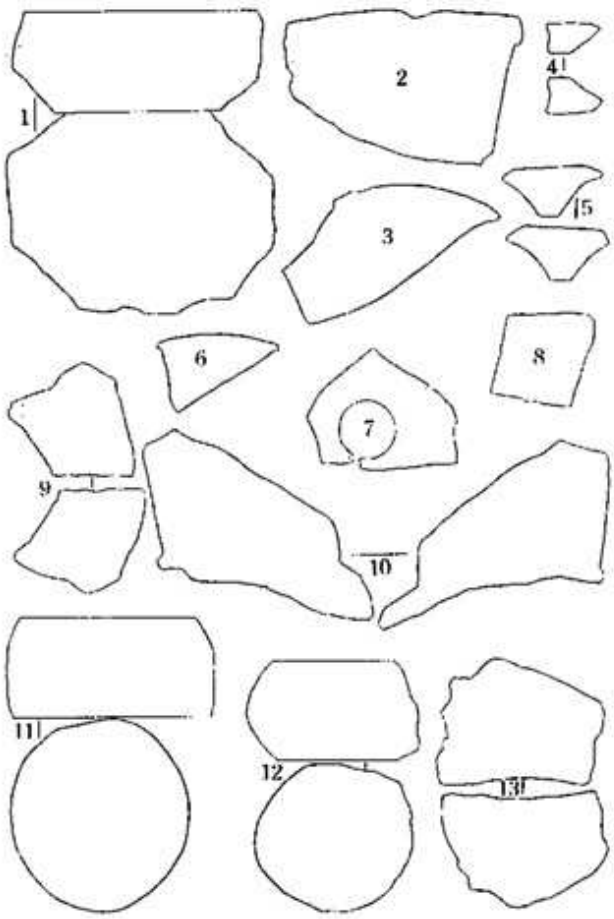


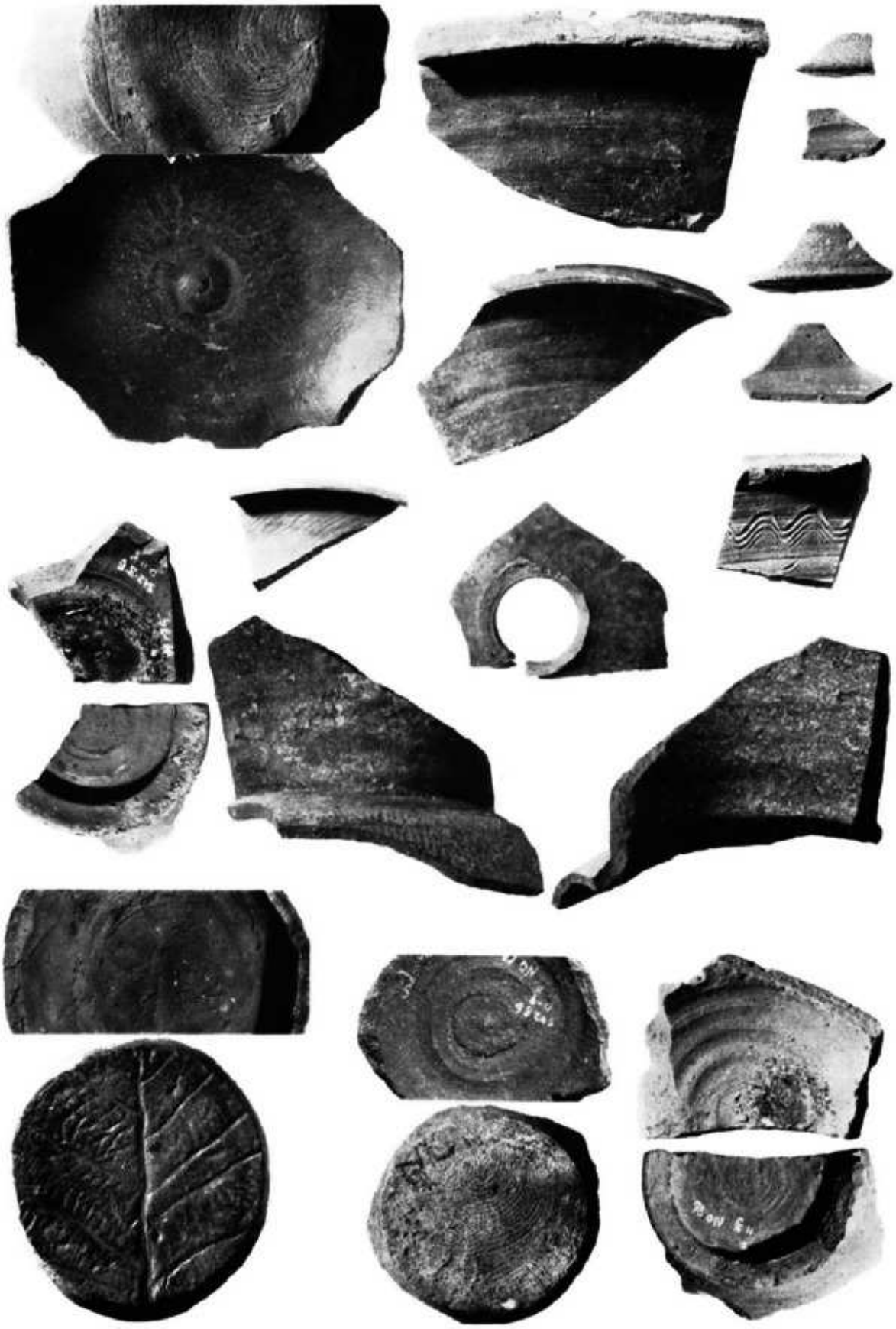

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21

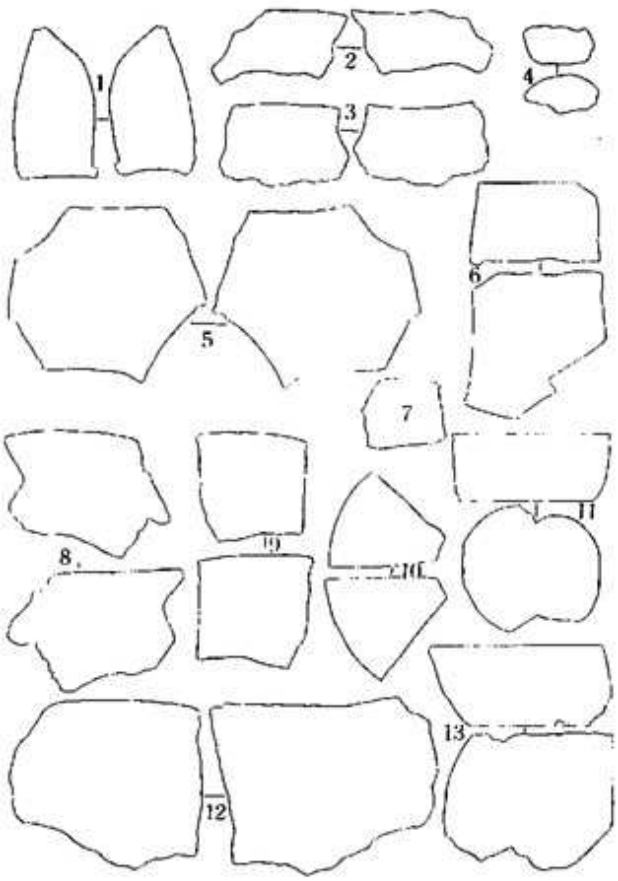


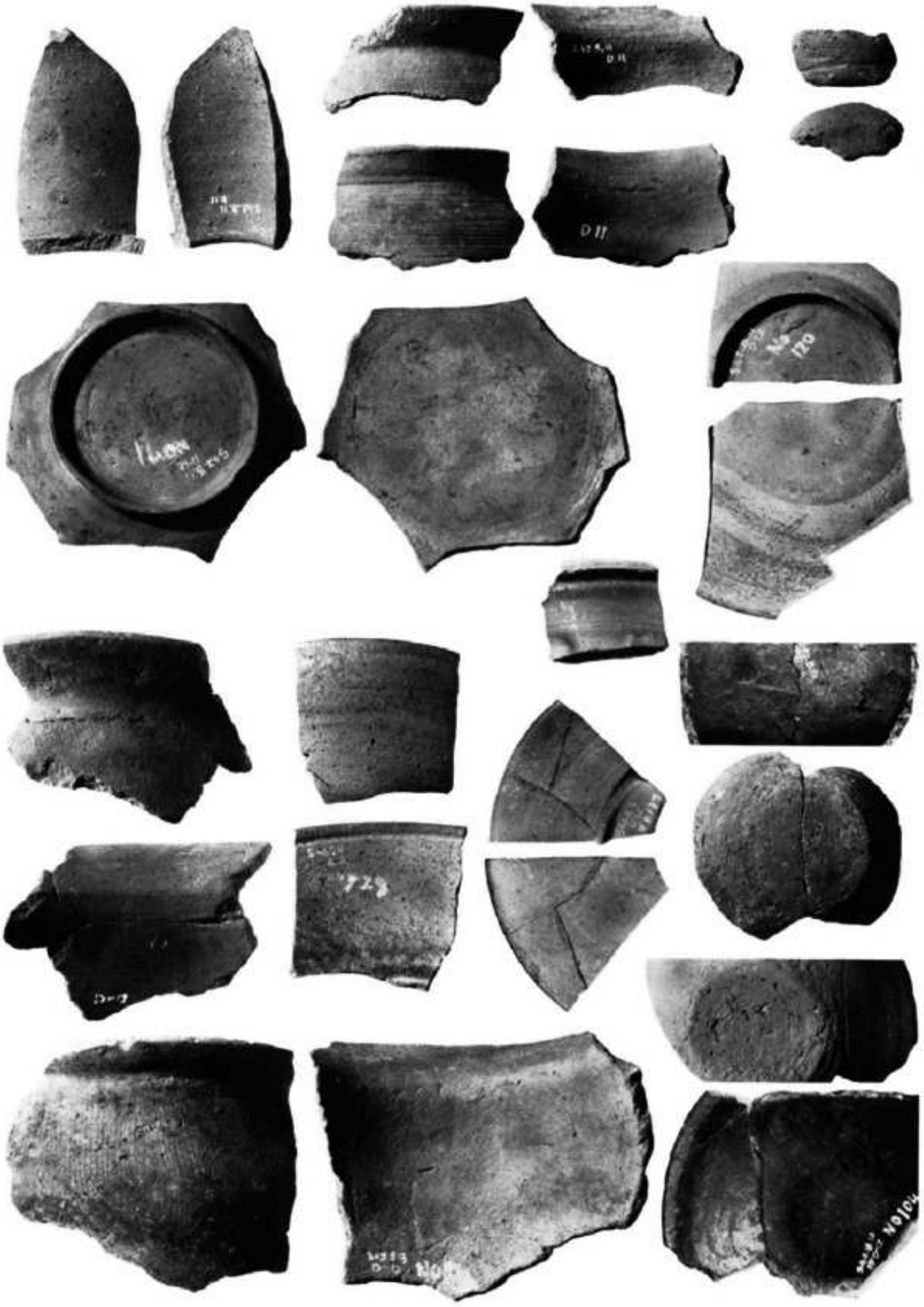

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16

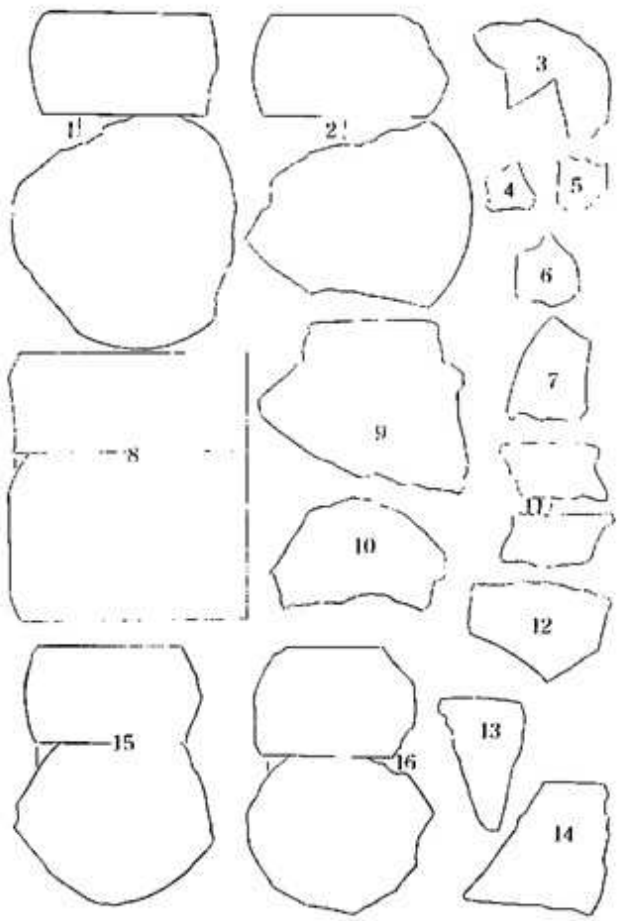


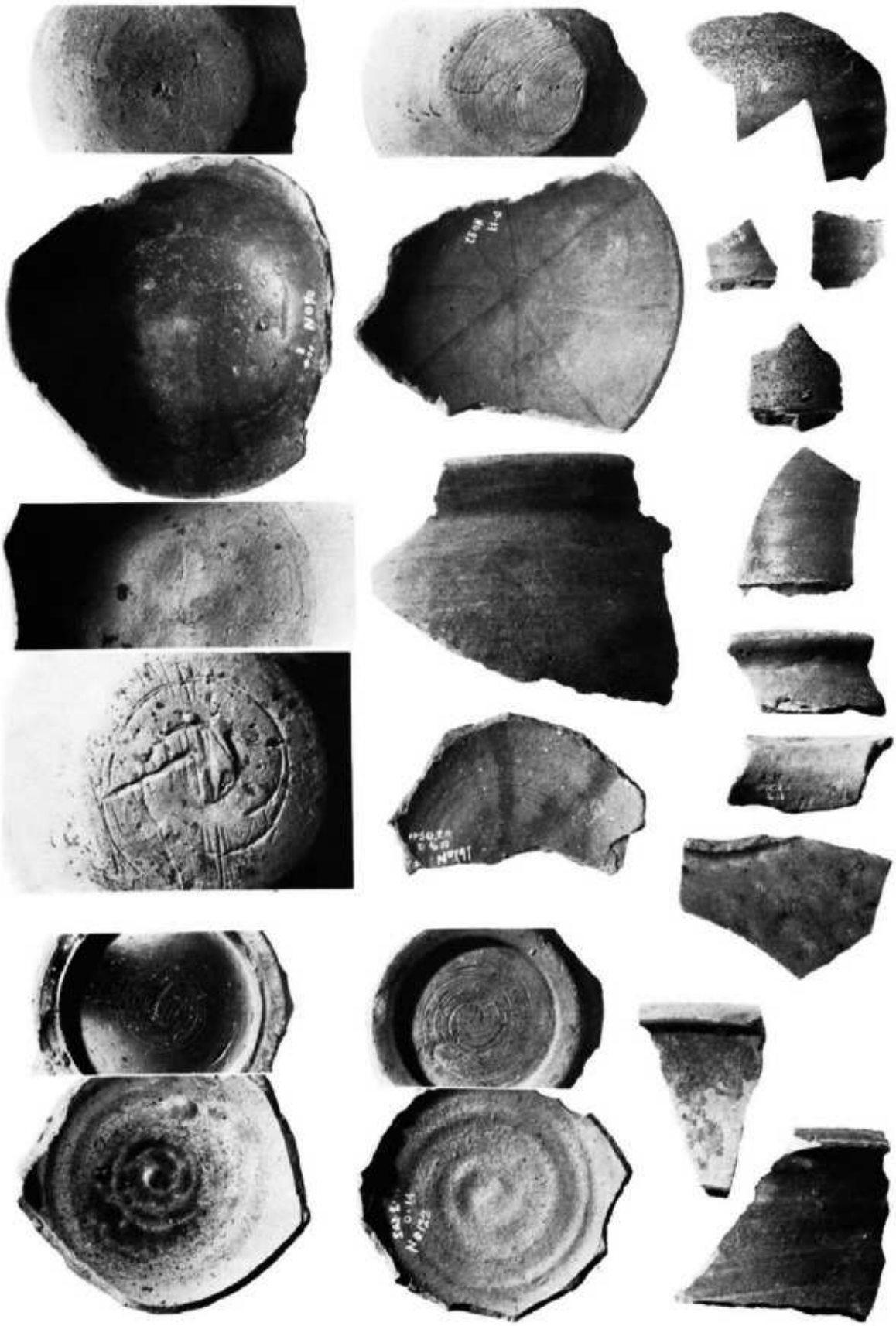

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13

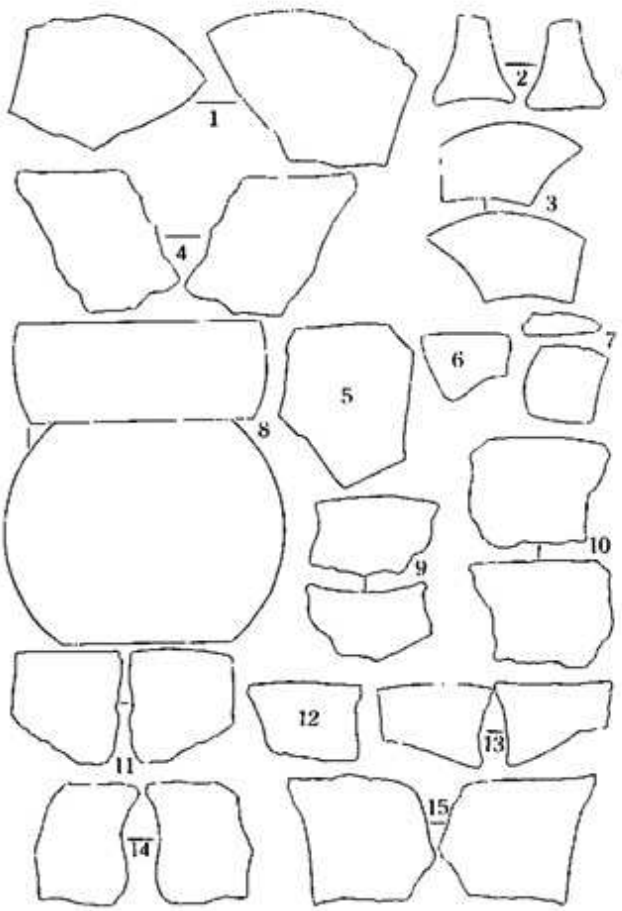


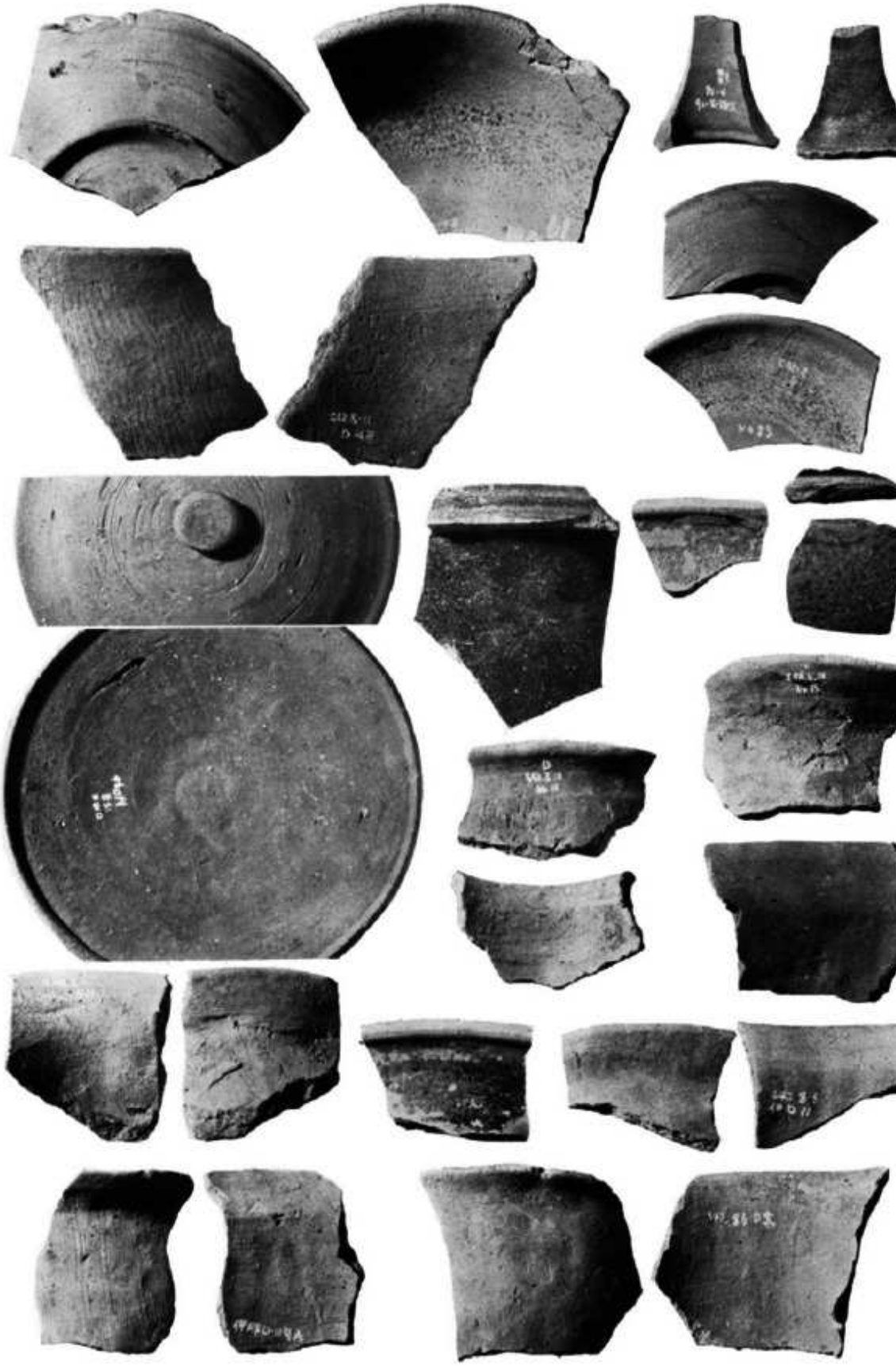

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13

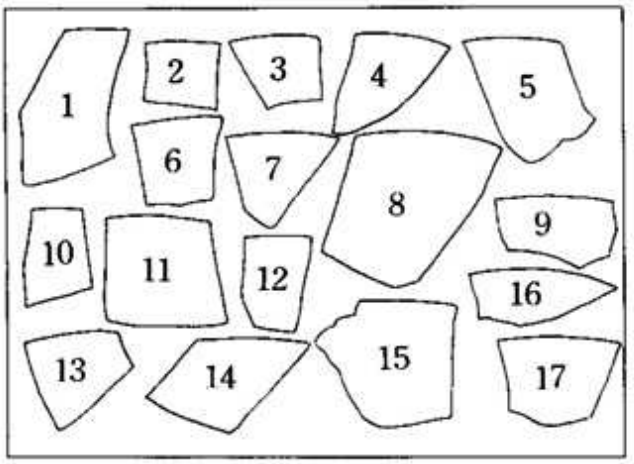


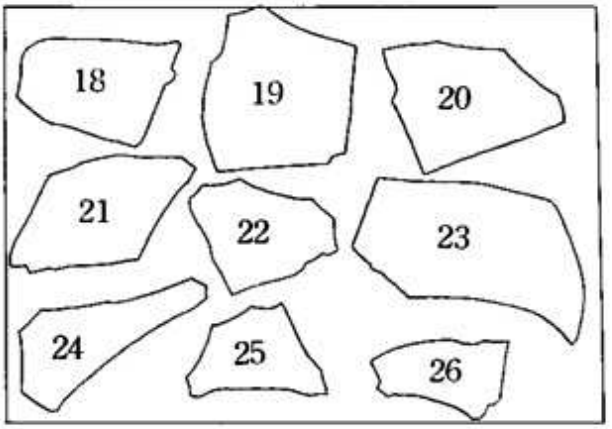

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
12
13
14
15
16

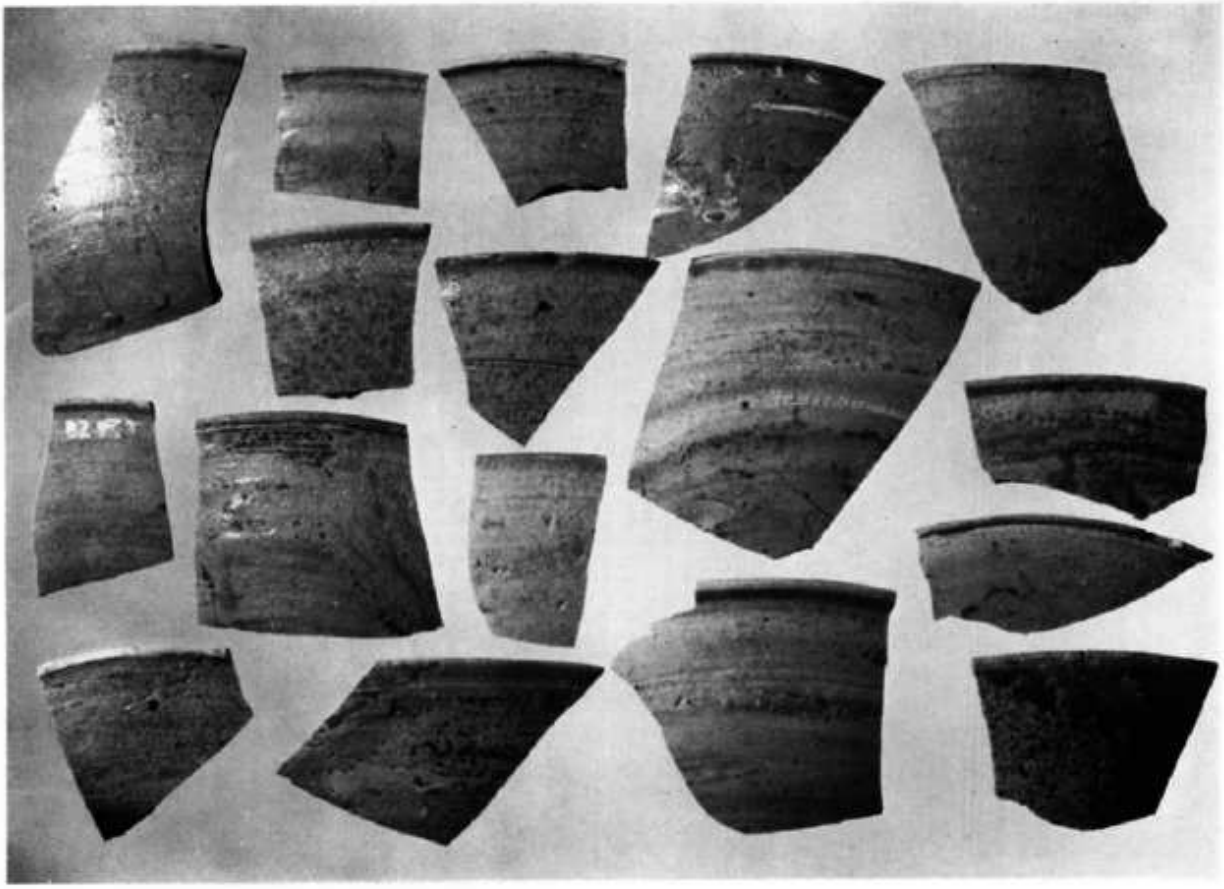


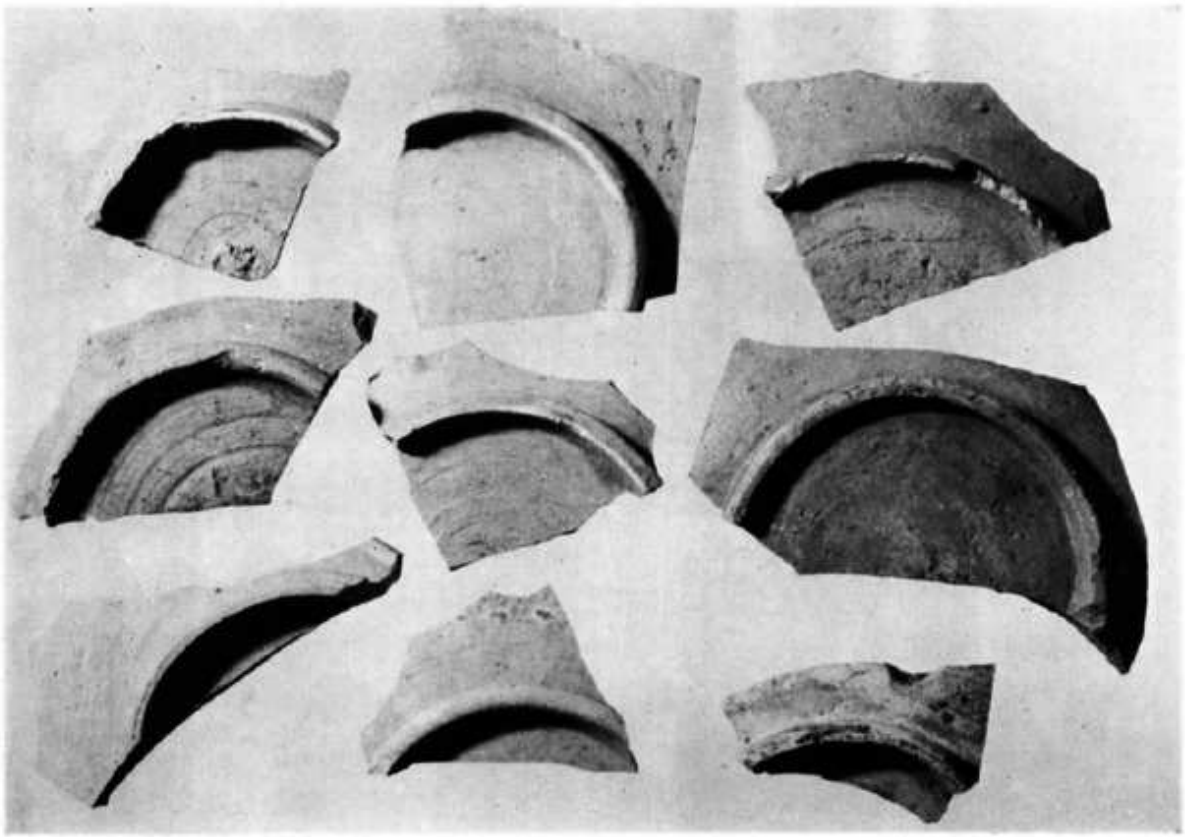

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15




1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
16
13
14
15
17

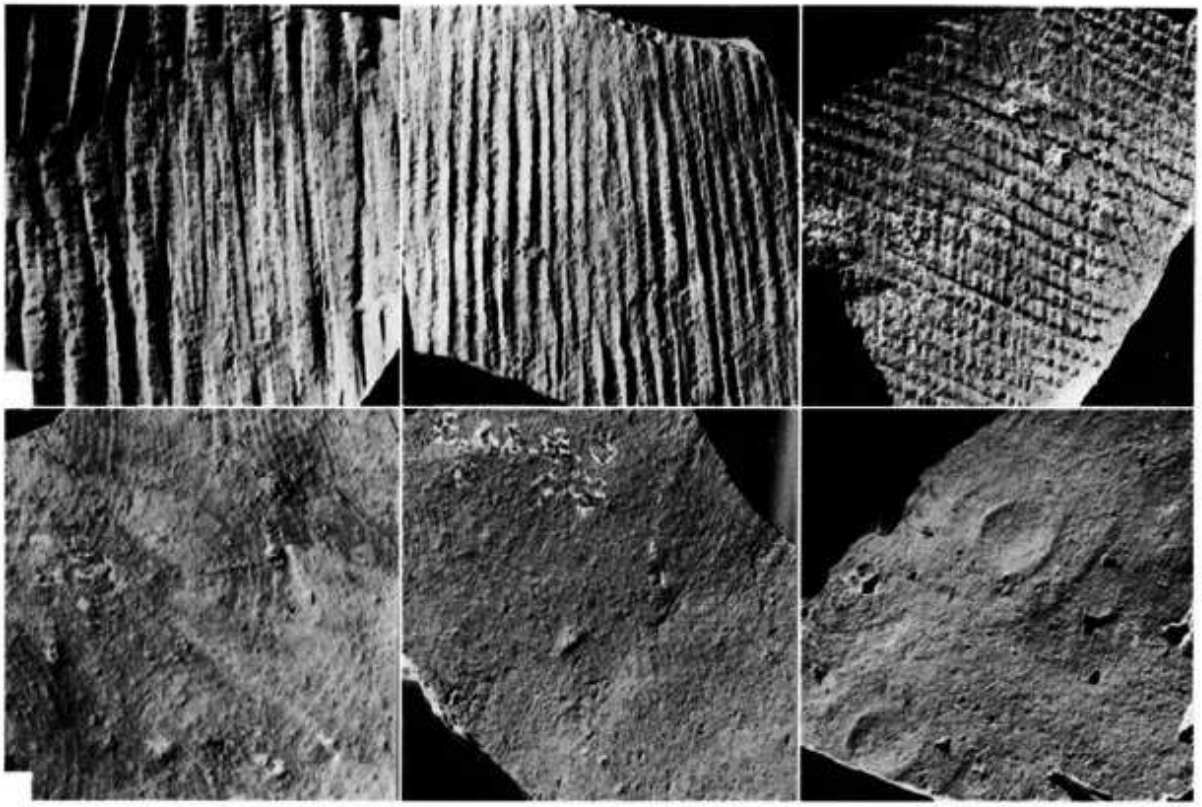

18
19
20
21
22
23
24
25
26

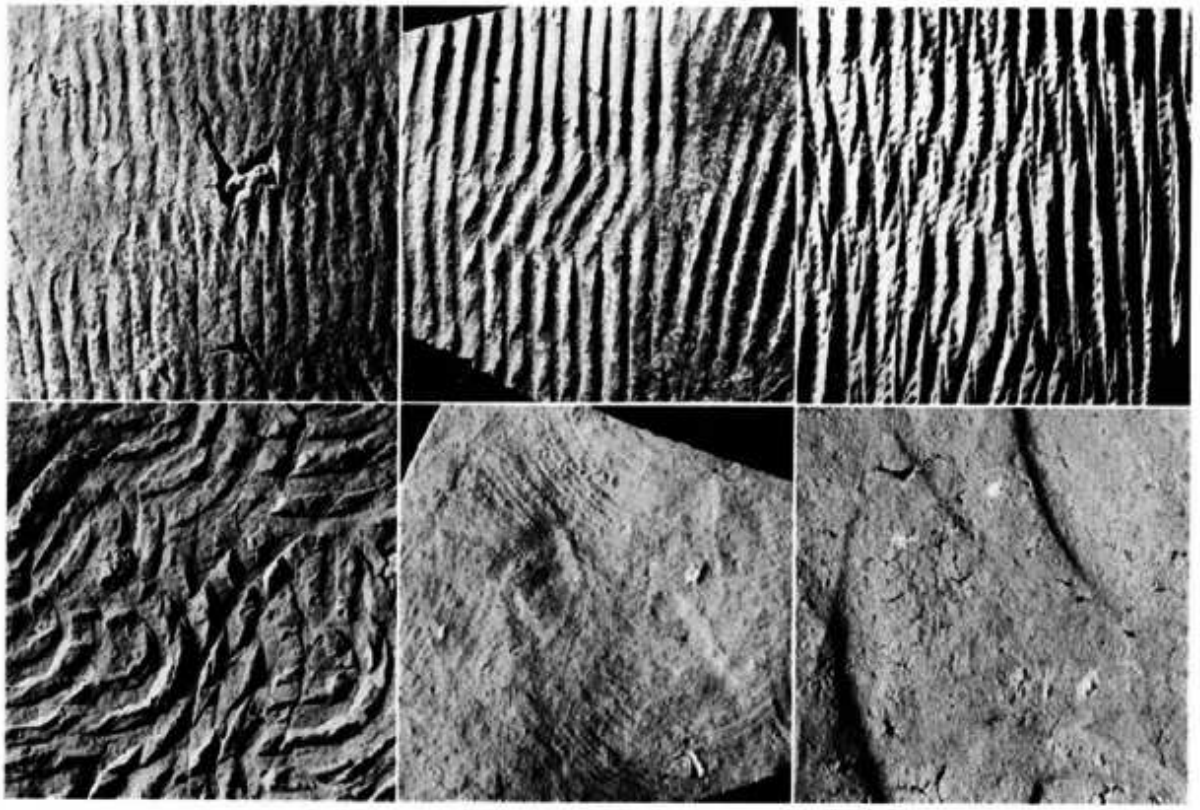




第33図版

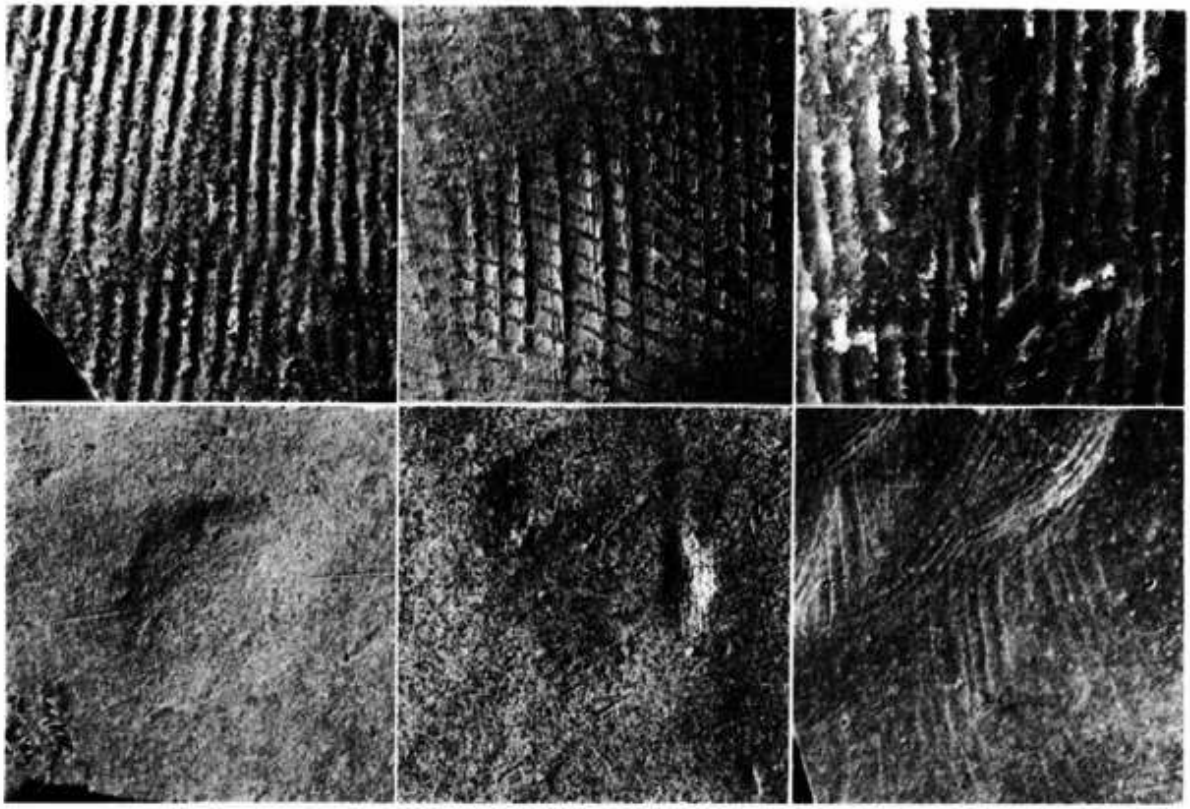
甕型須恵器体部内外面の叩き目文。

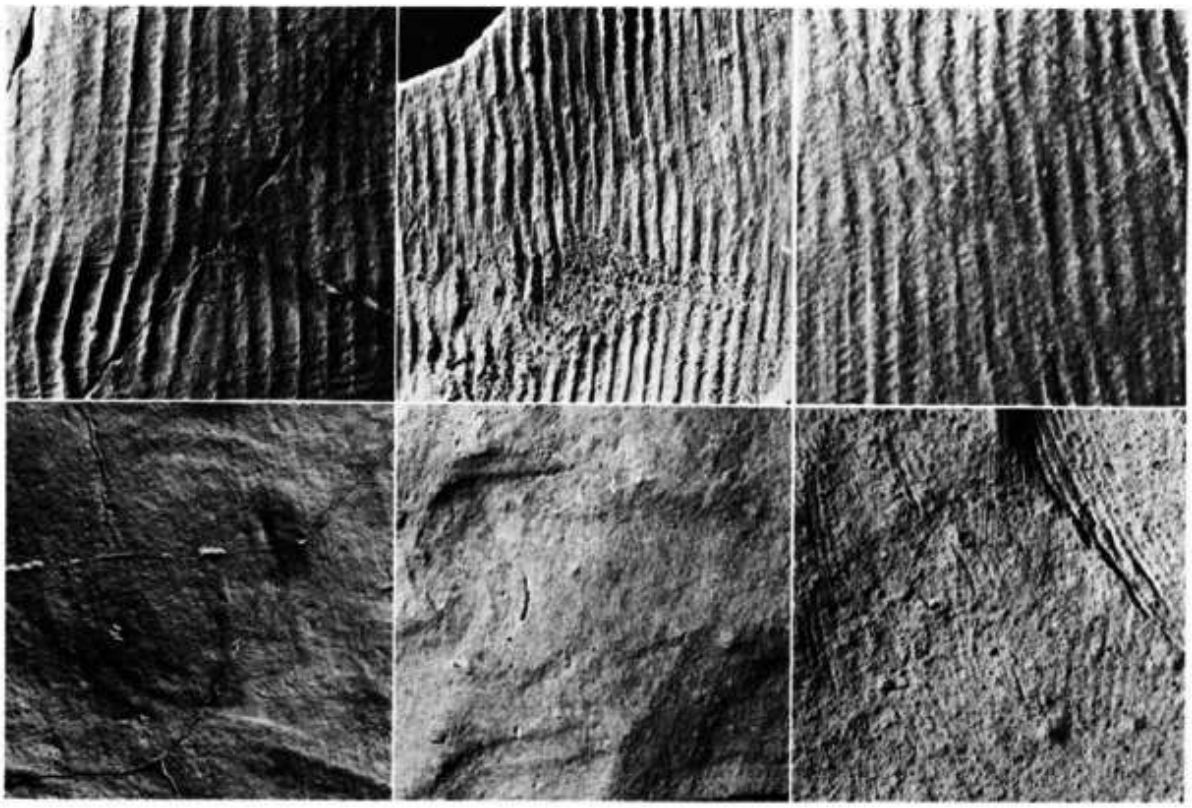




第34図版

甕型須恵器体部内外面の叩き目文。





「伊那・福島遺跡」

昭和43年12月10日　印刷
昭和43年12月20日　発行

編著者　大川　清
発行所　伊那市教育委員会
印刷所　長野市西和田470
信毎書籍印刷株式会社

〔非売品〕